

「罪と罰」

完全版（第一部）

目次

「罪と罰」

第一編

- 序、 はじめに
- 一、 屋根裏の生活
- 二、 作品の冒頭部分
- 三、 瀬踏み
- 四、 話し相手
- 五、 酒場での出逢い
- 六、 貧困と素寒貧すかんびん
- 七、 酒場の場面
- 八、 酒場での本文
- 九、 翌日の朝
- 十、 母からの手紙
- 十一、 手紙の吟味、
- 十二、 彷徨さまよひ
- 十三、 親友ラズーミヒン
- 十四、 悪夢
- 十五、 悪夢の謎解き
- 十六、 悪夢からの目覚め
- 十七、 草市場
- 十八、 運命の一瞬
- 十九、 草市場から帰る
- 二十、 準備と決行と二人の来客
- 二一、 自分の部屋へと帰る
- 二二、 第一編のまとめ
- 一、 老婆殺しのきっかけ
- 二、 老婆殺し
- 三、 リザヴェータの殺害
- 四、 無差別殺人者
- 五、 自爆テロ
- 六、 和解
- 七、 殺害後の展開

※ 参考文献

「罪と罰」(第一編)

序 はじめに

例えば、ドストエフスキの『罪と罰』という作品は、世界的にも非常に有名な作品であり、それゆえ、一度は読んでおくべき作品ということになるのだろうが、もちろん、その作品のすべての「内容」についてここで詳細に考察することはできないので、その中の「主要な部分」だけを拾い集めて考えてみたいと思う。そして、この「作品」を読むということは、すなわち、犯罪者の「心の中」（つまりは「心の闇」）へと深く入り込むことであり、それは、かなり辛い作業になるかと思うが、しかし、一度は徹底的に考えてみなければならぬ「問題」であり、それゆえ、順を追って考えてみたいと思う。

一、屋根裏の生活

まず最初は、主人公（ラスコーリニコフ）であるが、この人は、次のような生活をしてきた人であった。つまり、「……彼の部屋は、高い五階建ての屋根裏にあり、低い天井だの、狭苦しい部屋だのは、心や頭を押しつけてしまうものだ。僕は、どんなにあの狭苦しい部屋を憎んだらう。しかも、やはりそこを出ようとはしなかった。わざと出ようとしなかったんだ。夜も、昼も、外へ出ようともしなければ、働こうともせず、物を食おうとさえしないで、始終寝そべってばかりいたんだ。ナスターシャが持つてくれば食うし、こなければ、そのまま一日でも過ごしてしまった。また、勉強をしなければいけないのに、本は売り飛ばしてしまったし、机の上のノートや手紙の上には、今でも一寸もほこりがたまっていく。僕はむしろ、寝て考えることが好きだった。そして終始考えていた。しかも、いろんな変てこな夢を見ていた。……その頃からである。あの『考え』（老婆殺し）が浮かんで来たのは。そして、僕は、それをやっつてのけたいと思っただ。……」

彼は、出口のない重苦しい「孤独」の中にあっただ。彼の「話し相手」は、「自分自身」だけであり、ほかに誰もいなかった。つまり、彼は、まさに自分の「心の中」にどっぷりと閉じ籠もっていたということである。そして、このような状態（つまり自分の「心の中」にどっぷりと閉じ籠もっている状態）を、このまま何年を続ければ、やがては「発狂」するか「自殺」するしかない。道は、二つに一つである。どちらにしても「身の破滅」である。それでは、なぜ「自殺」なのか？ それは、「発狂」する前に、自ら「命を立つ」ということである。それゆえ、どうしても「一歩」を踏み出さなければならない。この重苦しい出口のない「孤独」（このどうにもならない状況）から脱出するためには、思い切った「一歩」を踏み出さなければならない。そして、彼にとつての思い切った「一歩」とは、まさに「老婆殺し」に他ならなかったということである。

二、作品の「冒頭」部分

それでは、有名なドストエフスキの『罪と罰』の「冒頭」部分であるが、それは、次のような内容から始まるものである。

*

*

七月初め、恐ろしく暑い時分のこと、とある夕、方近く、一人の青年が、S横町の借家しやくや

人からまた借り、(人が借りている部屋をさらに借り)ていた自分の部屋(屋根裏)から通りへ出て、何となく心のきまらないさまで、のろのろとK橋のほうへ歩いて行った。

彼は運よく階段で主婦(大家)と出くわすのを免れた。彼の部屋は、高い五階建ての屋根裏にあつて、住居というよりも押入れと言つたほうがいくらいのものであつた。女中と賄い付きで彼にこの部屋を借していた下宿の主婦(大家)は、彼の一階下の別のアパートに住んでいたのだから、通りへ出る時には、どうしても彼は、階段のほうへ向つていたいといつてもいっぱいに開け放しになつてゐる、主婦(大家)の台所のそばを通らなければならなかつた。そして、若い男は、そこを通り過ぎるたびに決まつて、一種病的な、おどおどした気持を感じるのだったが、一方ではまたそんな気持になるのを恥じて、そのために顔をしかめるのだった。下宿代がだいぶんたまつていたので、主婦(大家)と顔を会わせるのがこわかつたのである。

もつともそれは、彼がそれほど臆病で、意気地がなくなつていたというわけではなく、むしろ反対なくらいだつたのだが、先頃から彼は、ヒポコンデリイ(気鬱症)に類した怒りっぽい、つきつめた気分になつていて、すっかり自分の中に閉じこもり、すべての人から遠ざかつていたので、主婦(大家)にかぎらず、誰と会うことも恐ろしかつたのである。彼は貧乏に押しひしがれてはいたけれども、このせつぱつまつた状態すら、近頃ではあまり苦にならなくなつていた。是非しなければならぬ日々の仕事をも、彼は全然放擲して顧みようともしなかつた。本来彼は、下宿の主婦(大家)などが自分に対してどんなことを考えだそうと、そんなことを恐れるような男ではなかつた。けれども、階段の上に立ち止まらされて、自分にはなんの用もない、愚にもつかぬ世迷言や、うるさい払いの催促や、脅し文句や、泣き言などをくどくどと聞かされて、自分でも逃げをうったり、あやまつたり、嘘をついたりするよりは——まだしも、猫のように階段をすべりおりて、誰にも見られないように逃げてしまふほうがよかつたのである。

ところが、この時には、通りへ出てしまつたと、自分が借りのある女(主婦)に会うぐらいのことをこんなに恐れたのに、われながらあきれかへつた。

「……どんなことでも断行しようと思つていながら、こんなくだらないことにびくつくなんて！」と、彼は変な微笑を浮かべながら考へた。「……フム……そうだ……何だつて人間の手に出来ないことはないのに、ただただ臆病なばかりに、それをみな素通りさせてしまふんだ……これはもう間違ひなく公理だ。……ところで、人間が一番恐れているのは何だろう？ 新しい一歩、新しい自分自身の言葉、それを一番恐れているのだ……だが、それにしても、おれはちとしゃべりすぎるぞ。しゃべつてばかりいるから何もしないんだ。いや待てよ。何もしないから口数が多くなる——こうも言えば言えるからなあ。これはおれが、このひと月、夜も昼もあの隅っこにごろごろして……夢のようなことを考へているうちに、ついおしゃべりを覚えてしまったのだ。それはそうと、なんだつて今頃おれは歩いてゐるのだろうか？ (本文)」

*

*

さて、ここで、最も大事な言葉は、「……どんなことでも断行しようと思つていながら、こんなくだらないことにびくつくなんて！」と、彼は変な微笑を浮かべながら考へた。「……フム……そうだ……何だつて人間の手に出来ないことはないのに、ただただ臆病なばかりに、それをみな素通りさせてしまふんだ……これはもう間違ひなく公理だ。……とこ

ろで、人間が一番恐れているのは何だろうか？ 新しい一歩、新しい自分自身の言葉、それを一番恐れているのだ……」とある。——この重苦しい出口のない「八方ふさがり」（孤独）状態（このどうにもならない状況）から脱出するためには、思い切って「新しい一歩」を踏み出さなければならぬ。そして、彼（ラスコーリニコフ）にとつての思い切った「新しい一歩」とは、すなわち、それは、まさに「老婆殺し」に他ならなかったのである。

三、瀬踏み

彼は、あてもなく迷っていた。ほんとにあれがおれに出来ることだろうか？ あれがまじめな話だろうか？ ……どうしてどうして、まじめどころか、空想のために空想して、ひとりで面白がってるだけのことだ。おもちゃだ！ うん、ほんとうにおもちゃだ！

通りは、恐ろしい暑さだった。その上、息苦しさ、雑踏、いたるところにある石灰、木材、煉瓦、埃、別荘を借りる工面のつかぬ（いわば裕福ではない）ペテルブルグ人の誰もがよく知っている一種特別な夏の悪臭——こういったものがみな一つになって、それだけでなく調子の狂っている青年の神経を、いやが上にも不愉快に刺激するのだった。街のこの部分に特に多い酒場から来る堪えがたい臭気、休みの日でもないのにひっきりなしにぶつかる酔いどれなどが、こうした情景の厭わしい陰鬱な色調をいやが上にも一層深めているのである。とたんに深い嫌悪の色が、若い男の華奢な顔にさつとひらめいた。

ところで、彼は素晴らしい美男子で、目は黒く美しく、髪は濃い亜麻色で、背は人並より高くすらりとして、恰好のいい男であった。一方、こんなぼろを着て昼日向町へ出るの尻込みしただろうと思われるほどみすぼらしいなりをしていた。もちろん、最初、あの「考え」（老婆殺し）が浮かんできた時には、自分でもこの空想を信じてはいなかった。ただその醜悪な、しかし魅力の強い大胆さで、自分を刺激していたに過ぎなかった。それが、ひと月たった今では、もう大分考え方が変わって来て、自分の「無気力と不決断」に対してあらゆる自嘲的な独語（独り言）を逞しくしながら、いっしかその「醜悪な」空想を、一つの計画として考えることに慣れてしまっていた。もつとも、まだそれを信じるところまでは行っていないが。しかし、彼は、現に今、その計画の瀬踏み（下見）をするために、七月の暑い夜、こうして歩いているのであり、その（ドキドキする）胸騒ぎは、一歩一歩と絶えずその烈しさを増して行くのであった。

そして、心臓の痺れるような感じと神経性の戦慄とを覚えながら、彼は、一方の壁は堀割に、いま一方の壁は某×街に面している、恐ろしく大きな建物に近づいた。この建物は、全体が小さな「貸間」から成り立っていて、そこにはあらゆる種類の職人——仕立屋、鍵前屋、料理女、さまざまドイツ人、自分を売って生きている娘、下級官吏などが住んでいた。で、出る者と入る者が、二カ所の門の下と、二カ所の中庭とで絶えずごたごたしていた。三、四人の家番が勤めていたが、若い男は、その一人にも出会わなかったのになく満足しながら、門をはいると、すぐ右手の「階段口」へこつそりとすべり込んだ。その階段は、暗くて狭い「裏階段」だったが、彼はもう万事心得て研究済みだったので、彼にはこういう状態がすべて気に入っていた。——こうした暗闇の中では、どんなに好奇心の強いまなざしも少しも危険ではなかったから。「……今からこんなにびくびくして、いざ実行という段になったら、ほんとにどうなることだろうか？」と、彼は、四階にあがっ

て行きながら、ふと考えた。そこでは、ある住居から家財を運び出して兵隊上りの人夫どもが、彼の行手をふさいだ。彼はもう以前から、その住居にはある家族持ちのドイツ人の官吏が住まっていることを知っていた。——「……うん、あのドイツ人が引越して行くんだな。すると、四階には、この階段には、この踊り場には、当分婆さんの住居だけがふさがつてることになるんだ。こいつはうまいぞ！ 万一の場合にも……」と、彼はまたしてもこんなことを考えて、老婆の住居の呼鈴を鳴らした。

呼鈴は弱い音をたてて鳴った。まるで銅ではなくて鉄力ででも出来ているように。こうしたアパートのこうした小さい住居には、大抵どこにもこうした呼鈴がついている。が、彼はこの呼鈴の音を忘れていたので、今この一種特別な響きは、突然彼に何事かを思い起こさせ、何事かをありありと思ひ浮べさせたようであった。彼はぶるつとひとつ身ぶるいした。この時には神経がすっかり弱っていたのであった。(まず、主人公はすでに三年間も屋根裏に住んでいる。が、屋根裏なので、恐らく、呼鈴は付いて居らず、また、呼鈴は他人の訪問を告げる音であり、他人の訪問を好まぬ孤独な彼には、一瞬ドキツとする音であり、それゆえ、彼はぶるつとひとつ身ぶるいしたこともなるのだろう。)

* * *

さて、自分の家の門口から(きつちり七百三十歩)、(これは、何時だったか空想に夢中になつていた頃に、一度それを数えてみたのであり)、それほど遠くない、目的の「金貸しをしている老婆のアパート(四階)」へと到着した。彼は、呼鈴を鳴らし、暫くすると、ドアがほんのわずか開かれて——その隙間から住居の女主人が、さも胡散らしく(疑わしく)じろじろと客の様子をうかがった。そしてその小さな眼だけが、暗闇の中に光つて見えた。けれども、踊り場に大勢人がいるのを見ると、老婆は気が強くなって、ドアをすつかり開けたので、若い男は敷居をまたいで、板壁で仕切られた暗い室へ入った。仕切りの向うは狭い台所になつている。老婆は無言で彼の前へ突つ立ち、物問いたげに相手を見つめていた。それは、意地悪そうな鋭い眼と、小さく尖った鼻をした、小柄な、しなびたような六十恰好の老婆であり、頭には何もかぶっていなかった。まだいくらかも白くなつていない、全体に亜麻色をした髪には、油をこてこてに塗りつけてあった。鶏の足に似た細長い首にはフランネルのぼろが巻きつけられ、肩からはこの暑いのに、一面にすり切れて黄色くなつた毛皮の上着がだらりと下がっていた。老婆はひっきりなしに咳をしたり、喉を鳴らしたりした。彼女を見た若い男の目に何か特別な表情でもあつたのだろうか。突然、老婆の眼にはまた先ほどと同じ猜疑の色がひらめいた。

そこで、主人公は、「……ラスコーリニコフですよ。大学生の、ひと月ばかり前に伺つたことのある……」と、もつと愛想よくしなくてはいけないと思ひ出して、彼はちよつと軽く会釈をして、こう呟いた。「……覚えてますよ。よく覚えていますよ。あなたのお出でになつたことはね」と、老婆はやはり彼の顔から、そのいぶかしげな眼を離さないで、はつきりと言つた。「……ですからその……実はまた同じ用でね……」と、ラスコーリニコフは、老婆の疑い深いのに驚いて、いささかうろたえ気味で言葉を続けた。

老婆は何か考え込んだように、ちよつと黙っていたが、やがて脇の方へ身をひくと、奥へ通ずるドアを指して、客を通らせながらこう言つた。「……まあ、おはいんなさい、あんた」と、若い男が通されたあまり大きくない部屋は、黄色い壁紙と、窓にゼラニウム(草花)の幾鉢と紗の窓掛が掛けてあつたが、折りから沈みつつあつた夕陽に、かっと明るく

照らされていた。「……その時も、きつとこんな工合に、日が差し込むのだろう……」と、とたんに、まるで思いがけなく、こういう考えが、ラスコリーニコフの脳裡にひらめいた。そして、彼はできるだけ室内の様子を研究し、記憶しておこうと思つて、すばやく室内のすべてに眼を走らせた。しかし、そこには、とりたてて言うほどのものは何もなかった。家具はいずれもひどく古びた、黄色い木製のものばかりで、ぐつと曲がった凭れのある大きな長椅子と、その前に置かれた楕円形のテーブルと、窓と窓との間の壁に据えられた鏡付きの化粧台と、壁際の椅子数脚と、小鳥を持っているドイツ娘たちを描いた黄色い額縁入りの安っぽい二三の絵と——これが全部であった。片隅には、あまり大きくない聖像の前に、燈明が一つ灯っていた。全体がなかなかこざっぱりとしていて、家具も、床も、艶の出るまで拭き込まれて、何もかもてら光っていた。「……リザヴェータの仕事だな」と、若い男は考えた。住まい全体どこを見ても、塵一つ見つからなかった。「……因業の年寄り後家のところは、よくこんな風にきれいになつてゐるものだて」とラスコリーニコフは腹の中で考え続け、次の奥の小部屋へ通ずる戸口にかかった更紗のカーテンを、好奇心にかられて横目で見やった。そこには老婆の寝台と箆筒とが置いてあつたが、彼はまだ一度もその中をのぞいたことがなかった。老婆の住居は、この二つの部屋（十台所）から成り立っていたのであつた。

老婆は、「……何の御用だね？」と聞くと、「……質を持つて来たんですよ、これです？」と、こう言いながら彼はポケットから、古い薄つぺらな（父の形見の）銀時計を取り出した。その裏蓋には地球儀が描かれていて、鎖は鉄鋼製であつた。老婆は、「……でもね、先の口がもう期限ですよ。一昨日でちょうどひと月だからね」と言い、また、「……ろくでもないものばかり持つてくるね、お前さんも、こんなもの一文の値打ちもありやしないよ。この前あんたにや指輪に二枚も出して上げたけれど、あれだつて宝石屋へ行けば、新しいのが一ルーブリ半で買えるからね」と言うと、「……ひとつ、四ルーブリばかり貸して下さいな。きつと出します（取りに来ます）よ。父親の（形見の時計）だから。それにじき金も来るはずですから」と言う。老婆は、「……一ルーブリ半だね。それも利子を天引きで。それでよければ」と言うのを聞いて、「一ルーブリ半！」と、若い男は、叫ぶが、老婆は、「……どうとも御勝手に」と、こう言つて、時計を彼の方へと差し出した。若い男は、それを受け取ると、むつととしてすぐ帰ろうとしかけたが、ほかにはどこへ行くあてもなく、それにここへ来たのにはいま一つの「別の目的」もあつたのであるのに気がついて、とつさに思いかえした。そして、「……貸して貰おう！」と、ぶつきりぼうに彼は言うのであつた。

すると、老婆は、ポケットへ手をつ突つ込んで鍵をさぐりながら、カーテンの向うの奥の間（そこは寝室）へと行つた。若い男は、一人部屋の真ん中に残されると、熱心に聞き耳を立てて思いをひそめた。箆筒をあける音が聞えた。「……うん、上の抽斗だな」と彼は考えた。「……してみるとあいつ、鍵は右のポケットに入れているんだ、みんな一束にして……。その中にほかのよりは三倍も大きい、ギザギザの歯の一つあるが、もちろん、あれは箆筒じゃない。何かほかに鞆か手匣みたいなものが確かにあるんだ……。うん、こいつは面白いぞ。鞆にはたいいていあんな鍵がついているものだからな。ああしかし、こんなことを考えるなんて、なんとという浅ましいことだろう……。」

やがて、老婆は戻つて来て、「……ではねえ、お前さん——利子は、全部合わせて三十

五カペイカですね。で、あの時計でお前さんの手にはいる分は、たった一ルーブリと十五カペイカになります。さあお持ちなさい」と言うので、「……なんだって？　じゃ何か、たった一ルーブリと十五カペイカ！」と言うので、「……ええ、そうでございますよ」と答えると、若い男は、もう争おうともしないで、金を受け取った。そして、「……ことによるとね、アリヨーナ・イワーノヴナ、近いうちにもうひと品持って来ますがね、……銀の、立派な、巻煙草タバコ入れですよ。その、友達のところからとってくるとね……」と、彼はどぎまぎして、口をつぐんだ。「……それは、まあその時の話にしましょうよ」と、老婆が言うので、主人公（ラスコーリニコフ）は、「……じゃあ、さようなら、それはそうと、お婆さんはいつも一人のようですね、妹さんはお留守ですか？」と、入り口の室やへ出ながら、できるだけ何気ない調子で彼は尋ねた。すると、「……お前さん、妹に何か用でもありますのかね？」と聞くので、「……いや、べつに何も、ちょっと聞いてみただけですよ。それを、お婆さんはもうすぐ……いや、さよなら、アリヨーナ・イワーノヴナ！」と言うのであった。

主人公のラスコーリニコフは、すっかりしどろもどろになつてそこを出た。この混乱は、一刻毎にますます酷ひどくなつて行つた。階段を下りながらも、突然何かに襲われでもしたように、幾度いくどとなく立ち止まったほどであった。そして、やっと通りへ出ると、彼はこう叫ぶように言つた。——「……ああ、実に、何という穢けがらわしいことだろう？　ほんとに、ほんとうにおれは……いや、これは無意味だ、愚劣だ！」。彼は決然としてこう言い足した。「……だが、一体どうしてこんな恐ろしい考えが、おれの頭に浮かんできたのだろう？　それにしてもおれの心は、よくもこんな穢けがらわしいことを考えさせたものだ。第一に——この穢けがらわしき、この汚きたらしき、ああいやだ、実にいやだ！　しかもおれはまるひと月も……」。

四、話し相手

例えば、われわれ人間というのは、若しもこれという「話し相手」もなく、たった一人の場合には、その人の「話し相手」は、結局、いわゆる「自分自身」であるしかない。その場合、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）で思つたり考えたりしたことが、結局は、その人の「結論」になつてしまふ。もちろん、他人から見れば、それは、「明らかに間違っているよ」と思えることでも、その人にとっては、それがそのままその人の「最終結論」になつてしまふのである。それは、まさに自分よがりの「考え方」に陥りやすいということである。しかも、長い間、これという「他人との対話」もなく、たった一人で暮らすような長い「孤独」が延々と続くような場合には、その人の「考え方」は、どうしても自分よがりの「考え方」に深く陥りやすいとともに、いわゆる「精神の健全さ」なども失われやすいということである。

それゆえ、われわれ人間には、どうしても「話し相手」というものが必要になつて来るのである。それによつてこそ、まさに自分よがりの「考え方」から脱却でき得るとともに、いわゆる「精神の健全さ」なども保たれることになるからである。——つまり、自分の「考え方」が間違っている時には、それをあれこれ指摘してくれる「存在」というものが、どうしても必要不可欠であるということである。なぜなら、それによつてこそ、まさに自分よがりの「考え方」から脱却でき得るとともに、いわゆる「精神の健全さ」なども自然と

保たれることになるからである。

もちろん、われわれ人間の「最小単位」は、「一人」であるが、しかし、人間らしく「生活」するための「最小単位」は、むしろ「二人」である。しかも、その「話し相手」は、「同性」よりは、むしろ「異性」であることが望ましい。——例えば、独り暮らしでは、本来、人間らしい「生活」はできにくいのである。それは、なぜかと問えば、それは、自分一人の場合には、まさに「無法状態」であり、それゆえ、たとえ何をしようと、また、何を考えようと、まさに「完全なる自由」であり、それゆえ、どうしても好き勝手な「生活」に陥りやすいからである。ところが、二人暮らしになると、そのような好き勝手な「生活」は、なかなか出来にくくなるので、初めて、人間らしい「生活」が生まれるということである。それは、一体、なぜかと問えば、それこそは、まさに「社会」というものであり、たつた二人でも最小単位の「社会」というものは、立派に成立するということである。——つまり、二人で暮らすようになれば、お互い「好き勝手なこと」を言ったり行なったりしていたら、それこそお互い「けんか」が絶えず、「生活」そのものが成り立たなくなってしまうだろう。それを解決するためにも、お互いの間には、必ず何らかの「約束事」（つまり「何らかの規制」）が必要不可欠になって来るということである。そして、その何らかの「約束事」（それは「何らかの話し合い」）によってこそ、まさに人間らしい「生活」（つまり「社会生活」）というものが、初めて誕生することになるのである。

五、酒場での出逢い

さて、彼（ラスコーリニコフ）は、元来、人中に出ることにはなれていなかった。近頃はことにそうであり、一切の会合を避けていた。ところが、今は、なにやら急に人恋しい気持ちに襲われた。なんとなく一種の新しいものが彼の内部に出来あがって、それとともに、人間に対する一種の渴望が頭をもたげたのである。彼は、まるひと月続いた、あの凝り固まった憂愁と暗い興奮に疲れ果てて、たとえ一分間でも、そしてどんなところであろうと、違った世界でひと息つきたい気分が強くなっていた。——老婆の部屋を出てから、通りをさまよっているうちに、気がつくと、酒場のそばに立っていた。その入り口は、歩道から階段を下へ、地下室へと降りて行くようになっていて、その酒場の中へと降りて行った。彼はこれまででは、酒場へなどついぞ足踏みをしたことはなかったが、今は頭がぐらぐらするし、その上、焼けつくような渴きがとてまらなかつたのである。それに自分がこう急に弱ってしまったのも、一つは空腹のせいだと思つたので、なおさら冷たいビールでも一杯きゅうとあおりたくなつたのだつた。彼は、薄暗いきたならしい一隅の、何だかべとべとする卓の前に陣取って、ビールを注文すると、貪るように最初の一杯を飲み干した。すると、たちまち気分がすつと軽くなって、思考力もはっきりとして来た。そして、まわりを見ると、酒場には客はほんのわずかしかなかった。……

ところで、世には一面識もない人でいながら、一目見ただけで、まだ口も聞かぬさきから、何となく不意に、思いがけなく興味を覚えるというような、一種の邂逅がよくあるものだ。やや離れて席を占めていた退官官使らしいその客が、ちょうどそういつたような印象をラスコーリニコフに与えた。若い男は、後になって幾度かこの最初の印象を想い浮べて、それを虫の知らせだとさえ思つたくらいである。で、彼はたえずその官吏の方を見て

いたが、それはもちろん、一つには先方でもしつこく彼の方ばかり見ていたからであり、それで見ると、どうやら向うでも非常に彼に話しかけたがっていたらしい様子であった。(中略)、それは、もう五十越しの年輩の、中背で体格のがつしりした、白髪頭に大きな禿がある男で、たえまない飲酒のためにむくんだような、黄色というよりは幾分青味がかった顔をして、腫れぼったい瞳の奥から、小さい裂け目のような、けれど生々とした充血した眼を光らしていた。やがて、彼の方から「話し相手」になつてくれないかと、主人公(ラスコリーニコフ)のほうへと話しかけて来ることになるが、その話の「内容」というのが、まさに「どん底の生活」の話であり、……奥さんは、肺病を患つていて、小さな「連れ子」が三人(二女一男)があり、一方、彼には、一人の「連れ子」(女の子)がいるという、そういう「家族構成」であった。そして、その一人の「連れ子」(女の子)こそは、まさに女主人公の「ソーニャ」その人に他ならないということである。

そして、その女主人公の「ソーニャ」は、まさに「淫売婦」をして「一家の生計」を立てているとともに、父親(話し相手)は、仕事(収入)もなく、酒ぐせも極めて悪く、家の中にある「金目のもの」なら、何でも「酒代」に代えてしまふという低墮落ぶりであり、一方、奥さんは、佐官の娘で教養もあり、正義感も強い婦人であるが、夫に腹を立てては、その夫の髪の毛をつかんで引きずりまわすという、まさに喧嘩の絶えない「生活ぶり」であったということである。

六、貧困と素寒貧

そして、彼の話の中で、「……貧は悪徳にあらず、素寒貧(一文無し)こそ、悪徳である。貧乏のうちの人間は、持って生まれた品位を保つことができるが、素寒貧(一文無し)になると、誰だってそうは行かず、もう人間社会から叩き出される」という言葉がある。これは、非常に興味深い「言葉」であり、それは、「貧困」は、決して「どん底」そのものではなく、少なくともまだ生きるための「最低限の生活」は、なんとか保たれている。しかし、素寒貧(一文無し)は、まさに「どん底」そのものであり、素寒貧(一文無し)では、食べ物も買えず、このままでは「飢えて」死ぬしかない。それゆえ、何としても「食べ物」を手に入れなければならぬ。そのためには、ゴミ場所を漁るのを初めとして、他人の食べ物や盗んだり、また、引つたくつても手に入れなければならない。それらに加えて、銀行、ビル、デパート、コンビニ、スーパー、レストラン、食堂、他人の家、その他、もうどこへでも入って、まさに「強盗、窃盗、万引き、食い逃げ、その他」、何でもやらなければならぬ。そうでなければ、生きられないからである。むろん、今日では、例えば、「生活保護」などを受ければ、何とか「生活の安定」は得られることになるが、それは、まさに「素寒貧」(一文無し)ではなくなるからである。

そして、この「素寒貧」(一文無し)という言葉にも、それなりの「振れ幅」があり、例えば、土地や持ち家或いは家具類、その他などがあれば、それは、「素寒貧」(一文無し)ではない。なぜなら、金に困れば、それらを「売って金に換える」ことができ得るからである。だとすれば、少なくとも「土地や持ち家或いは車など」の「金目」の持ち合わせはない。しかも、できるだけ安い家賃と最低限の家具類や電化製品、その他、それに低収入というのが、いわば「貧困層」であり、その「貧困層」も、それらが「ゼロ」に近づ

けば近づくほど、それだけ深刻な「貧困」となり、そして、それらすべてが「ゼロ」になった時、文字通りの、いわゆる「素寒貧」(一文無し)になるということである。それは、ホームレスで、何の持ち物もなく、しかも、お金の持ち合わせも「ゼロ」というのが、まさに最究極の「素寒貧」(一文無し)ということになるかと思う。

やがて、店から出て、主人公(ラスコーリニコフ)は、酔っているソーニヤの父親(マルメラードフ)を彼の家まで送ることになるが、それは、一体、なぜなのか? それは、後日、その父親が馬車に轢かれて瀕死の状態になった時に、たまたまそこを通りかかった主人公(ラスコーリニコフ)は、そこにいた人の手を借りて、彼を彼の家へと運び込むという場面が出てくるが、そのためには彼の家を知っていることが必要不可欠であるとともに、ソーニヤとの関係も、単なる「男と女」の出会いではなく、父親(或いは「母親」)をも絡めたより複雑かつ現実的な「出会い」(或いは「関係」)にするためである。

七、酒場の場面

ところで、この「酒場の場面」というのは、女主人公(ソーニヤ)の父親(マルメラードフ)という人が、直接、彼の「家族の様子や現在までの状況」などを実に「事細かに語っている」場面であり、また、次の「母からの手紙」というのも、全く同じことであり、主人公(ラスコーリニコフ)の母親(プリヘーリヤ・アレクサンドロヴナ)という人からの「手紙」の中で、直接、その「家族の様子や現在までの状況」などが実に「事細かに語られている」ものである。——それでは、なぜこのような「書き方」(手法)を採っているのかと敢えて問えば、それは、作者(ドストエフスキー)自身が、彼らの「家族」についてあれこれ客観的かつ事細かに「記述」(説明)するよりは、むしろ、女主人公(ソーニヤ)の「家族の様子」については、その実の「父親」(マルメラードフ)に、直接、その「家族の様子や現在までの状況」などを「事細かに語らせる」ほうが、また、主人公(ラスコーリニコフ)の「家族の様子」については、その実の「母親」(プリヘーリヤ・アレクサンドロヴナ)に、直接、「手紙」のその中で、その「家族の様子や現在までの状況」などを「事細かに語らせる」ほうが、遙かに実に「生々しい、真実味」(つまり「リアリテイ」)を持たせることができ得るからである。

そして、この「二つ」(それは「酒場の場面」と「母からの手紙」の場面)を実に事細かに描くことによつて、一つは、女主人公(ソーニヤ)側のこれまでの実に様々な「家族の様子」が、そして、もう一つは、主人公(ラスコーリニコフ)側のこれまでの実に様々な「家族の様子」が、この『罪と罰』を読むすべての「読者」の人たちに、実に「生々しく、事細かなところまで、はっきりと分かるようにしている」のである。そのためにこそ、この「酒場の場面」と「母からの手紙」という場面は、実に事細かに描かれているとともに、この「二つ」(それは「酒場の場面」と「母からの手紙」の場面)を丁寧に読み進めれば、この『罪と罰』という作品に登場する主な「登場人物像」(その特徴や性格その他など)もはつきりと分かるようになっているのである。

例えば、ドストエフスキーの『罪と罰』という作品を読み始めた人たちが、なぜどうして途中で「挫折」してしまうのかと敢えて問えば、その理由の一つとしては、この『罪と罰』という作品の「冒頭」部分をただ読んだだけでは、多くの場合、その「内容」がよく

理解出来ないままで終わってしまい、そのために、途中で「挫折」してしまう人たちも非常に多いかと思うが、それゆえ、この「酒場の場面」と「母からの手紙」の場面まで丁寧に読み進むことができれば、一気に『罪と罰』という作品の「全体像」がはつきりとしてきて、その後の「読書」もスムーズに進めることができ得るのではないかと思う。

八、酒場での本文

さて、本文を見てみると、最初、「……ええと、甚だどうもその、ぶしつけですが、ひとついかがでしょう。わたしの話相手になって頂けないでしょうか？ お見受けしたところ、一向振わないご様子ではあるが、わたしの経験から察するに、あなたは教養のある、御酒などはあまり召し上がらぬ方のように思われますが、わたしは常々、誠意の相伴った教養を尊重しているものでして、それに官位は九等官、マルメラードフ——というのが姓でして、九等官なんですよ。時に、やはりお勤めの方で？」と聞くので、「……いや、勉強中です……」と若い男は、相手のいやにくだくだしい言葉つきと、あまり真正面からづけけと話かけられたのに些か面くらった形で、こう答えた。つい先の先まで、どんな人ともいい話をしてみたいと思っていたくせに、いざとなると、自分かけられた最初の言葉を耳にただけで、たちまちいつもの不愉快な、苛立たしい嫌悪の情——彼の個性に触れるか、或いは触れようとした、すべての未知の人に対して覚える、嫌悪の情を覚えたのだった。（これは、実に年期の入った孤独な人であり、たとえ他人と親しく交わると思っても、それがどうしても出来ない（或いは出来にくい）タイプの人であり、常に「他人との距離」を保たずにはいられないような人なのである。）

*

*

さて、本文に戻ると、「……すると大学生ですな、それとも以前の大学生で！」と叫び、「……いや、わたしもそう思いましたて！ 経験ですな、先生、長い間の経験ですよ」と、彼は、得意そうに一本の指を額にあてた。「……つまり、先生はもと大学生だったか、それともどこかで学問をなすった方ですよ！ どれ、ひとつ御免を蒙って……」と、彼は立ち上がると、よろよろしながら、自分の酒壇とコップとを持って若い男の方へやって来て、少し斜め向こうのところへ腰をおろした。彼はもう大分酔ってはいたが、口はなかなか達者で、元氣よくべらべらしゃべった。ただときどき言いそなかったり、言葉を引きのばしたりしただけで、そして、同じようにまるひと月も誰とも口をきかなかったように、妙に貪るような調子で、ラスコーリニコフに（話しかけ）からみついて来た。

彼は、「……ねえ先生」と、ほとんど勝ち誇ったような調子で始めた。「……貧は悪徳にあらずというのは、これは真理ですな。わたしにとつて、飲酒という奴が善行でないくらしいのことは、よく承知しておりますて、このほうは一層真理なくらいですよ。だが、素寒貧となるとですね、先生、素寒貧となると——悪徳ですな。まだ貧乏のうちは人間は、持つて生れた感情の品位を保つていられるというものだが、素寒貧となったが最後、誰だつてそうは行きませせんや。素寒貧となると、もう人間社会から棒切れで叩き出されるどころか、箒で掃き出されてしまいまさ、なお一段の侮辱としてね。もつともそれも無理のない話で、素寒貧となると、第一自分の方で自分を侮辱する気になりますからな。（つまり品位が保てなくなる）。そこでつまり、酒場なんてものがあるんでさ！ ね、先生、ところで、

ひと月前のことですが、レベジャートニコフ氏がわたしの家内をぶったのです。それも、わたしの家内は、わたしのよう人間じゃないのですよ！ ようがすか？ そこで、失礼ですが、もう一つ、あなたに伺いたいことがあるんです。ほんのものが好きにお尋ねするだけですが、あなたはネヴァの乾燥舟にお泊りになったことがありませんか？」と聞くので、「……いや、ありませんね」と応え、主人公（ラスコーリニコフ）は、「……いったいそれはどういう意味なんです？」と聞くと、「……なるほど、実はね、わたしはそこから来たところなんです、実はその、もう五晩も……」と言い、彼はコップを満たし、それを飲み干して考え込んだ。実際、彼の服には、髪の毛にまでも、ところどころに草の葉のこびりついているのが見られた。彼が五日の間、着替えもせず、顔も洗わないでいたらしいことが、ひと目でわかった。殊に、真つ黒な爪の生えた、脂ぎった赤い手は、ずいぶんひどく汚れていたのであった。

*

*

彼の話は、どうやら酒場に居る人たちの注意を惹いたようであり、少年たちはスタン드의向うで、くすくす笑い始め、亭主は上の室から、この「愛嬌者」の話を聞きにおりて来たらしく、けだるそうに、しかしもったいぶった様子であくびをしながら、少し離れたところに腰をおろした。たしかに、この店ではもう古い馴染みだつたのである。思うに、彼の話がこうくたしくなつたのも、恐らく、いろんな未知の人々とのこうした飲み話が習慣になつた結果なのであろう。こうした習慣は、ある種の飲酒家にとつて、家庭で手厳しい取り扱いを受けたり、虐待されたりしている連中にとつては、必要欠くべからざるものになつていゝのだ。つまり、そのために彼等は、同じ飲み仲間の中へはいると、常にまず同情を求めよう、さらに出来ることなら、尊敬をもち得ようと努めるのである。

さて、「……よう愛嬌者！」と、亭主が大声で呼びかけた。「……だが、おめえ、お役人様なら何だつて働かねえんだい、何だつて勤めに出ねえんだい。ええ、おい？」と言うと、「……何だつて勤めに出ない？ ねえ先生」とマルメラードフは、特にラスコーリニコフの方を向いて応じた。まるでそれを尋ねたのが彼でもあるかのように、「……何だつて勤めに出ない？ という、何ですか、わたしがこうして当てもなくほつきまわつていながら、一向平気でいるとも思ひなんですか？ ひと月前に、レベジャートニコフ氏が手を下してわたしの家内を打つた時にも、わたしは酔つ払つて寝ていました。という、わたしは平気でいたということになりますかね？ 失礼ですが、お若い、あなた、こういうご経験はおありでしょうか……フム……つまり、その、見込みのない借金をしようというようなご経験が？」と聞くので、「……ありますよ……だが、つまりどう見込みがないんですね」と聞くと、「……つまり、てんから見込みがないので、はじめから全然無駄なことを承知でやるつてやつですよ。早い話がです。ここにあなたがすな、その男は、その非常に心掛けのいい、いたつて立派な市民は、どんなことがあつても金なんか貸しつこないということ、前もつてちゃんと承知してるとします。だつて、何でその男が貸しますかね、ひとつ伺いたいもんで？ こちらで返えしつこないことがちゃんとわかつていゝらというのに、では、せめて同情なくからではどうか？ ということになりませんが、それもまた、新思想ばかり追いかけているレベジャートニコフ氏などは、先だつてもこう説明していたくらいですから、今日では同情なんてことは、学問上でさえ禁じられていて、経済学の本場であるイギリスでは、すでにそれを実行しているつてね。そこでまた伺いま

すが、——だとしたらです、どうしてその男が貸してくれましようか？　ところがです、そうして前もって貸してくれないことを承知しながら、やはりのこのこ出掛けて行くのです……」と言うと、「……何だつて出掛けるんです？」と、ラスコーリニコフは口を入れたとある。

*

*

さて、ここは、非常に興味深いところであり、つまり、彼（マルメラードフ）に金を貸してくれるような人は、誰一人としていないということである。なぜなら、「……早い話がですよ。いたつて立派な市民（それはふつう一般の人）であれば、彼（マルメラードフ）などにどんなことがあっても金なんか貸しっこないということである。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、彼に金を貸したところで、彼（マルメラードフ）は絶対に金を返えしっこない（或いは絶対に金を返せないということが）前もってちゃんとわかっているから」である。それがまさに「素寒貧」（一文無し）という状況に置かれた人の現状であり、例えば、「……素寒貧（一文無し）のホームレスの人に誰が好んで金などを貸すだろうか、貸すわけがない！」という論理なのである。そして、ソーニヤの父親（マルメラードフ）もまた、まさにそういう「素寒貧」（一文無し）に近い状況に置かれているのである。それでは、誰か同情から金を貸してくれるようなことはないのだろうかと思うが、しかし、今は、昔と違って、そういう時代ではないということである。それでは、ソーニヤの父親（マルメラードフ）は、一体、どうやって手取り早くお金を手にいれたらよいのだろうか？　その方法の一つが、まさに「家財道具」などを持ち出してそれを「お金に換える」という方法と、もう一つは、娘（ソーニヤ）のところに行って、泣きつき、何とかお金を無心するという方法しかないのである。……あとは、何らかの「犯罪」を犯すしかないのである。これがまさに「素寒貧」（一文無し）という状況である。

一方、「貧困層」の場合は、決して「どん底」そのものではない。少なくともまだ生きるための「最低限の生活」と「人間としての品位」などは、なんとか保つことが出来ているのである。しかし、文字通りの「素寒貧」（一文無し）となれば、まさに「どん底」そのものであり、素寒貧（一文無し）では、食べ物も買えず、このままでは「飢えて」「死ぬしかない。それゆえ、何としても「食べ物」を手に入れなければならず、そのためには、ゴミ場所を漁るのをはじめ、何らかの「犯罪」を犯すしかない。つまり、「人間としての品位」を保つことが出来なくなるのである。

*

*

さて、彼（マルメラードフ）は、「……ところがです、そうして前もって貸してくれないことを承知しながら、やはりのこのこ出掛けて行くのです……」と言うと、「……何だつて出掛けるんです？」と、ラスコーリニコフは口を入れたとある。——これは、誰も金など貸してくれないことは百も承知だけれども、それでも、生きていくためには、生活をするためには、どうしても「お金」というものは絶対に必要であり、それゆえ、（お金を借り）のこのこ（ほんの僅かでも可能性のある所）へと出掛けていくのです。

それは、「……だつて、誰のとこへも、どこへも行く先がないとしたら、なにしろ人間て奴は、せめてどんなところにして、どこか一カ所ぐらいは行くところがなくちゃ困りますからね。だつて人間には是が非でもどこかへ行かなくちゃならぬというような、そうした場合があるもんですからな！　わたしの一人きりの娘が、初めて黄色い鑑札を持って出

かけて行った時には、わたしもやはり出掛けましたよ」とある。(これは「閣下」の所に行つたということである)。……というのは、わたしの娘は黄色い鑑札で食つてますんでね、と、彼はちよつと不安らしい目の色で若い男を見ながら、但書として付け加えた。「……なあに、何でもありませんよ、先生、何でもありませんよ！」と、彼はスタンドの向うで二人の少年が吹き出し、亭主までがにやりとしたのを見ると、急ぎ込んで、だが、見かけはいかにも落ちつき澄まして、こう言い足した。「……なあに、構うことありません。あんなふうになつと頭を振られたぐらいで驚くことじゃありません、だつてもう何もかも知れ渡つてるんですから。秘密はすっかりばれてしまつてるんですから。だからわたしは、決して軽蔑の心ではなく、謙遜の心で以て、こういうことも受けていますよ。まあ、いいですわい！ (見よ、この人を!) ですよ。時にお若いのに、失礼ですが、——あなたはそのお出来になりますか、……いやもつとはつきり、もつと適切に言えばですな——お出来になりますか、その勇気がおありになりますか、今このわたしをじつと見ながら、わたしが豚(ダメ人間)でないと断言するだけの勇気が？」とあるが、——これは、彼(マルメラードフ)は、自分を嘲り笑う人たちを、「……決して軽蔑の心ではなく、謙遜の心で以て、いわば受け入れている」とあるが、それと同じように、あなたは、「……私(マルメラードフ)を、決して軽蔑の心ではなく、謙遜の心で以て、豚(ダメ人間)とは思わずに、受け入れる勇気がありますか？」ということであり、それは、自分の話を「まじめに真剣に聞いてくれますか」ということである。

そのために、彼(マルメラードフ)は、まじめそうで教養のありそうな主人公を「話し相手」に選んで、自分の「心の中」にある「思いや考え」などを語り尽くそうとしているのである。それは、彼も「孤独な人」であり、誰も自分の話などまともに聞いてくれない、だからこそ、自分の話をちゃんと聞いてくれる「話し相手」を求めていたのである。そして、彼(マルメラードフ)は、酒場に居る人たちから様々な嘲笑を浴びながらも、自分や自分の家族のことを実に長々と話し続けることになるが、その詳細は、もう本文を読んでもらうしかなく、ここではごく簡単に要約して終わりにしたいと思う。

奥さんのこと

まず、奥さんについては、「……ところで、わたしは豚で仔細はないが、あれはどうして貴婦人ですよ！ 私は豚の相を持っていますすが、カテリーナ・イワーノヴナは、わたしの家内は——左官の娘で教育のある夫人です。わたしはやくざ者で仔細はない。仔細はないが、あれのほうは気高い精神と教養で高められた感情に充たされている女です。それにしても、ああ、あれがせめてもう少しわたしに同情を持ってくれたらなあ！ 先生、ねえ先生、どんな人間にだつて、せめて一カ所ぐらいは同情してくれるところがなくちやいけませんやね！ とところが、カテリーナ・イワーノヴナときたら、あれほど心の広い女でありながら、どうも不公平で理不尽な女です……。そりゃ、あれがわたしの髪をつかんで引きずりまわすのも、みんなわたしを不憫に思えばこそだということぐらいのことは、わたしもよく承知していますよ。またそれなればこそ、わたしは臆面もなく繰り返しかえして申すんですが、あれはまったくわたしの髪をつかんで引きずりまわすんですよ、ね、お若いの」と言い、「……ああ、せめて一度でもあれが、いやだめです！ だめです！ こんなこと

みんな、無駄な話だ、言うだけ野暮だ！ わしの望み通りになったことも、一度や二度じゃないし、また、人から同情されたことも一度や二度じゃないんだから。しかしだ……しかし、これがわたしの持つて生まれた性根なんだ。わたしは生れながらの畜生なんだ！」
と言うのであった。

*

*
しよね

さらに、「……これがわたしの性根なんだ！ ねえ、先生、いいですか、先生、わたしは家内の靴下まで飲んでしまったんです。それも、靴ならまだ世間なみと言えるかも知れんが、靴下まで、女房の靴下まで飲んでしまったんですからなあ！ それからまだ、あれの山羊の毛皮の襟巻も飲んでしまいました。それも昔ひとから贈られた物で、純然たるあれの所有品で、わたしのものじゃないんですよ。ところで、わたしどもは今寒い部屋に住まってるので、あれはこの冬風邪をひきましてな、血の出るほどひどく咳をするようになってしまった始末でさ。子供は小さいのが三人でしてな、カテリーナ・イワノヴナは、もう朝から晩まで、拭き掃除をしたり洗濯をしたり、子供に湯を使わせたり、まるで働きずめなんです。なにしろあれは、子供の時分から綺麗好きに仕込まれてるもんですからな。しかもあれは胸が弱くて、結核になりやすいたちなんでしょう。わたしだって気になりま

さあね。どうして気にしないでいられますようかい。で、つい飲む、が、飲めば飲むほどますます気になる。つまり、酒の中に悲しみや共感を見出すために飲む……深く苦しみがために飲むのですよ！」と、こう言いながら、彼は絶望的に卓の上へ頭を伏せた。
つまり、彼が酒を飲むのは、むろん、(実に様々な悩みや苦しみなどで)もうどうにもやりきれないような気持ちに襲われているからではあるが、しかし、その最も根源にあるのは、実は、奥さんが心の底から愛しているのは、前の夫であり、自分ではないということとであり、彼は、彼女と再婚をして、一年間、一滴の酒も飲まずに一生懸命に働いたことがあったが、それでも「彼女の心」(自分への優しい心)を得ることが出来ず、その上、失職ということで、とうとうこいつ(酒)に手を出してしまっただけとある。つまり、
「……ああ、あれがせめてもう少しわたしに同情を持ってくれたらなあ！ 先生、ねえ先生、どんな人間にだって、せめて一カ所ぐらいは同情してくれるところがなくちゃいけませんやね！ ところが、カテリーナ・イワノヴナときたら、あれほど心の広い女でありながら、どうも不公平で理不尽な女です」となるのである。——つまり、彼は、奥さんのことを愛しているが、一方、奥さんのほうは、彼ほどではないということである。

*

*

さて、「ねい、お若いの」と、彼はまた頭をもたげながら、話を続けた。「……わたしはあなたのお顔に、何やら悲しそうな色が読めるんですがね。はいってこられたとたんに、すぐそれが読めたので、それで、早速話しかけたようなわけなんです。で、ことさらあなたに身の上話をお聞かせするのも、今さら話さずとも知り切っているそのらののらくら者どもに、自分の恥さらしがしたためじゃごわせん。(それは、自分の話をちやんと聞いてくれる、教養ある話し相手を探していたということである)。つまり感じやすい教育ある方をさがしているからなんです。そこで、お聞き願いたいのはほかでもない、実に家内は、立派な県立の貴族女学校で教育を受けたんで。卒業式の時には、知事やその他の来賓の前で、シヨールを持つて舞踏をして、そのために金のメダルと賞状を貰ったくらいのお女なんです。メダル、うん、そのメダルの方は、売ってしまいましたっけ、もうとうの昔に……

フム、だが、賞状の方は、いまだにあれの手匣てびらの中なかにころがってましてな。ついこの前も、家主の内儀うちぎさんに見せていましたっけ。内儀うちぎさんとは、のべついがみ合つてばかりいる（まさに「犬猿の仲」）ではあるが、それでいてやはりあれは、誰か人の前で自慢をしたり、昔の幸福な時代を吹聴したりしたくなるんですね。が、まあわたしも、かれこれ言いやあしません、言いやあしませんとも、なにしろあれには、ただそれだけが思い出として残っているんで、ほかのものは何もかも影も形もなくなってしまうんですからな！ さよう、さよう、あれは熱しやすく、傲慢で、きかぬ気の女ですわい。自分で底板は洗つても、黒パンばかり嚙かじつていても、人に馬鹿にされてはだまっています。ですから、レベジャートニコフ氏にだつて、無礼な仕打ちは許さなかつたわけです。そのために、レベジャートニコフ氏に殴られた時だつて、あれは殴られたためよりも、口惜しさのために、床にくく（寝込んでしまった）くらいです。

奥さんとの出逢い

ところで、もともと頑是がんぜ（分別の）ない三人の子供を抱えて後家でいたのを、わたしが引き取つてやりましたのでな。先の亭主の歩兵将校とは惚ほれ合つて一緒になつたんで、あれはその男と手に手を取つて、親の家から駆け落ちまでした仲なのです。で、あれはその亭主を心から愛していたのですが、亭主の方は賭博を始めて引つ張られ、その最中に死んでしまったのです。（中略）、そして、あれは今でも、思い出すと涙を流して、その男を引き合いにわたしを攻撃します。でも、わたしは喜んでるんですよ。喜んでね。というのはですね、あれがせめて空想の中だけででも、昔は自分も幸福だったように思っているのが嬉しいんで……。そういうわけであいつは、その男の死後三人の幼いものを抱えて、その当時ちようどわたしが赴任していた、ある恐ろしく辺鄙へんびな田舎に取り残されていたんですよ。ところが、その惨めな有様といたら、わたしはこれで随分いろんなことを見て来ていますが、とても話になるどころの段じゃなかつたのです。親戚からもみな見放されてしまった。（駆け落ちだから）、そこへ持つてきて、あれは氣位きぐわいが高いときている、人一倍氣位きぐわいが高いときている。ところで、先生、その時ですな、その時わたしもちようど、先の家内に出来た十四になる娘を抱えたやもめだったので、あれの苦しみを見るに見兼ねて、結婚を申込んだわけなのです。するとですな、その育ちのいい、教育のある、立派な家柄に生れた女が、おいそれとそれを承諾してきた。それを見ても、あれの窮迫きうぱくがどんなにひどいものだったか、ご想像がつきましよう！（中略）、つまり、もうどこへも行く先がなかつたからですな。わかりますかな、先生、わかりますかな、この、もうどこへも行く先がないという意味が、いやいや！ あなたにはこれはまだとてもわかりますまいて……そこですな一年というものは、わたしも立派に、真面目に自分の職務を果しましてね。これなんかには（と、彼は半シトーフ鑿びんを指して）手も出しませんでしたよ。わたしにだつて性根しやうねというものがありませんからな。が、それでも（奥さんに）なかなか気に入つてくれないおまけに失職することになつた。それも自分の罪ではなく、官制の改革でね。で、その時また、とうとうこいつ（酒）に手を出してしまつたんです！ さよう、もうかれこれ一年半になりましようかな、わたしどもが方々わたり歩いて、さんざ不幸な目にあつた挙げ句に、とうとうこの立派な、沢山な記念碑で飾られた首府へ流れ込んで来ま

したのは。そして、ここでわたしは職にありつきましたが、ありついたらと思うと、すぐまた失ってしまいました。ようがすかね！ 今度は、自分の罪で失ったのです。つまり、例の病いが出たもんですから……。で、目下は、アマーリヤ・フォードロヴナ・リツペヴェフゼルという家主（内儀さん）のところで、隅っこの部屋を借りて住んでるんですが、なんで暮らしを立てているのやら、どうして支払いをしているのやら、わたしはほとんど知らん始末で、もつともそこには、わたしどものほかにまだ大勢住んでいます。いやはやどうも大変なソドム（悪徳に充ちた退廃の町のよう）ですと言うのであった。

ソーニヤのこと

次に、女主人公（ソーニヤ）については、「……ソーニヤは、お察しでしょうが、教育というものを受けていません。四年ばかり前でしたな、私が自分で、地理と世界歴史とを教えかけて見たんですが、なにしろ肝腎のわたしが少々怪しいところへもつてきて、適当な教科書がなかったものですからな。だって、手もとにあつた本と言えば、……フム、そんな本も、もう今じゃ何にもありません。それでせつかくの勉強もそれっきり。ペルシヤ王サイラスで止まっちゃまったわけなのです。その後、もう年頃になつてから、娘は小説ふうのものを少しばかり読みまして、それからまた最近には、レベジャートニコフ氏から本を一冊、リュイスの生理学というのを——ご存じでしょう——あれを貸して貰つて、大へん面白がつて読んでいました。とどころ声上げてわたしどもにまで読んで聞かせたりして——それらが娘のありたけの学問ですな」と言うのであった。（だとすれば、父親は、恐らく、彼女が『聖書』を読んでいることを知らないのである。）

*

*

ところで、先生、今度はこつちからあなたに一つ、特別な問題を提出しますが、——ようがすか、では、あなたのお考えでは、貧乏な、けれども純潔な娘がすな、純潔な仕事をしていて、果してどれだけの稼ぎが出来ると思いでしようか？ ……そりやもう日に十五カペイカもおぼつかないくらいですぜ、先生、地道一方で、特別な芸もないんじや、手を休めるひまもなく働きずめに働いたところだね」と言い、（中略）、ところが、こちらでは子供達はひもじがつてる……カテリーナ・イワーノヴナは、手をもみしだきながら室の中をあちこち歩いていて、頬ぺたに赤い、斑点をこしらえながら——この病気にはよくある奴で——そして、「……いい気なもんだね、え、おひきずり（連れ子）さん、お前さんはただで食つて飲んで、ぬくぬくしていられてさ」とやるんです。だがです、ここ三日ばかりは、小さい奴らまでがパンの皮一つ見ないでいるというのに、飲むも食うもあつたもんじやごわせんよ！ その時わたしは寝ていました……いやはや実にもどうも！ 酔つ払つて寝ていたんで、そしてソーニヤの言うことを聞いていますと、（内気な、おとなしい奴でしてな、声なども素敵にやさしい……髪はブロンドで、顔はいつも蒼白くて、ほっそりしている）。こう言つてるじやありませんか！ 「……じゃなんですの、カテリーナ・イワーノヴナ、あたしもどうしてもあんなことをしに行かなくちゃいけませんの？」つてね、というのです、ダーリヤ・フランツォヴナという、たびたび警察のご厄介になつている性悪る婆が、内儀さんを通じて、もう三度ばかりも勧めてよこしたことがあるからなんです。「……それがどうだつて」と、カテリーナ・イワーノヴナは、せせら

笑って返答をしたものです。「……何を大事にしまっておくことがあるんだね？ たいした宝でもあるまいし」つて。ですが、あれを責めないで下さいよ。責めないで、ね、先生、責めないで！ あたり前の考えがあつて言ってるんじゃないんですから。病気はよくないし、子供たちはひもじがって泣くし、もうめちやくちやな気持の中で言ったことで、言葉通りの意味よりも、まあ、あてつけに言ったまでのことなんですから。というのは、カテリーナ・イワーノヴナは、いったいがそうした性質なんで、子供たちが泣き出せば、お腹がすいて泣くのも、すぐひっぱたくというふうなんですからな。

ところで、その日午後五時がまわると、ソーネチカ(ソーニャ)は、肩掛をかぶって、頭巾ずきん付きの外套をひっかけて家を出ていきましたが、午後八時過ぎにもどつて来ました。だまつて一ルーブリ銀貨を三十並べました。そして、一言も言わず、目もくれないで、家の大きなドラデダム織の緑色の肩掛を取ったと思うと、(家じゆうが共同で使っている肩掛なんですよ。ドラデダム織でしてね)、それでもつて頭と顔とをすっぽりと包んで、壁の方を向いて、寝台の上に倒れてしまいました。その時もやはり前と同じように寝ていました。が……そして見ているとです、ね、お若いのが、やがてカテリーナ・イワーノヴナが、これもひと言も口を利かないで、ソーニャの寝台のそばへ近寄つて、ひと晩じゆうその足下もとにひざまず跪ひざまずいたまま、その足に接吻くちづけして、なかなか立とうともしないんですよ。そのうちに二人はそのまま、一緒に寝入つてしまいました。抱き合つたままですね……二人で……二人で……そうですよ……それなのにわたしは……酔つ払つていたのですわい」と、マルメラードフはここで、まるで声を断ち切られでもしたように、黙つてしまった。それからふいに、急いで一杯ついで飲み干すと、ごほんど一つ咳払いをした。

*

*

さて、「……その時から、ちよつとした都合のわるい出来事と、意地のわるい連中の密告のために、(もつともそれは、ダーリヤ・フランツォヴナが尻をたたいたのであるが)、その時からわたしの娘は、ソフィヤ・セミョーノヴナ(ソーニャ)は、黄色い鑑札を受けねばならぬことになり、自然わたしどもも一緒にいられないことになってしまったのです。と申すわけは、内儀かみさんのアマリーヤ・フォードロヴナが、どうしても承知してくれないのでしてな、(なあに以前には自分からダーリヤ・フランツォヴナに差しがねまでしたくせにですよ)。それにもう一人レベジャートニコフ氏、あの男とカテリーナ・イワーノヴナとの一件も、つまりソーニャのことがもとで起こつたことなんですよ。最初は、自分がソーネチカ(ソーニャ)を狙ねらつていたくせに、こうなると急にお高くとまつて、「……仮にも自分のような教育ある人間が、そんな女と一つ屋根の下にいられるか？」なんて言い出しやがったんですよ。さあ、カテリーナ・イワーノヴナが承知しませんや、食つてかかった。そうして始まつたわけなんですよ。で、この頃ではソーネチカ(ソーニャ)は、なるべく暗くなつてからやつて来るようにして、カテリーナ・イワーノヴナの手助けをしたり、出来るだけの仕送りをしたりしてくれております。……あれは、仕立屋のカペルナウーモフの家に同居しているんですよ、その部屋を借りましてな。ところが、カペルナウーモフという男は、跛ちんぼ(びつこ)で、吃りくちで、そのまた大ぜいの家族が揃揃いも揃揃つて吃りときているんですよ。女房までがやはり吃りくちでしてな。それがみんな一つ部屋にごつちやに暮らしているんですが、それでもソーニャだけは、片隅を仕切つて、別の部屋のようにしているんです。……フム、さよう、貧乏で吃りくちの人々ですな、そうですよ、と言う

のであった。

閣下のところに行く

ところで、その時ですな、わたしは朝になって起きるとすぐ、例のぼろをひっかけて、天を仰いで合掌してから、イワン・アフアナーシツチ閣下のところへと出掛けていきました。イワン・アフアナーシツチ閣下、ご存知でしょうか？ ご存じない？ じゃああなたは、あの神様のような方をご存知ないんです！ あの方は——蠟ですよ——神のみ前にある蠟ですよ。蠟のようにお溶けになるのですよ！ それで一部始終をお聞き取り下さった上、涙さえお流しになって、「うん」と、こう仰しゃるのです。「……マルメラードフ、君は前に一度わしの期待に背いた人だ……。だが、もう一ぺんだけわしの責任にして面倒を見て上げよう」と、こう仰しゃいましてな。「……身に染みて忘れないように、じゃ帰んなさい！」と、こう仰しゃるんですよ。で、私は心の中だけで、閣下のおみ足の裏をなめましてな、というのは、大官であり、新しい国家観念と進歩的な新思想を持った方である閣下は、実際にそんなことをすることは断じてお許しになるまいと思っただけです。それからうちへ帰りまして、自分はまた勤めについた、給料が取れるようになったと報告しますと、ああ、あの時の家じゅうの騒ぎと云ったら……！」

マルメラードフは、またしてもひどく興奮して口をつぐんだ。その時、通りからもういかげん酔っ払った酔いどれの団が、どやどやと入って来て、騒がしくなったが、(中略)、マルメラードフは、その連中には目もくれずに話を続けた。彼はもう大分参っているらしかったが、でも、酔いがまわれればまわるほど、ますます雄弁になって来るのだった。就職にありついたという最近の成功の思い出が、ひとときわ彼を活気づけたらしく、その顔には、輝かしい喜びの色さえ浮かんで来た。ラスコーリニコフは熱心に耳を傾けた。

再就職と初めての給料

さて、「……それはね、先生、もう五週間前のことでしたよ。あれたち二人が、カテリーナとソーネチカ(ソーニヤ)とがですな、それを知るやいなやです、わたしはまるで天国へでも引越したようなあんばいでしたよ。なにしろそれまでは、牛か馬のようにごろごろしていて、がみがみ言われ通しのわたしだったんですからな！ それがどうです、それから、みんなは爪先立ちをして歩いて、子供たちをしっかりとつける始末です。「……セミヨン・ザハールイチが、お勤めで疲れて休んでいらつしやるんじゃないか、しつ！」なんてね。そして、出勤前には、珈琲コーヒーを入れてくれる、クリームを沸かしてくれる！ しかも、そのクリームもです、本物のいいものを取りはじめ、ね、ようがすか！ それからまた、どこで工面したものでやら、わたしには未だにわかりませんが、十一ルーブリ五十カペイカもかけて、立派な身なりを整えてくれましたよ！ 靴、キヤラコのシャツ——それも素晴らしく上等のをね、それから制服、全部を十一ルーブリ五十カペイカで立派に揃えてくれたんですよ。そして、最初の日、お昼前にわたしが勤めから帰って来ますと、どうでしょう、カテリーナ・イワノヴナは、スープと山葵わさびをかけた牛ぎゅうの塩漬しお漬けと、それまではてんで見たこともないような料理をふた皿も用意して待ってるじゃありませんか。

ところで、あれにや着物なんか一枚だってありやしません……まったく一枚も。それなのにその時は、まるでお客にでも行くような様子をしてるじゃありませんかといつてべつだん何があるというわけではない。つまり、何もないとところからすべてをつくり出すのが女の腕と言ったような工合にですな——つまり髪を縫い直し、どことなくきれいな襟と袖口とを付けただけで、すっかり女っぷりまで変わってるんでき。若やいで、きれいになってね。しかしソーネチカは、可愛い奴は、ただ金だけを届けて寄越して、自分は、当分はあまり度々行くのはよくないから、誰にも見られないように暗くなってから上がりますなんて言つて寄越しましてね。ようがすか、ようがすかね？　そこで食事をすまして、わたしがちよつと横になりますと、さあ、どうなつたと思いですね、カテリーナ・イワーノヴナは、もうじつとしちやいられませんや、——内儀さんのマリーヤ・フォードロヴナとは、まだ一週間前に思いつきり大喧嘩をしたばかりなのに、それを珈琲に招いたもんです。そして二人は、ものの二時間もぶつ通しに座り込んで、のべつぼそぼそやっています。その内容は、「……今度ね、セミヨン・ザハールイチは勤めに出て、給料を戴くようになりますよ。実は自身で閣下のところへ伺いますとね、するとあなた、閣下は御自分でお出ましになって、ほかの者は待たせておいて、セミヨン・ザハールイチの手を取つて、みんなのそばを通つて、お書斎へお連れになりました……」などと、いかにも彼女が想い描くような内容に変えて自慢話をするようになるが、その部分は省略して、……ところで、六日前、のことですよ、わたしが初めての棒給を——二十三ルーブリ四十カペイカそっくり持つて帰りますとすね、あいつめ、わたしのことを可愛い人なんて言やあがつて、「……なんてまあ可愛い人でしょう！」と来たもんです。もつとも二人きりの時のことですがね、ようがすか？　しかしいったいわたしのどこに可愛いとこんなかがあるでしょう。第一わたしはどんな夫でしょう？　それをあいつは頬へたをつねつたりして、「……なんてまああなたは可愛い人でしょう！」なんて来たんですからねとある。

*

*

それは、「……先生、ねえ先生？」とマルメーラドフは、じき気を取り直して叫んだ。「……ああ、先生にしてもこんなことは、みなほかの連中同様に、ただの笑い話に過ぎないでしょう。そして、わたしは、ただこんな愚にもつかぬ家庭生活の始めのうち開け話で、あなたを当惑させたに過ぎないでしょうが、しかし、わたしにとっては、なかなか笑い事じゃないんですよ！　なにしろわたしには、その一つ一つが胸にこたえるんですからな。それはそうと、そのわたしの生涯での天国のような一日と、その夜ひと晩は、わたし自身も飛ぶような空想のうちに時を過ごしましたよ——つまり何もかもうまくやつてゆこうとか、子供たちには着物を着せてやろうとか、あれにも樂をさせてやろうとか、自分の一人娘も早く泥水家業から家庭のふところへ引き戻してやろうとか……まだまだいろんな

ことをですな……無理ありませんやね、先生、ところで先生」と、マルメラードフは、突然ぶるつと身震いでもするような様子をして、頭を上げると、じつと聴き手の顔を見つめた。「……ところがです、その翌日、そうしたいろんな空想に耽ったすぐあとで、(つまりもうまる五晝夜前のことになるんですが)、日暮れ方にわたしはまんまと、夜盗のようにカテリーナ・イワーノヴナの手匣の鍵を盗み出しましてな、持って帰った俸給の残りを、ありったけかつさらってしまっただけですよ。全部でいくらあったか、もう覚えてもいませんがね、さあ、みんな、わたしの顔を見ておくんない！ 家を出てから五日目です、家ではさぞ捜していきましょう、役所の方はお払い箱、制服はエジプト橋の袂の酒場にころがってまき。そして、その代わりにとつて来たのがこれこの服……これで万事おしまいでさあ！」と、マルメラードフはげんこつで一つ自分の額をがんとくらわして、歯をくいしばり、目を閉じ、肘を立てて、どかりと卓にもたれかかった。が、一分も経つか経たぬうちに、彼の顔つきは急に変わって、とつてつけたような狡猾さと、わざとらしい凶々しさを見せながら、ラスコーリニコフをじろりと見た。そして、笑い出しながら言った。

*

*

それは、「……ところで、今日はソーニヤのところへ行って、迎いの酒の飲み代をねだつて来ましたよ、へ、へ、へ」と言い、「……ほらこの半シトーフ壇もあれの金で買ったんでさあ」と、特にラスコーリニコフの方を向いて言った。「……三十カペイカ出してくれたんです。自分の手でね、それももうそれつきりという奴(金)を、わたしやこの眼で見ただけです。……そしてあいつは何にも言わないで、ただ黙ってわたしを見ていました。こうなると、もうこの世のものじゃありませんな。あの世ですよ。……人のことを嘆いたり泣いたりしながら、それで咎められないんですからな。しかし、この方がかえって辛いですよ、咎められないほうが辛いですよ！ ……三十カペイカ、そうですね、それは、あれにもさしずめ必要な金なんじゃありませんか、ねえ？ あなたはどうお考えですか、先生？ だってあれは、今じゃ身なりということに気をつけなくちゃならないのですからな。その身なりという奴がまた特別なものだから、相当金がかかるんですよ。おわかりですかね、第一、ポマードだって買わなくちゃならん、そのほか、糊のきいたスカートだの、泥濘を跳び越えたりする時に出来るだけ足の格好がよく見えるような可愛い靴もいりますしな。え、どうですか先生、おわかりですか？ この身なりということの意味が、それをです、それをわたしが実の父親がその三十カペイカを飲み代にふんだくって来てしまっただけです。そして、今こうして飲んでるんです！ いや、もう飲んでしまっただけです。……さあ、わたしのようなこんな人間を気の毒がってくれる人があるでしょうか！ ええ、先生、あなたには、今、このわたしが気の毒に思えますか、どうですか！ 先生、言つて下さい、気の毒か、気の毒でないか？ へ、へ、へ、へ」と言うのであった。

すると、「……お前などなんで気の毒がるんでえ？」と、また彼等のそばへ出て来た店の亭主が叫んだ。すると、笑い声がどつと起こった。口汚く罵る声さえ聞こえた。話を聞いていたものも、聞いていなかったものも、ただ退職官吏のいたらくを見ただけでも笑いながら悪態をつくのであった。「……なんでお前など気の毒がるかと、こう貴様は言うんですな？ そうだとも！ 気の毒がることなんか毛頭ありやしないさ！ それより磔刑にでもするがいいんだ、十字架につけるがいいんだ、気の毒がるなんてもつてのほかに磔刑にしる、磔刑にしる、だがね裁判官、磔刑にしてから憐れんでくれ！ そうす

ればおれも自分から進んで磔刑を受けに行くわい、なにしろおれの求めているのは、楽しみでなくて悲しみだ、涙だからな！ 貴様は、この小塚が楽しかったでも思っているのかい？ おれはその底に悲しみを、悲しみと涙を求めたんだぞ。そしてそれを見つけて、味わったのだ。（これは、もうどうにもやりきれないような想いを酒で何とか紛らわそうとするが、そうすればするほど、それは、まさに「蟻地獄」のようにもがけばもがくほど、もうどうにもやりきれないような想いを、さらにどこまでも「奈落の底」までも深めてしまうのである。それは、自分をより強く責め立てる、「後悔の念と自責の念」とを伴って生じて来るのである。）

*

*

例えば、酒でも煙草でも薬物でも、その他、もう何であれ、強い意志を以って、止めればいいじゃないか！ それだけのことだ。これほど簡単なことはないじゃないかと、たとえ他人からそう言われても、それがどうしても出来ない。それでは、なぜ、それがどうしても出来ないのかと、一般に、われわれはどうしてもそう思ってしまうわけである。——ところが、そう思う人たちもまた、例えば、ゲームであれ、スマホであれ、ギャンブルであれ、女遊びであれ、食べものであれ、その他、もう何であれ、それが止められないのである。それは、一体、どういうことなのかと敢えて問えば、それが、まさに重度の「依存症」ということであり、自分の意志だけでは、もうどうにもならないところがあるのである。（それは脳そのものが変化してしまう場合もあるのです）。それと全く同じように、この「ソーニャ」の父親（マルメーラドフ）という人も極めて重度の「アルコール依存症患者」であり、それゆえ、自分の「意志の力」だけではもうどうにもならないところまで来ていたということである。——一般に、われわれ人間というのは、わかっていながらも、なかなかそれが出来ないでいる、そこにわれわれ人間の「弱さや哀しさ」などがあるのかも知れない。

神の憐れみ

さて、万人を憐れみ、万人万物がすっかりおわかりになる神様は、おれたちをもまた憐れんで下さるのだ。（たとえすべての人間たちが自分を憐れんでくれなくても）、神様はたった一人で、しかも審判者だ。最後の日には来て、こうたずねて下さるだろう。「……意地のわるい、肺病やみの義母のために、親身でもない小さい子供たちのために、自分を売った娘はどこじゃ？ 人の世での自分の父を、やくざ者の酔どれを、その無道をも恐れずに情をかけた娘はどこじゃ？」と、そして仰しやるには、「……来れ！ われはすでに一度汝を許した……今も汝の多くの罪は許されるのじゃ、汝は多く愛したがゆえに」と。そして、おれのソーニャをお許し下さる。許して下さいさるんだ。おれはもうちゃんと知っているんだ。神様があれを許して下さいさることを……おれはさっきあれのところへ行った時に、この胸でちゃんと感じてきたんだ！ ……神は万人を裁いて、万人を許される。善人も、悪人も、賢い者も、おとなしい者も、そしてみんなを一巡すまされると、今度はわれわれをもお召しになって、「……出い、汝等も！」と、こう仰せられるんだ。「……出い、酒飲みも、出い、意気地なしも、出い、恥知らずも！」と、そこでわれわれは、臆面もなく進み出て、御前に立つ。すると仰せられる。「……汝豚ども！ 獣の相をその面に印し

ておるが、しかし、汝等も来るがいい！」と。すると、知者が言う、賢者が言う。「……主よ、何によって彼等を迎え給うや？」と、すると仰せられる。「……智なる者よ、われは彼等を迎える、賢なる者よ、われは彼等を迎える、彼等の中の一人として、みずからそれに値すると思う者がゆえに……」と。(神の愛は、無差別なのである)。そうしてわれわれにも、両のみ手をお延べ下さる。われわれはひれ伏して、そして泣き出す。そしてあらゆることをさとするのだ！ その時こそ、さとするのだ。誰も彼もがさとするのだ。(それは神の愛の大きさと自分や人間の罪深さと神への回心を)、カテリーナ・イワーノヴナも、あれもやつぱりさとするのだ。ああ主よ、汝の王国の来たらんことを！と、彼は疲れ、力尽き、まるで周囲のことを忘れてしまったように、誰の方をも見ないで、深く物思いに沈んだまま、ベンチの上へ倒れてしまった。彼の言葉はいくらか感銘を与えた。で、一分間沈黙があたりを領したが、じき、先ほどと同じ笑いと嘲り声とが続いて起るのであった。

父親(マルメラードフ)の部屋へ

さて、「……出掛けようじゃありませんか、先生」と、突然マルメラードフは顔をあげて、ラスコーリニコフの方を向きながら言った。「……ひとつわたしを送って下さらんか……コーゼルの家、中庭の方ですよ、もう潮時ですから……カテリーナ・イワーノヴナのところへ帰る……」と言うのであった。(これは、彼の中に溜まっていた実に様々な「思いや考え」などを、とにかくもまじめに聴いてくれる「話し相手」《ラスコーリニコフ》とめぐり逢い、そして、その「話し相手」《ラスコーリニコフ》にすべて語ることが出来たので、いわば気も晴れて「家に帰る決心」も出来たのではないかと思う。)

ラスコーリニコフは、もう先刻からここを出たいと思っていたし、彼を送ってやることは、自分でも考えていたことだった。マルメラードフは、口よりも足の方がはるかにまわっていたので、しっかりと若い男にもたれかかった。二、三百歩行かなければならなかったが、心の混乱と恐怖とは、家へ近づくにしたがって、ますます強くなるわけではなかった。「……わたしは今べつに、カテリーナ・イワーノヴナを恐れているわけではありませんが」と、彼は、わくわくしながらこう呟いた。「……あいつが髪を引きむしるのが恐いんでもありません。髪がなんです……髪なんか何でもありません！ そうとも、引きむしってくれるなら、かえってその方がましなくらいだ。そんなことが何が恐いものか、わたしは、あいつの眼が恐いんだ。そうだ、眼だ！ それから頬ぺたの赤い斑点、こいつが恐い。それからまた、あいつの息づかい、君は、あの病氣にかかった者の息づかいを見たことがあるかね。ことに気がたかぶっている時に！ それからまた子供の泣き声も恐ろしい。……だって、もしソーニヤが養ってくれなかったら、それこそ、今頃はどうなっていたかわからんのかな！ それに比べて、打たれることなんか恐くもなんともないさ……ね、先生、打たれるくらいは、痛いどころか嬉しいくらいだ。というのは、そうでもされなければ、こちらがやりきれないからね、いやかえってそのほうがいい。思うさま打って、腹の虫をおさめるがいいんだ、そのほうがいいんだ。あ、もううちだ、コーデルの家だ。金持のドイツ人の、鍵前屋の……さ、連れて行ってくれ」と言うのであった。

*

*

彼等は中庭から這入って、四階へと昇って行った。階段は、昇れば昇るほどますます暗

くなつた。もうかれこれ十一時であつた。ペテルブルグのこの季節には、真の夜というものはないのでけれども、階段の上の方はまるで暗闇だつた。——一番上の階段のはずれに、小さな煤けたドアが開け放しになつてゐた。蠟燭の燃えさしが、奥行き十歩ばかりの、いかにも貧しい部屋を照らしてゐた。部屋は入り口から一目で見渡せた。何から何まで乱雑に散らされてゐる中に、いろんな子供のぼろぎれがことに目立った。奥の方の片隅に、穴だらけのシーツが幕のように引かれていたが、その向こうには寝台が据えてあるらしかつた。部屋の方にはただ二脚の椅子と、ぼろぼろに裂けた模造皮張りの長椅子と、その前に何の覆いも掛けてない台所用らしい白木の松の古いテーブルが据えられているばかりであつた。テーブルの端には、鉄の燭台にさした燃え残りの蠟燭が立つてゐた。これで見ると、マルメラードフは、よその部屋の片隅でなく、一つの部屋を借りて住まつてゐるわけだが、その部屋は通り道になつてゐた。アマリヤ・リツペヴェルの住まいを細かく割つてゐる幾つかの奥の小部屋（これは「一つの部屋」を幾つかに分けて他人が同居している小部屋）、というより鳥かごへ通ずるドアは、開けつ放しになつてゐた。そこはがやがやと騒々しくて、人のわめき声や高笑いが聞こえた。どうやらカルタをしながら、お茶でも飲んでゐるらしかつた。時おり聞くに堪えぬ言葉が洩れてきた。

ラスコーリニコフは、すぐにカテリーナ・イワーノヴナを見分けた。それはかなり背の高い、すらりとして格好のいい、まだ艶やかな栗色の髪をした、恐ろしく痩せ細つた女で、なるほど斑点に見えるほど赤い頬をしてゐた。彼女は、胸に両手を押し当てたまま、干からびた唇をして、神経質らしくとぎれとぎれに息をしながら、広くもない部屋の中をあちこち歩きまわつてゐた。眼は熱病やみのように輝いてゐたが、そのまなざしは鋭く、じつと据わつて動かなかつた。この興奮した結核性の顔は、消えんとする蠟燭のちらちらふるえる光を受けて、病的な印象を与えるのであつた。ラスコーリニコフの見たところでは、彼女は三十そこそこらしかつた。そして、実際マルメラードフには過ぎたものだつた。

彼女は、人の這入つて来た気配を聞きつけもしなければ、見もしなかつた。彼女はいつも一種の放心状態に落ちてゐて、聞きもせず見もせぬといったような風であつた。部屋の中には息苦しかつたけれど、彼女は窓も開けてゐなかつた。階段の方からは臭気が漂つて来るのに、階段へ向いたドアは閉めてなかつた。奥の部屋からは、しつかり閉めてない戸口へ向かつて、煙草の煙が波のように流れてくるので、しきりに咳が出るにもかかわらず、彼女は戸をぴしゃりと閉めようとしなかつた。六つばかりの末の娘は、妙にちぢこまつてすわりながら、長椅子に頭を押しつけ床の上に眠つてゐた。一つ年上の男の子は、片隅でぶるぶる震えながら泣いてゐる。恐らくたつた今ぶたれたばかりなのだろう。九つくらいらしい、マツチのように細くて背の高い上の娘は、方々破れた粗末なシャツを一枚着て、古ぼけたドラダム織のマントをあらわな肩に引っかけてゐたが、膝までも届かない所を見ると、多分二年も前にこしらえたものらしい。彼女は片隅にたたずみ、マツチのようにやせた細長い手で弟の首を抱いてゐた。どうやら弟をなだめようとしてゐるらしく、何やら彼に囁いては、どうかして再び彼を泣かせまいとして、しきりになだめすかしてゐたが、それと同時に、やせ細つたおぼろげな顔に一層目立つて大きく見える暗い眼で、心配そうに母のほうばかりをうかがつてゐた。

この場面は、上の姉は九歳、次の弟は七歳、下の妹は六歳であり、末の妹は、妙にちぢこまつてすわりながら、長椅子に頭を押しつけ床の上に眠つてゐた。男の子はぶるぶる震

えながら泣いている。恐らくたった今ぶたれたばかりなのだろう。そして、上の姉は、片隅にたたずみ、マツチのようにやせた細長い手でその弟の首を抱いていた。どうかして再び彼を泣かせまいとして、しきりになだめすかしていたが、それと同時に、やせ細ったおずおずした顔に一層目立って大きく見える暗い眼で、心配そうに母のほうばかりをうかがっていたというまだ幼い子供たちの様子になるかと思う。

*

*

さて、夫のマルメラードフは、中へは入らないで、戸口のところにひざまず跪いて、ラスコーリニコフを前に押し出した。女は見知らぬ人を見ると、ちよつとの間（放心状態から）われ返って、ぼんやりとその前に立ち止まり、なんでこんな人がはいつて来たのかと考えるようなふうであった。が、なにしろ彼等の部屋は、通り道だったから。彼女はすぐにこれはほかの部屋へ行く人とも考えたらしい。こう考えると、もう彼には注意を向けないで、彼女は入り口のドアを閉めるために、そのほうへ足を向けた。と、そこに、敷居の上すねに跪ひざまずいている夫を見つけて、たちまちあつと声を上げるのであった。

「ああ！」と、彼女はたちまちわれを忘れて叫び、「……もどつて来た！ この悪党、人で無し！ お金はどこにあるの？ ポケットに何があるかお見せなさい。あ、服も変わつてる！ あの服はどこへやったのよ？ お金はどこです？ 早く仰しやい！……」と、彼女は、言いながら飛びかかつて調べ始めた。マルメラードフは、素直に、従順に、すぐ両手を左右へ広げて、ポケットを調べやすいようにした。金は、一カペイカもなかった。「……いったいお金はどこにあるの？」と、彼女は叫んだ。「……ああ、またすっかり飲んでしまったのね！ 手匣てびの中には、銀貨十二ルーブリも残っていたのに……」

そして急にかつとなると、夫の髪をひつつかんで、部屋の中へと引きづり込んだ。マルメラードフは、おとなしく彼女のあとから膝で這って、自分から妻の骨折りを軽くしてやった。そして、「……わしにはこれが快樂です！ 苦痛ではありません、快……楽です、せんせい！」と、彼は髪を引きずられながら、床に一度は額ひたいさえ打ちつけて、こう叫ぶのであった。床の上で寝ていた子供は、ひどくおびえた様子で、ほとんど発作的に姉にしがみついた。上の娘は半ば夢心地で木の葉のようにぶるぶる震えていた。

「……飲んじまった！ すっかり飲んじまった！」と、憐れな女は絶望して喚わめいた。「……それに服まで変わつてる！ みんなはひもじがって、ひもじがって、（こう言つて、彼女は苛立たしげに揉み手をしながら、子供たちを指さした）。ああ、なんていやな生活だろう！ それにお前さんも、お前さんも恥ずかしくないのかえ！」と、急に彼女は、ラスコーリニコフに食つてかかった。「……酒場から来たんだろう！ お前さんもこの人と飲んだのだろう？ 一緒に飲んだんどう？ 出て行つてくれ！」と叫ぶのであった。

*

*

若い男は、何とも言わないで、急いでそこを立ち去った。おまけに、その時にはもう奥のほうのドアがいつぱいに開いて、そこから物好きな連中が幾人も顔をのぞけていた。巻煙草たばこやパイプをくわえたのや、頭巾ずきんをかぶつたのや、いくつもの顔が、無遠慮にげらげら笑いながらのぞき込んでいたのである。中には、寝間着姿のもの、ボタンを全部はずしているもの、はしたないほどの夏なつごしらえをしたもの、中には手にカルタを持ったままの姿さえあった。わけでも彼等は、マルメラードフが髪を引きづられながら、これが快樂だと叫んだ時には、みんなは特別面白そうに高笑いしたのであった。彼らは部屋の中まで押し

込んで来た。やがて不吉な金切り声が起こった——それは家主のアマリヤ・リツペヴェフ
ゼルが、自己流の解決策を施すために、これまでもう何十遍となく繰り返した命令——
明日にもここをすぐ立ち退けという悪態まじりの命令で、この不幸な婦人をおびやかすた
めに、一同を押し分けながら前へと出て来たのである。

一方、ラスコーリニコフは、立ち去りがけに大急ぎでポケットへ手を入れて、酒場でく
ずしたルーブリの残りの銅貨を、手に当たっただけつかみ出すなり、うまくそつと窓じ
きりの上へのせることができた。が、もう階段へかかってから、彼は考えて、よほど引つ
返そうかと思つた。——「……なんておれは馬鹿なまねをしたもんだ」と、彼は考えた。

「……彼等にはソーニヤというものがある。おれこそかえつて（金に）困つてるんじゃないか」。
けれど、いまさら取り戻しもしられないし、取り返す気にもなれないことを思つ
て、彼はどうだつていいやと手を振り、家路をさして歩き出した。「……ソーニヤだつて、
やはりポマードがいるつて話だからな」と。彼は、通りを歩きながら、皮肉な微笑を含ん
で考え続けた。「……あの身なりという奴には金がいるんだ……フム！ それに、ソーネ
チカだつて今日にも破産するかも知れないじゃないか、早い話があれ（淫売婦）もやはり
一種の冒険だからな。……毛皮目当ての猛獣狩りや一攫千金の金堀りなどと同じように……
……すると彼等はみな、もし俺の金がなかったら、明日は日干しになつてしまふだろう。
……ああ、えらいぞ、ソーニヤ！ それはそうと、何とていい井戸を掘りあてたものだ
ろう！ そして、もうそれを使つてゐるんだ！ この通り使つてゐるんだ！ すっかり慣
れてしまつたんだ。ちよつと泣いただけですからすっかり慣れてしまつたんだ。人間という卑劣
漢は、何にでもすぐ慣れてしまふんだ」と、彼は思い沈んでしまつた。「……が、もしお
れが間違つてゐるとしたら」と、彼は突然、われにもなくこう叫んだ。「……もし実際に
人間が、種族全体が、すなわち人類全体が卑劣漢でないとしたら、それ以外のものはみな
——偏見で、何の根拠もない恐怖に過ぎない。したがつてもう何の障りもないわけだ。そ
れはそうあるべきはずなのだ……」と思つたのであつた。

*

*

さて、最後のところの文章は、なかなかその「真意」が分かりにくい内容であるが、例
えば、どん底の生活のその中で真に喘ぎ苦しむ、その「……家族のため、あるいはお金の
ために」と、ソーニヤは、泣く泣くわが身を切られるような想いで、「淫売婦」に身を墮と
していくが、その「淫売婦」というのは、（善悪の問題を別にすれば）、一気に「多額のお
金」を手に入れるには、（例えば、毛皮目当ての猛獣狩りや一攫千金狙いの金堀りなど
と同じように）、確かに、危険を伴う冒険ではあるが、なかなか「有効な方法」であり、
「……（お金を得るには）何とていい井戸（お金が得られる場所）を掘りあてたものだ
ろう！ そして、もうそれを使つてゐるんだ！ この通り使つてゐるんだ！（あれほど忌
み嫌つた淫売婦生活にも、今では）すっかり（その淫売婦）に慣れてしまつたんだ。ちよ
つと泣いただけですっかり慣れてしまつたんだ。人間という卑劣漢は、何にでもすぐ慣れ
てしまふんだ」と、主人公（ラスコーリニコフ）は、この時は、女主人公（ソーニヤ）の
ことをそのように思つて、彼は思い沈んでしまふのである。

しかし、「……もしおれが間違つてゐるとしたら」と、彼は突然、われにもなくこう叫
んだ。「……もし実際に人間が、種族全体が、すなわち人類全体が卑劣漢でないとしたら、
それ以外のものはみな——偏見で、何の根拠もない恐怖に過ぎない。したがつてもう何の

障碍もないわけだ。それはそうあるべきはずなのだ！……」と思うのであった。

さて、この最後の文章もその「意味合い」がよく分かりにくいだが、「……もし実際に人間が、種族全体が、すなわち人類全体が卑劣漢でないとしたら……」とあるが、まず、「卑劣漢」というのは、一般に、「……クズ野郎、クズ、ゲス、クズ人間、ゲスの極み、性根の腐った奴、クズヤロー、ゴミ、ゴキブリ、その他」という「意味合い」になるが、例えば、一般に、昔から「淫売婦」をそう呼んだりもするが、しかし、どん底の生活のその中で真に喘ぎ苦しむ、その「……家族のため、あるいはお金のため」の「淫売婦」であれば、逆に、そう呼ぶのは、単なる「偏見」に過ぎず、実際は「卑劣漢」でも何でもないとすれば、例えば、「……悪徳の高利貸しの老婆殺しをすれば、人は人殺し（人でなし）」と叫ぶだろう」が、しかし、それは、単なる「……偏見に過ぎず、何の根拠もない恐怖（臆病）に過ぎない。従って、（人に害を及ぼすだけの悪徳な高利貸しを殺すことに）もう何の障碍もないわけだ。それはそうあるべきはずなのだ！……」と、主人公（ラスコーリニコフ）は、そう思うのである。——つまり、「淫売婦」のすべてが悪いのではなく、また、「人殺し」のすべてが悪いのでもない。あれこれの「必要な条件」がすべて揃えば、許される「淫売婦」もあり、また、許される「人殺し」もあるという「考え方」であり、例えば、歴史上の数多くの「英雄たち」にしても、その多くは「人殺し」であり、紛れもない「人殺し」でありながら、まさに「英雄」として高く評価されているのである。この「難題」（難問）が、やがて『罪と罰』という作品の一つの大きな「中心テーマ」にもなっていくのである。

九、翌日の朝

翌日、彼は、不安な眠りのあとで、遅くなつてから眼をさましたが、眠りも彼を力づけてはくれなかった。彼は、むしゃくしゃした、苛立たしい、ひねくれた気分で見まますと、憎悪に満ちた眼でじろじろと自分の小部屋を見まわした。それは奥行六歩ばかりの狭い部屋で、黄ばんだ、埃だらけの壁紙が、どこもかしこも壁からはがれてぶらさがつていて、いかにもみすばらしい光景を呈している上に、その天井の低さといったら、少し背のある人では息苦しくて、のべつ今にも天井へ頭を打ちつけはしまいかと、心配していなければならぬほどであった。家具も部屋にふさわしいもので、どうやら形だけ保っている古椅子が三脚と、幾冊かの本やノートなどをのせた片隅に置かれたペンキ塗のテーブル。すべてが埃まみれになっているのから見ても、もう長いこと誰の手もそれに触れていないことがわかった。それから最後にもう一つ、ほとんど壁いっぱい部屋を半分占領している粗末な大型の不恰好な長椅子があり、かつては沙羅張りだったのが、今ではすっかりぼろぼろになって、ラスコーリニコフのために寝台の役をつとめている。彼はよく着のみのまま、服さえ脱がず、シャツもなしで、すり切れた学生用の外套をひっかけ、頭の下には小さい枕をあてて、その枕を高くするために、ありったけの肌着を、きれいなのも汚ないのも、残らずその下へ押し込んで寝たものである。長椅子の前には一脚の小さいテーブルが置いてあった。

*

*

さて、これ以上身をおとしてだらしくすることは、ちょっとむつかしいくらいだったが、ラスコーリニコフの今の心の状態では、その方がむしろ気持ちよかったのである。彼は、丁度、亀が甲羅の中に閉じ籠るように、徹頭徹尾すべての人から遠ざかっていたので、彼の用を足すのが勤めになっていて、時々彼の部屋をのぞく女中の顔までが、彼には痲癩かんじやくと瘰癧けいれんの種であった。もともとこういうことは、あまりものに懲り過ぎたある種の偏執狂にはよくあることなのである。下宿の主婦が食事をよこさなくなつてからもう二週間にもなるのに、彼は食うものもなしで坐つていながら、今日までまだ一度もかけあいに行こうとすら考えないのだった。主婦の使つていた一人の女中であり料理女であるナスターシヤは、一面では下宿人のこうした気分をいいことにして、彼の部屋は、てんで片付けもしなければ、掃除もしなくなつてしまい、ただ一週に一度くらい、どうかすると、思い出したように箒ほうきを持つだけであつた。そのナスターシヤが今、彼を起こしたのである。

さて、「……起きなさいよ、いつまで寝坊してるのさ？」と、彼の頭の上でどなりつけ、「……九時すぎよ。お茶を持って来てあげたんだからさ、お茶ほしくないの？ きつとおなかぺこぺこだらうに？」と言うので、下宿人は眼を開いて、ひとつ身ぶるいすると、ナスターシヤに気がつき、そして、「……お茶つて、おかみさんがくれたのかい、ええ？」と、彼は、病的な顔をして、のろのろと長椅子の上で起き直りながら聞いた。すると、「……なんでおかみさんが！」と、彼女は出がらしのお茶の入ったひびだらけの自分の茶碗ちawanを彼の前に置いて、黄色い砂糖のかたまりを二つおいた。「……あのね、ナスターシヤ、ご苦労だがこれを持って」と、彼はポケットをさぐり、（彼は着のままで寝ていたのである）、銅貨を一つかみ取り出しながらこう言った。「……どこかで白パンを買つて来てくれないか、それから、肉屋で腸詰めでも少し安いのをな」と言うので、「……白パンはすぐ持つて来てあげるけどね、腸詰めのかわりにシチューはどう？ 上等のシチューよ、きのうのだけど、昨日あんたに取つといてあげただけど、あんたの帰りが遅かつたでしょう。そりやおいしいシチューよ」と言うのであつた。そして、彼女は、そのシチューを持つてきて、彼がそれに手をつけると、ナスターシヤは、彼と並んで長椅子に腰を下ろし、おしゃべりを始めたが、彼女は、田舎出の女の一人で、いたつて口まめなほうだったのである。……

*

*

そして、「……おかみさんがね、あんたのことを警察へ願うつて（訴える）と言つたわよ」と、彼女が言うと、彼は、きつと眉毛まゆげをひそめて、「……警察へ？ 何のために？」と言うので、「……お金も払わないし、越しても行かないからだわ。わかりきつてるじゃないの」と言うので、「……ちえつ、これでもまだ足りないのか」と、彼は、齒はがみをしながら呟つぶやいた。「……いや、これは今のおれにとつて……少々都合がわるいて……馬鹿だな、あいつは！」と彼は大きな声で言い足した。そして、「……今日かみさんの所へ行つて、談じなくちゃ」と言うのであつた。

一方、彼女は、「……そりゃ、おかみさんも、馬鹿は馬鹿だわ、あたしも同じようにね。だけど、あんたはいつたいどうなのさ、お利口さん、毎日袋のようにごろごろして、何ひとつしないでいてさ？ 先には、子供を教えに行くんだつて言つたのに、この節ではどうして何にもしないの？」と聞くので、ラスコーリニコフは、「……おれはしてるよ！」

と、うるさそうに荒っぽい調子でこう答えた。そこで、「……何をしているの？」と聞く
と、「仕事さ……」と答え、「……どんな仕事を？」と聞くので、彼は、「……考えごとを
さ」と、ちよつと黙つてから、真面目にそう答えた。すると、ナスターシヤは、「……た
ちまち笑いこけてしまった。彼女は笑い上戸で、人に笑わせられると、声も立てないで、
からだじゆうをゆすつたりふるわせたりしながら、苦しめてたまらなくなるまで笑いこけ
る」のだった。そして、「……どつさりお金が、考えだせて？」と、彼女は、遂にやつと
これだけを言ったのであった。

すると、「……靴もなしじゃ子供を教えにも行かれんからね。それに、あんなこともう
いやなこつたよ」と言うので、「……そんなこと言わないことよ」と返すと、……子供の
お札なんか銅貨だからな。そんなはした錢で何ができる？」と、彼はまるで自分の考えに
応えるように、不機嫌な調子で続けた。「……じゃあんたは、一ぺんにひとしんしょこさ
えようっていうの？」と聞くと、彼は変な顔をして彼女を見やった。そして、「……うん、
一ぺんにこさえるんだ」と、しばらく黙つてから、彼はきつぱりと答えた。「……まあ、
もつと静かに仰しやいよ。びつくりするじゃないの、おつかない顔つきをしてき。それは
そうと、白パンはとつてくるの、もういいの？」と聞くので、「……どうでもいいや」と
言うのと、「……あ、そうそう、忘れていた！ あんたんとこへ、きのう留守の間に手紙が
来てたわ」と言うので、「……手紙、おれに！ どこから？」と聞くと、「……どこから
だか知らないわよ。あたし郵便屋さんに三カペイカ自腹を切つておいてよ。返してくれる
わね？」と言うと、「……じゃ持つてきてくれ、お願いだ、持つてきてくれ！」と、ラス
コーリニコフは、すっかり興奮して叫び出した。……

さて、手紙は、じき持つてこられたが、果たして——それはP県の母から来たものであ
つた。彼はそれを受け取ると、急に顔色まで変えたほどであった。彼はもう久しく手紙と
いうものを受け取らなかつた。しかし、今はそれ以外に何かしらある別なものが急に彼の
心をしめつけたのだった。「……ナスターシヤ、行つてくれ、お願いだ。ほらこれは三カ
ペイカだ。後生だから、早く行つてくれ！」と言うのであった。——早くこの手紙と自分
だけになりたかつたのである。ナスターシヤが出ていくと、彼は、素早くそれを唇にあて
て接吻した。それからなおしばらく宛名の文字——彼にとつて親しく懐かしい、昔、彼に
読み書きを教えてくれた母の小さい斜めな筆跡にじつと見入つた。彼は躊躇した、どうや
ら何かを恐れてでもいるような工合であった。遂に彼はそれを開いた——目方六、七匁
もありそうな長い、分厚い手紙だった。二枚の大きな書簡箋一面に実に細かくびつしりと
書かれてあつた。

*

*

さて、この場面は、主人公(ラスコーリニコフ)と賄いの女中(ナスターシヤ)との
間の会話(関係)部分になつてはいるが、最初、彼(ラスコーリニコフ)の「部屋」の様子
や彼の性格などがより細かく説明されているとともに、賄いの女中(ナスターシヤ)は、
彼(ラスコーリニコフ)を一応「大学生」として評価(対応)しているのであり、それゆ
え、決して軽蔑しているというのではないが、ただ、なぜ勉強も働きもしないのかと不思議
に思っているのである。そして、この場面でも最も大事なことは、次の二つのことであり、
その一つは、「……おかみさんが彼を家賃不払いで警察に訴えよう(或いは訴え出た)」
ということであり、そして、もう一つは、「……母からの手紙が彼のもとに届いた」とい

うことであり、この「二つの出来事」によって、この『罪と罰』という作品の「物語」（ストーリー）は、一気に、新たな展開へと向って行くのである。……

十、母からの手紙（全文）

さて、「物語」（ストーリー）は、母親からの長い「手紙」という展開になるが、まず、主人公（ラスコーリニコフ）の「家族構成」であるが、それは、父親はすでに亡くなり、あとは「母親と妹それに本人」という、いわば「三人家族」である。そして、その母からの「手紙」というのが、実に「長い手紙」であるが、しかし、それによってこそ、主人公（ラスコーリニコフ）側のこれまでの実に様々な「家族の様子」が、この『罪と罰』を読むすべての「読者」の人たちに、実に「生々しく事細かなところまではっきりと分かるようにしている」のである。それゆえ、敢えてその「全文」を記載しておきたいと思う。

一、母親の想いと送金の事について

『親愛なるわたしのロージャよ』と母は書いていた。「……お前と手紙でお話をしなくなってから、もうやがてふた月の余りになります。わたしはそれが苦になって、考え出すと夜もおちおち睡れなくらいです。けれどお前はきつと、わたしの心にもないご無沙汰を、責めはなさるまいと思います。わたしがどんなにお前を愛しているかは、お前もよく知っておいではずなんだから。お前は家の一人息子、わたしにもドゥーニャにも、かけがえのない、それこそわたし達のすべて、あらゆる望み、頼みですもの。お前が学資を続ける方法がないために、もう幾月か前に大学もやめ、家庭教師そのほかの仕事もすっかりなくなったということを知った時の、わたしの気持はどんなだったと思います。年に百二十ルーブリヤやそこいらの年金で、わたしにどうしてお前を見て上げることが出来ましょう。四ヶ月前お前に送った十五ルーブリも、お前もかねて知っての通り、この年金をかたにして、当時の商人ヴァシーリイ・イヴァーノヴィチ・ヴァフルーシンから借りたものです。あの人はいい人で、その上お父様のお友達でした。けれど、わたしはあの方に、わたしにかわって年金を受け取る権利を譲ってしまったので、その借金の片をつけるまでは、どうでも待たなければならなかったのです。それを今やつとすましたくらしいところなので、この間じゆうはどう焦ってみても何一つお前に送って上げることは出来なかったのです。でも今は、有難いことに、少々ぐらいは送金もできそうだし、それにまた、ほかの点でも私達もどうやら近頃では、運が開けかかって来たようにも見えるので、そのことも早くお前に知らせたいと思ひましてね。

二、家の主人からひどい扱いを受けて

まず第一には、ねえロージャや、お前ももうお察しかどうか、お前の妹は、もうひと月半もわたしと一緒に暮らしていて、わたし達はもうこの先別れないですみそうだといいことです。ああほんとうに、お陰であの子の苦勞も終りましたよ。だけどお前には何もかもすっきりもう少し順序を立ててお話ししましょうね。お前が、万事がどんなふうであった

か、また今までわたし達がお前に隠していたのがどんなことだったか、それがすっかりよくわかるように。ふた月前にお前はわたしに宛^あてて、ドゥーニヤがスヴィドゥリガイロフ家で不法な仕打ちを受け、何かと大分辛い思いをしているという話を聞いて、たしかなことを問い合わせたおよこしだった——その時わたしは、なんと返事をしてあげたらよかったでしょう。もしわたしがありのままと包まず書いてあげたものなら、お前はきっと何もかもうち捨てて、歩いてでも帰っておいでだったに違いない。わたしは、お前の気も心もよく知っていますが、お前は、自分の妹に恥をかかせて黙っていられる人ではないのですから。第一、わたし自身がとりのぼせてしまったくらいですもの。かと言って、ほかにどうしようがありませんか？ 何を言ってもその当時には、わたし自身もまだ十分事情を知らなかったんですからね。それに何より一番困ったのは、ドゥーネチカが昨年あの家へ家庭教師に住み込む時に、月給の中から月賦で差し引くという約束で、百ルーブリの前借りをしたことで、その借りを片づけてしまわないうちは、おいそれと暇^{ひま}をとるわけにも行かなかったことでした。このお金は（今だからお前にも打ち開けて話してあげられるのだがね、ねえロージャや。……）と言うのであった。

三、実は「本心」がばれないようにと

丁度あの時、お前がどうしてもいると言っておよこしで、去年わたし達の手からお受け取りだったはずの六十ルーブリ、あれをお前に送りたいが八分で、妹が借りたものなのですよ。あの時わたし達はお前をだまして、ドゥーニヤの貯金から出したもののように申しておきましたが、実はそうではないので、今だから包まずお前にも申上げるのですが、というのも今では神様のお陰で、万事が急にいいほうへ向いてきたゆえ、ドゥーニヤがどれほどお前を思い、どれほど見上げた心を持っているかということをお前にもぜひ知って貰いたいと思えばこそです。まったく、スヴィドゥリガイロフさんは、初めあの子をずいぶん粗雑に扱い、食事どきなどにはいろいろ無礼なことや馬鹿にしたりするようなこともなすったそうです……。ですが、もはや万事が過ぎ去った今、こんな面白くもない話をくぐくぐと書き連ねて、無益にお前の心をかき乱したくはありません。で、かいつまんで申せば、スヴィドゥリガイロフさんの奥さん、マールファ・ペトローヴナはじめ、家の人たちはみなさん親切に優しくして下さるのに、ドゥーネチカにはどうにもいづらかったのは、ことにスヴィドゥリガイロフさんが、昔軍隊にいた頃のくせで、バツカス（酒の神）の虜^{とりこ}になつてしまいなさるような時がたつらなくてならなかったということですが、その後になつて、いったいまあんなことがわかったと思えますか？ ほんとうにあきれちゃありませんか、この気がいみじいな人は、もうとうからドゥーニヤに思いをかけたいたのだが、それをみんなあの子に対する粗暴な態度や、馬鹿にしたような仕打ちの下に隠してきたんだというんですもの。もつともあの人にしてからが、自分がいい年をして、一家の父でありながら、そんな浮いた望みを起したことを、恥かしくも思い、空恐ろしくも考えて、それでついそうしてドゥーニヤにつらく当たったのかも知れません。自然、荒々しい仕打ちをしたり、馬鹿にするような素振りを見せたのも、ただただはたの者に自分の本心を見すかされまいためだったのかも知れません。

四、庭先で夫が言い寄るのを妻が見てしまう

ところが、最後にとうとう我慢がしきれなくなると、あの人はドゥーニヤに向つて、あから様にいやらしい申込みをして、あの子に色々な報酬を約束したり、その上、あの子と一緒に、何もかも打ち捨てて、ほかの村へでも、外国へでも行くなどと申しましたよし、その時のあの子の当惑、それはお前にも十分察しのつくことと思います。が、すぐ暇をとるといふことも、お金の一件があるばかりでなく、マールファ・ペトロヴナのことを思えば、そうむげには出来なかつたわけです。なにしろそんなことをすれば奥さまは急に疑いを起し、それがために自然家内に波風の種をまく道理ですからね。それにドゥーネチカにしても、この上ない恥さらしな話で、とてもただではすみませんからね。それにほかにもなお色々な事情もあり、六週間というものは、ドゥーニヤはどうしてもこの恐ろしい家から逃げ出すわけには行かなかつたのです。もちろんお前はドゥーニヤをよく知つておいでしよう。あの子がどんなに利口で、どんなにしつかりした気性を持っているかもよく知つておいでしよう。ドゥーネチカはたいがいのは辛抱のできるたちです。よくよくな時にでも、しつかりした気性を失わないだけのゆとりを心に持っています。当時あの子はわたしにさえ、心配させまいという心づかいから、何一つ知らせてよこさなかつたくらいです。手紙のやりとりは始終していたのに。そのうちに、思いがけない大詰めがやってきました。マールファ・ペトロヴナがふとしたことから、庭でドゥーネチカを口説いてゐる夫の言動を立ち聞きして、何もかもを逆にとり、あの子のほうから仕掛けたことのように思い込んで、徹頭徹尾あの子の罪にしてしまったのです。そこで、その庭先で恐ろしい騒ぎが持ちあがり――マールファ・ペトロヴナはドゥーニヤを打つやら叩くやら、こちらの言うことは何ひとつ取りあげようとはしないで、一人でまる一時間も喚き通したあげく、とうとうその場からドゥーニヤを普通の百姓馬車に乗せて、街のわたしのところへ送り返すように言いつけ、そして荷馬車の中へ、あの子の持ち物や衣類や肌着を、手当り次第に、畳みもせぬば包みもしないで、叩き込ませてしまったのです。ところがあいにくその時は、凄いな夕立でしてね、その中のドゥーニヤは、さんざんに恥をかかされ、面目を踏みつぶされたまま、百姓男と一緒に、屋根もない荷馬車で十七露里の余も乗つてこなければならなかつたのですよ。さあ今こそ考えてみて下さいよ。あの時わたしは、あのふた月前におくれだつた手紙の返事に、お前になんと書いてあげられたか、どんなことを書けばよかつたか？ わたし自身がとりのぼせてしまつていたのに、ありのままをお前に書いてあげることなどは、とてもとても。なぜと言つて、そんなことでもしようものなら、お前がこの上なく不仕合わせになつて、苦しんだり歎いたりしたあげく、どんなことをしでかすか知れないと思つたからですよ。うっかりすればお前までが身を滅ぼすようなことをせぬとも限らないし、それにドゥーネチカも止めるしね、と言つて、こんな悲しみが胸いっぱいになつてゐる際に、よそごとで、いい加減に手紙を埋めることも、わたしにはできなかつたのですよ。

五、その噂が町じゅうに広まつてしまう

ところが、それからまるひと月というものは、こちらでは、この事件についての噂が町

中にひろがって、しまいには、蔑むような眼付やひそひそ話を通り越して、実際自分たちの前で聞えよがしに話すような人まで出てきたので、わたしとドゥーニヤとは、教会へ行くことも出来ないくらいになってしまいました。知合いの人達も、みなわたし達から顔をそむけて、挨拶さえしなくなってしまうました。それだけではありません。このへんの店の御用聞きや事務員などが、家の門にコールタを塗って、わたし達にその上に恥をかかせようとしたことなども、わたしはたしかにつきとめました。それで家主の方では、わたし達に立ち退いてくれと要求して来ました。これというのみな、一軒々にドゥーニヤの悪口をふれ歩いたマールファ・ペトロヴナの仕業だったのです。あの人はこの町では大抵の人と知り合いなので、今月のはべつこちらへ出て来ていたんですが、何分少々おしやべりのほうで、内輪話し好きなのはまだしも、どうもあきれたことには、自分の夫のことを誰彼なしに訴えるのが好きだものですから、またたくうちに町じゅうはおろか、郡じゅうにまで例の一件をしゃべり広げてしまったのです。わたしはどうとう病気になるってしまいました、ドゥーニヤの方はわたしよりずっとしつかりしていました。ほんとにもしお前が、あの子が何事をも堪え忍んで、わたしを慰めたり励ましたりしてくれた健気なさまをご覧だったらと思いますよ。ほんとにあの子は天使です！ けれど、神様のお恵みで、わたし達の苦しみも短くしていただきました。

六、家の主人が彼女の潔白を証明する

それは、スヴィドゥリガイロフさんが考え直して、懺悔してくれたのです。多分ドゥーニヤをかわいそうでも思ったのでしょう。マールファ・ペトロヴナの前に、ドゥーニヤの潔白を証明するたしかな証拠を出してくれたのです。というのは、まだマールファ・ペトロヴナが二人を庭先で見つけない以前に、ドゥーニヤが、あの人に強いられた密会や、二人きりで話すことを避けるためによんどころなく書いてあの人に送った手紙で、ドゥーニヤが帰って来てからも、スヴィドゥリガイロフさんの手に残っていたものでした。その手紙の中であの子は、マールファ・ペトロヴナに対するあの人への道にはずれた行いを、はげしく、憤りにみちた調子で責め、あの人を人の父であり、一家の主人でありながら、それでなくても不仕合わせな頼りない娘を苦しめたり、不幸にしたりすることの、それが人としてどれくらい卑しいことかということ、はつきり指摘してゐるのです。まあひと口に言えばですね、ロージヤや、その手紙は、それを読んでわたしが泣いてしまったほど、今でも涙なしには読めないほど健気に、いじらしく書いてあるのです。なおそればかりでなく、しまいには、よくあることで、スヴィドゥリガイロフさんが思ったよりずっとよく、何もかもを見もし聞きもしていた召使たちという証人が、ドゥーニヤの味方として出て来てくれたのです。

七、奥さんが町じゅう誤解を説いてまわる

マールファ・ペトロヴナは、すっかり面喰らってしまいました。あのひとが自分でわたし達に言ったように「二度びつくりした」わけなのです。そのかわり、ドゥーニヤの潔白を十分に信じて、その翌日の日曜に早速会堂へ乗りつけて、マリヤさまの前に跪くと、

自分がこの新しい試練に堪えて、自分の責めを果たすだけの力を与えて下さるようにと涙を流して祈りました。それから、会堂からまっすぐに、誰のところへも寄らないでうちへ来て、わたし達の一部始終の話をして、おいおいと声を上げて泣き出すしまつ、いかにも心から後悔した様子で、ドゥーニヤを抱いて、許してくれるようにと頼むのです。そして明日ともいわずその朝のうちに、一刻の猶予もしないで、わたしどもからすぐその足で、町じゅうの家々を一軒残らずまわり歩いて、ドゥーニヤにとつてこの上なく気持のいい調子で、涙を流してあの子の潔白を証明し、あの子の心と行ないの気高さをほめそやしました。そればかりかドゥーネチカがスヴィドゥリガイロフに送った手紙までをみんなに見せて、声を上げて読んで聞かせた上、その手紙の写しまでとらせたりしたのです。(これは、わたしにはちと余計なことのように思われますが) そんなふうであの人は、五、六日ぶつ続けに町じゅうの人をまわり歩かなければなりませんでした。というのは、中には、よそを先にしたと言つて腹を立てる人まで出てきたからです。で、順をきめてまわることにしたところが、いついつにはマールファ・ペトロヴナが、どこそこでその手紙を読むということをとちまちま人が知つてしまつて、その度に、もう何べんも自分の家やら知りあいの家やらで、順番に読んで聞かされた人たちがまでが、またぞろ集まつてくるという騒ぎでしてね。わたしとしては、少々どころか、大分やり過ぎのように思いましたが、でもこれがマールファ・ペトロヴナの性分なのですからね。とにかくあの方はそれで、ドゥーネチカの名誉だけは十分にとり返してくれました。そのかわり今度は、この事件のわるいことがみな、張本人であるあのひとの旦那さんの上へとり返しのかぬ恥辱となつて落ちかかったので、わたしなぞかえつて気の毒な思いをしたくらいでした。あの気がいじみた人を裁くにしては、あんまり手厳し過ぎたような気もしましてね。

八、娘の結婚話と結婚相手の様子

さて、ドゥーニヤにはすぐ二、三軒の家から家庭教師にと申込んできましたが、あの子は断りました。とにかく、世間の人がみな急にあの子に対して、特別な尊敬を払つてくれるようになったのです。そして主にこの事がもとになつて、今こそわたし達の運命が変わつてしまふと言つてもいいような、思いがけぬ出来事が起つてきたのです。というのはほかでもない、ねえロージャヤ、ドゥーニヤに結婚を申込んだ人があつて、あの子ももうそれに承知の返辞をしたので、実はお前にも取り急いでお知らせする次第なのです。もっともこの話は、お前には相談なしに決めてしまったことだけれど、たぶんお前はわたしに対しても妹に対しても、気を悪くなさるようなことはあるまいと思ひます。なにぶん事情が事情ゆえ、お前もおわかりだろうけれど、便々とお前の返事の来るのを待つたり延ばしたりしているわけに行かなかつたのですよ。それにお前にしたところで、まさか目にも見えないことを、そう正しく判断することはむづかしいでしょうからね。それで話はこうなのです。その相手というのは、ピョートル・ペトロヴィッチ・ルージンと言つて、このことでもいろいろ尽力して下されたマールファ・ペトロヴナの遠縁に当る、もう七等官にもなつてゐる人です。ある人を通して、わたし達と近づきになりたいと言つてきたのが始まりで、それから型通り家へ客に来て、珈琲を飲んだりしました。すると、その翌日さつそく手紙で、大層鄭重に申込みしてきて、至急はつきりした返事を貰いたいと頼んで寄

こしたのです。なかなか腕利きの忙しい人で、とりわけ今はペテルブルグへ急いでいるので、一分間を争う時だということです。そりゃむろんはじめはわたし達も、なにしろあまり思いがけない急な話なので、ただもう呆気にとられてしまいました。わたし達はその日一日、額をあつめて相談しました。その人というのは、将来見込みのある、確実な人で、二カ所に勤めを持っていて、財産ももう相当に出来ている人なんです。もともと、年は四十五なのですが、なかなか様子のいい、まだ結構女にも好かれそうな、それに、総じていかにもどつしりとした立派な人物です。ただ少しむつかしそうで傲慢らしいところはありますけれど、もつともこれはひと目見た時の感じでちよつとそう思われただけでも知れません。ついては、ロージャや、お前にも前もつてよく言っておきますが、ペテルブルグでその人とお会いの節には、それはこう言っているうちにも起ることだと思えますが、たとえひと目見ただけで、何かお前の気に入らないところがあつても、お前のいつもの流儀で、あまり性急な、無闇な判断をなさらないように。あの方なら大丈夫、お前にもきつといい印象を与えることとは信じていますが、念のために申し添えます。こればかりではありません、誰によらず人を知ろうというには、後になって改めようにも取り消そうにも始末のつかぬような見込みがちがいや、早合点をしないように、ゆるゆると注意深く見るようにしなければなりませんよ。ともあれ、ピョートル・ペトローヴィッチは、いろいろな点から考えて、なかなか立派な人です。初めての訪問の際にも、あの人にはわたし達に、自分は實際家のほうであるが、しかし、多くの点において「わが新時代の信念」——これはあの人自身の言葉です——をわかつもので、すべての偏見の敵だと申しました。そのほかまだいろいろなことを申しました。というのは、どうやら少々見栄坊で、人に話を聞かせるのが大へん好きらしいからですが、こんなことはべつに何も欠点というほどのことでもありません。わたしは無論よくはわからなかったのだけれど、ドゥーニヤがわたしに、あの人にはあまり教育の高い方ではないが、しかし賢く、いい人のように思われると話してくれました。お前は妹の性質を知っておいででしょう。ねえ、ロージャ。あの子はなかなかしつかりもので、分別もあり、辛抱強くもあり、烈しい気性でありながら、なかなか心の広い娘です。それはわたしがよく見ぬいています。もちろん、今度のことでは、あの子の方にも、あの人の方にも、特別な愛情というものはあります。けれどもドゥーニヤは、惻念な娘というほかに——天使のように心の清い娘であり、夫を幸福にすることを自分の義務と心得るでしょうし、そうすれば夫の方でも自然の道理として、あの子の幸福を心配してくれるはずです。

九、結婚相手の性格や考え方

で、あの子の幸福ということについては、実をいうと、あんまり早急にまとまった話ではあるけれど、今のところかくべつ気にかけるほどのこともないのです。それに、あの子は大変先々の見通しのきく人ですから、もちろん、自分でも、夫としての自分の幸福というものは、ドゥーネチカが幸福になればなるほど、一層確かなものになるというくらいのこと、心得ているに違いありません。もつとも性質が少しくらい違っていることや、古い習慣や、意見の相違などということも多少はありましようが、（これは、どんなに幸福な夫婦の間にも避けることの出来ないものです）、それについてはドゥーネチカが、自分

に自信があると言っていました。何も心配することはない、将来の関係が、ずっと公平に正しく続いて行きさえすれば、あの子は大抵のことは辛抱できると申しているのです。人の外見というものは、いたって欺きやすいものです。あの人などがそのいい例で、わたしも最初は何となくいかつい人のように感じましたが、しかしこれなどは、つまりあの人、あまり生一本すぎるからも起り得ることですし、また、きっとそうに違いありません。早い話が、現に二度目の訪問の時、それはもうこちらで承諾の返事をしてからではありませんが、話の中でその人は、自分はまだドゥーニヤを知らなかったはずと前から、是非、潔白な、しかし持参金などを持たぬ、一度は必ず貧乏暮しを経験したことのある娘を娶りたいと思っていたなどと言いつたのではなく、話のはずみでつい口をすべらしたものに違いない、その証拠には、あとで、しきりに言い直したり、言いつくろったりしようとしていました。けれどわたしにはやはり、ちと言葉がすぎるような気がしたので、あとでドゥーニヤにその話をしました。ところが、ドゥーニヤはかえって不機嫌な顔をして「……言葉はまだ行ないではありませんから」と申しました。まったくそれに違いありません。なにしろ話をきめる前には、ドゥーニヤは「一晩じゅう寝もやらず、わたしが眠っているものと思つて、床から起き出て、夜通し部屋の中をあちこち歩きまわっていました。そして最後に聖像の前に跪いて、長いこと熱心に祈りました。こうして朝になって、初めて、わたしに心を決めたことを申したくらいなのですからね。」

十、主人公の将来の就、職先として

「……わたしはもう、ピョートル・ペトローヴィッチが近々にペテルブルグへ立とうとしているという事は申しましたね。あの方は、ペテルブルグに大きな事件がいろいろあるので、そこで弁護士事務所を開こうというわけなのです。あの方はもう長らくいろんな訴訟事件を扱っていて、近頃もある重大な訴訟に勝ったばかりだということでした。あの方が是非ペテルブルグへ行かなければならぬというのも、実は大審院に大切な事件があるからなのです。そういうわけで、ねえロージャヤ、あの方は何かにつけてお前のためにもなる人らしいから、お前はもう今日からでも、今後の方針をはっきり立てて、自分の運勢がすつかり定まったものと思つてもよいのだと、わたしとドゥーニヤとはもう勝手にそう決めております。おお、もしこれがほんとうにそうなってくれたら！ それこそ神様がわたし達に直きじき下されたお慈悲に違いないと思わねばならぬほどの幸福です。ドゥーニヤはただそればかりを空想しています。わたし達はそれについてももう、ピョートル・ペトローヴィッチにそれとなく当ってみました。すると、あの方が鹿爪らしい顔をして言うには、もちろん、自分にも秘書がなくてはならぬから、給料なども当然他人に払うよりも、身内に払う方がいいに決まっている、ただ本人にそういう仕事が出来さえすれば（まあ、お前にそれが出来ないなんてことがどうしてありませんか！）しかし大学の方もあること

だから、事務所で働く暇ひまはあるまい、というような懸念を洩らしていました。で、その時はそれきりになりましたが、ドゥーニヤは今でも、そのことよりほかには何も考えておりません。あの子はここ四、五日というものの夢中になって、やがてお前がその法律事務所でピョートル・ペトローヴィツチの片腕、いえ、その仲間にさえなつて何とか働くというようなことで、すっかり計画を立ててしまいました。それにはお前が法、科かにおいでなのだから、なおさら好都合だなどと言っているのです。それでね、ロージャヤ、わたしもそれにはすごく賛成で、あの子の考えや望みは十分確かだと見て、同じように喜んでいきます。もつとも今のところは、ピョートル・ペトローヴィツチはあまり気乗りのしない様子ですけど、これも、これは無理のない話で（それというのも、一つはまだお前を知らないからです。）

でもドゥーニヤは、未来の夫に対する自分の感化ひとつで何事も思い通りになるものと固く信じております。もちろん、わたし達もそんな先々の空想については、ことにお前があの人の仲間になるなどということについては、用心して、ピョートル・ペトローヴィツチには少しも口をすべらせたりはしませんでした。なにしろあの人は、ああいう実際的人だから、つまらない夢でも見ているように思われて、すげない素振りを見せるかも知れませんからね。こういう次第で、わたしもドゥーニヤも、お前が大学おいでの間、学費を助けてもらいたいというわたし達の深い望みについては、まだひと言も打ち開けてはおりません。それを言わなかった理由は、第一、こういうことはそのうち自然にできることだし、こちらから余計なことを言わなくても、あの人の方から言い出してくれるに違いないと思うからですが、（どうしてあの人が、ドゥーニヤのこれくらいの頼みを聴かずにおきましよう！）それよりも、お前は仕事の方で立派にあの人の片腕になってあげることが出来るのだから、これくらいの補助は、もう恩を受けるのではなく、自分で稼いだ棒給ぼうくわいという格で受けられるようになると思つたからです。もとより、ドゥーネチカもそういう風に事を運びたいと思つていますし、わたしもそれに大賛成なのです。

次に、それを言わなかった第二の理由は、とりわけわたしが、もうじきお前たちがお会いの時に、お前をあの人と対等の位置に置きたいと思つたからです。ドゥーニヤがあの人にお前のことをいろいろと話した時に、あの人は、誰にしる人を判断するには、まず自分で出来るだけ近づいてその人を見なければならぬものだから、お前についての意見をまとめることも、まずお前と会つてから自分で勝手にすると答えました。ところでね、わたしの大事な大事なロージャヤ、わたしはいろいろ考えた上で、（といつても、それは決してピョートル・ペトローヴィツチに関係したことではなく、ただほんのわたしだけの、年寄りの女のわがままかも知れませんが）——わたしは、二人の婚礼が済んでからも、二人と一緒にではなく、今まで通り一人でいた方がよくはないかと思われるのです。わたしは、あの人は優しいよく気のつく人だから、自分の方からわたしを呼び寄せて、この先娘と別れなくてもいいように言つてくれるだろうと、わたしは十分に信じています。よし、今まで言つてくれなかつたとしても、もちろん、それは言わなくても決まつているようなものだからですが、でもわたしは断ります。それは、これまでの経験で、姑むこというものが、聲こゑにあまり喜ばれないものだということをよく知つていますし、またたとえ誰にしる、少しでも人に迷惑をかけたくなく、それに手許てもとにわずかでも自分の食べるものがあり、お前やドゥーネチカという子供のある間は、できるだけ自由の身でいたいと思うからです。ただできることなら、お前たち二人の近くに住みたいと思います。実はね、ロージャヤ、何より

も嬉しいことは、わざと手紙の終わりにとっておいたのです。さあ、いよいよ教えてあげましょう。たぶん近いうちにわたしたちは、みんな一緒に落ち合つて、かれこれ三年ぶりに、三人で抱き合えるかも知れないのです。

十一、近々、そちらへ行くということ

わたしとドワーニヤとがペテルブルグへ行くことは、もう確実[、]にきまつたことで、いつということはまだはっきりしないのだけれど、どのみちすぐはすぐなので、ことによると来週あたりかも知れないのです。何事もピョートル・ペトロヴィッチのさしず次第で、ペテルブルグでのあの人の用のかたづけ次第、こちらへ知らせてくれるはずになっております。何かの都合から、あの人は出来るだけ結婚式を急ぎたいとかで、出来ることならこの肉食期のうちにでも、万一あまり日がなくて間に合わないようだったら、聖母昇天祭後には是非ともすぐにと言っています。おお、どんなに幸福な思いをして、わたしはお前をこの胸に抱きしめるでしょう！ ドワーニヤもお前と会うことの嬉しさに、すっかりわくわくしてしまつて、一度などは冗談[、]にもただこのためだけにでも、ピョートル・ペトロヴィッチのところへ嫁[、]きますわなどと言っていました。ほんとにあの子は天使ですよ！ あの子は今は何も書き添えないけれど、それは、お前には山のように話があるので、とても筆をとる勇気もなく、また五行や六行ではなにも書くことが出来なくて、ただ自分を苛立たせるばかりだから、そう伝えてくれと頼みました。なお堅くお前を抱いて、限らない接吻を送ると書いてくれと頼みました。さてわたし達は、すぐにも会えることとは思いますが、わたしはやはり近日中に、出来るだけ沢山都合してお金を送ってあげます。今では、ドワーネチカがピョートル・ペトロヴィッチと結婚することが知れ渡つたので、わたしの信用は急に増して来ました。で、わたしの心づもりでは、商人のヴァフルシンも、今から年金の抵当で、七十五ルーブリぐらゐは融通してくれるだろうと思つています。だからお前にも、二十五ルーブリか三十ルーブリぐらゐお送りできるだろうと思つています。いま少しくらいは送れなくてもないけれど、わたし達の旅費の心配もありますからね。もつとも、ピョートル・ペトロヴィッチはああいう人ですから、首府までの旅費の費用の幾分は、つまりわたし達の行李[、]やトランクは、自分の方で引き受けて送ってくれるように言つてくれてはおりますが（誰か知つた人にも頼むらしい様子です）でもやはり、ペテルブルグへ着いてからのことも考えねばならず、たとえ初めの二、三日にしても、一文なしではどうすることも出来ませんからね。もつともドワーネチカと二人で、すっかりこまごましたことまで計算してみましたら、道中にはさほどの金のかからないことがわかりました。うちから汽車まではわずか九十露里ですが、わたし達はもう用意周到に、懇意の百姓の馬車屋に頼みました。それから先は、わたしとドワーネチカとは、のびのびと三等で揺られて行くつもりです。ですからお前にも、二十五ルーブリでなく、きつと三十ルーブリ送れるだろうと思つています。けれど、もう沢山ですね。二枚の紙をいっばい書いて、ちつとも白いところがないですから。どうも大へんな長物語になりました。まったくいろんな出来事がどっさりたまつたものだからね！ さあ、今こそわたしの大事な大事なロージャヤや、近きお目もじの日までお前を抱いて、母としてのわたしの祝福で、お前を祝福してあげますよ。ロージャヤ、妹を、ドワーニヤを可愛がつてやつておくれ、あの子がお前を

愛しているように、あの子を愛してやっておくれ。ほんとにあの子はどこまでとも知れず、自分自身よりもお前の方をよけいに愛しているんですからね。あの子は天使です。そしてお前は、ロージャヤ、お前はわたし達のすべてです。——わたし達のあらゆる希望！ あらゆる頼みです。お前さえ幸福であってくれば、わたし達も幸福です。ロージャヤ、お前は昔のように神様にお祈りをしていますか、わたし達の創造主救世主のお恵みを信じていますか！ わたしは、当節はやりの不信心が、お前までを見舞いはしまいかと、ひとり胸を痛めております。もしそうだったら、わたしはお前のために祈りましょう。どうぞ思い出しておくれ、ね、まだお前が幼い時分、お父様の生きていらした時分に、よくわたしの膝の上で、まわらぬ舌でお祈りをした時分のことを。そしてその頃のわたし達の、どんなに仕合わせだったかを！ ではさようなら、いいえ、それより近きお目もじまでと申しましょう。お前を堅くかたく抱いて、限らない接吻を送ります。

墓にはいるまで御身の母なる

プリヘーリヤ・ラスコーリニコフ

手紙のそもそもの初めから、それを読み終わるまでずっと、ラスコーリニコフの顔は、涙でぐしょぐしょになっていた。けれども、読み終わった時には、その顔は蒼ざめて、痙攣のために歪ゆがんだようになり、口あたりには、重苦しく苛いら立たしげな意地のわるい微笑がうごめいていた。彼はすり切れた、薄汚ない枕に顔を埋めて考えた。長いこと考えた。彼の心臓は激しく鼓動し、彼の考えは千々に乱れた。遂に彼には、押入りか箱同然なこの黄色い小部屋の中が、息苦しく窮屈でたまらなくなってきた。眼も心も、広々としたところを求めた。彼は帽子をひつつかむと、今度はもう階段で人に出会うことなど考えもしないで、いきなり外へ飛び出した。そんなことなどでんで念頭になかったのである。彼はV通りを横切って、さながら用でもあつて急いでいる人のように、ワシーリエフスキ島の方へと足を向けた。が、いつものくせで、道筋にはちっとも注意しないで、何やらぶつぶつつづたりたり、時には大きな声で独り言ひとことを言ったりしながら歩いて行った。それがひどく往來の人を驚かすのであつた。多くの人は彼を酔っ払いだと思つた。(全文)

十、母からの手紙(要旨)

さて、「物語」(ストーリー)は、母親からの長い「手紙」という展開になるが、まず、主人公(ラスコーリニコフ)の「家族構成」であるが、それは、父親はすでに亡くなり、あとは「母親と妹それに本人」という、いわば「三人家族」である。そして、その手紙の「内容」をごく簡単に要約すると、「……家庭教師をしていた妹は、その家の主人から言い寄られていたが、その主人は、まわりの人たちからそれを気づかれないようにと、わざと妹にはつらく当たっていたこと、また、たまたま庭先でその主人から口説かれていた妹を見た、その妻は、妹から一方的に言い寄ったと勘違いして、激しく怒り、妹を打ったり叩いたりを一時間もしたあと、妹は、百姓馬車に乗せられ、彼女の持ち物と一緒に家から追い出され、夕立ちのなか、母親の住む町へと戻って来るわけである。しかも、その妻は、その町の人たちとも大抵知り合ひだったので、町のあちこちをめぐって、妹の悪口を言いふらしていたために、町じゅうのうわさになってしまい、他人からも変な目でみられるよ

うになるが、(妹を可哀想と思つたか)、その家の主人が考え直して、妹の潔白を証明する証拠(手紙)を奥さんに見せたので、奥さんも自分の誤解を認め、今度は、奥さん自ら町の一軒一軒をめぐって、妹の誤解を解いて回つたので、逆に、妹の評判が高くなり、それを契機に、妹に金持ちの婚約者もできたので、お前にもお金を送るとのこと。また、婚約者がお前に会いに行くから、一度会ってほしい、私たちも近いうちにそちらに行く」というような内容であつた。……

これを読んだ主人公は、その手紙の内容をあれこれと「深読み」することになるが、(それが、まさに次の「母からの手紙を吟味する」の内容であるが)、その中で、「……婚約者は、弁護士で、忙しく仕事をしているが、その人間性に問題がある」と感じる。また、妹は、いわば「自分の幸せよりも、兄のため、母のため」と思つて結婚しようとしている」と感じて、この結婚は、何としても破綻させねばならないと考える。ちなみに、「……僕のお袋は、ほとんど無一文だと言つていいのだ。妹は偶然いくらか教育を受けたので、家庭教師などして方々うろつきまわる運命を持つた。で、二人の『望み』は、ただ僕一人にかかつていたのだ。僕は勉強していたのだが、どうしても大学にいられなくなつて、(それは、母親からの仕送りがなくなり)、結局退学しなくちゃならぬ羽目になつた」という、そういう「どうにもならない」状況にあつたということである。

十一、母からの手紙を吟味する

母の手紙は彼を苦しめた。しかし、一番重要な根本の点については、まだ手紙を読んでいるうちから、彼の心には一分の疑いもなく、問題の最大眼目たる中心点は、彼の脳裡でちゃんと決まっていた。断固として決まっていた。「……おれが生きているうちは、こんな結婚なんかさせるもんか、ルージン氏もへちまもあるものか」と。

「……だつて、事情は見え透いてるじゃないか」と、彼はにやにやしながら、自分の決心の成功に早くも意地わるく勝ち誇りながら呟いた。「……だめだよ。お母さん、ドゥーニヤ、お前達にこのおれが騙せるもんか！ そのくせ、おれに相談しないで、おれをのけ者にして話を決めてしまったことを謝つてるのだから。そりやそうだろうともさ。今さらもう破談には出来ないもの様に考へてるんだらうが、まあ見ていいがいい。出来るものか、出来ないものか！」——それに、何て立派な言い訳だろう。「……なにしろああいう忙しい人ですから」なんて、「……あの人は忙しい人だから、まるで郵便馬車の中か汽車の中でも(結婚)しなければ、ほかでは結婚も出来ないほどに忙しい人ですから」とか。だめだよ、ドゥーネチカ、おれは万事お見通しで、お前がおれに山ほど話があるつて言うのが何だか、おれには分かつてるんだから。お前が夜通し部屋のなかを歩きまわつて考えたことが何だか、お袋の寝室にかかつているカザンの聖母像の前で祈つたことが何だか、おれにはちゃんと分かつてるんだから。ゴルゴタ(これはイエスの処刑場所・自分を犠牲にすること)へ上がるのは辛いもんだよ。フム……それで、ではつまりきつぱり話が決まつたというわけなんだな。……ねえ、アフドーチャ・ロマーノヴナ、あの腕利きの、思慮の深い、自分の財産のある、(このもう財産を持つていふことがいかにも重みがあつて、感銘の深い所だろう)。ニカ所に勤めを持つていふ、新時代の信念をもわかつた人(これはお母さんの言い草だが)で、ドゥーニヤ自身の認めていふところでは、善良ら

いい男のところへ嫁いつしゃるといふことだ。このらしいが何より振るつてるて！　そして、あのドゥーネチカは、このらしいを見込んで行こうというのだ。見上げたことだよ。見上げたものだ。

「……だが、お袋はなんだって『新時代』のことなんか書いてよこしたんだろう？　ただ、その男の性質を示すためにしたことか、それとも何かもつと遠大な目的——ルージン氏のためにおれを籠絡ろうらく（うまく丸め込もう）としてしたことだろうか？　おお、何というずるい奴等やつらだ！　なお一つはつきりしておきたいのは——その日にしろ、その晩にしろ、その後にしる、母たち二人がどの程度まで打ち明け合っているかという一言だ。二人の間ではすべての言葉が、あからさまに話されたのだろうか、それとも二人は互いの胸の中に同じ考えのあることを察し合って、もう口に出して話し合うことは何も無い、言うだけ野暮だというほどに、わかり合っているのだろうか？　そりゃ多少はそういうこともあっただろう。手紙を見ても分かっている——お母さんには、その男は少々、いかつすぎるよう思われた。それで単純なお袋は、気のついたことをそのままドゥーニヤに話した。ところで、あいつはもちろん怒って「不機嫌な顔をして答えました」だ。当たり前じゃないか！　馬鹿正直に聞かなくても分かり過ぎるほど事情が分かり切っている上に、もう決まった話で今さらどうしようもない時に、誰が怒らないでいられるものか。それからまたお袋のおれに書いていることはどうだろう。「……ドゥーニヤを可愛がつてやっておくれ、ロージャヤ、あの子は自分自身よりお前の方をよけいに愛しているんだから」なんて、息子のために娘を犠牲にすることに同意したので、早くももう心ひそかに良心の呵責かしゃくを受けているのではないだろうか。「……お前は私たちの希望です。私達のすべてです！」なんて、ああお母さん！　……憤怒の念は彼の内部でますます激しく煮えくり返った。もし今ルージン氏に出くわしでもしたら、ひと思いに殺してしまったかも知れないと思われた。

一、母親のこと

「ふむ、それはそうだ」と、彼は旋風のように頭の中をぐるぐる回る想念を追いながら、考え続けた。……それだけは本当だ、「……人間を知るには長い目で気をつけて見なければならぬ」。しかし、ルージン氏は見え透といている。何よりも第一、「事業家で、親切な人らしい」のだ。——馬鹿にしてるよ、……荷物ものは引き受けた。大トランクも自分の手で送おってくれる！　どうしてこれが親切でないと云えましょうか？　だが、あの人たち二人は、花嫁と母親とは、百姓男を雇やとって、むしろを屋根にした馬車に乗って行くんだぜ？（おれもそいつによく乗ったものだ！）これもまだいい！　たった九十露里りだからな。だが、「……それからは、のびのびと三等で揺られて行く」、千露里もだ、なるほどいい分別だよ。何事も身分相応あてあということが肝腎かんじんだからなあ。だが、ね、ルージンさん、（金持ちの）あなたはどうしたのですかね？　だつてあれはあなたの花嫁よめじゃありませんか？　……それにまた、お袋が年金を抵当ていとうに旅費を前借りしようとしているのを、ご存知ないはずはないでしょう？　もつとも、そいつはあなたがた共同の商取引しょうりゆきで、儲けも山わけなら、費用も半々というところですかね。下世話にも、ご馳走ちそうは一緒でも、煙草たばこはめいめい持ちと言いますからね。ところが、さすがは腕利きの事業家先生だ、ここでも少々二人をごまかしているのだ——荷物は旅費よりも安くつくからな、ことによるとまるまるた、だかも知

れんからな。どうしてあれ達二人には、これくらいのが分からないんだろう。それとも、わざと気のつかないふりをしているんだろうか？ とにかく満足している、満足しきっているのだ！ しかし、これはほんの三番叟（序の口）であって、ほんとうの芝居はこれからなんだから、考えただけでもぞっとする！……

ところで、この中で何が一番肝腎なことかと言えば——奴のしみったれたことでもなければ勘定高いこともなく、ぜんたいのこの調子なんだ。まあ見ているがいい、これが結婚後ずっと続く将来の調子なんだから、前触れなんだから。それにいったいお袋は、なんだったってそんな余計な金を使うんだろう？ 何を懐にしてペテルブルグなんかへ出てくるんだろう？ ルーブリ銀貨三つか「ルーブリ札」の二枚も持ってたか？ ……フム！ それに、お袋はゆくゆくペテルブルグでどうやって暮らして行くつもりだろう？ 結婚後は、ほんの当座しばらくでさえも、ドゥーニャと一緒に暮せないのを、何かの理由からちゃんと気づいているんじゃないか？ これもきつとあの親切な先生が、うまく口をすべらして、そう思わせるようにし向けたのに違いない。お袋はひた隠しに隠して、「……わたしのほうでお断りです」なんて言っちゃあいるけれど、してみると、いったいお袋は、誰を当てるにしているのだろう——アファナーシイ・イヴァーノヴィチの借金に差し引かれた百二十ルーブリの年金をか？ 現にお袋は冬の襟巻を編んだり、袖口の刺繍をしたりして、老いの眼を悪くしている。しかし襟巻では、例の百二十ルーブリに、年に二十ルーブリを足すくらいのことだ。おれにはよく分かってるんだ。つまり、やはりルージン氏の男氣をあてにしていることになるんだ。「……自分の方からそう言って、頼んでくるに違いない」なんてね。だが、すっかり頼みますよ！ こういうことは、ああしたシラー式（人を信じて疑わない式）の美しい心を持った連中（善良な人々）にはよくある奴だからな、——最後のどんづまりまで、孔雀の羽根で相手を飾って、最後のどんづまりまでいい方にばかり眼をつけて、悪い方は見ないようにする。メダルに裏のあることは予感しながらも、事の真相を前以て自分に語るようなことはどうあってもしない——そんなことは考えただけでもぞっとするのだ。つまり、その飾り立てられた人間が、自分の方から仮面をはいで見せるまで、両手で一生懸命に、その真実を押しつけているんだ。それはそうと、ルージン氏が勲章を持っているかどうかは見物だぞ。賭けをしてもいいが、奴のボタン穴にはきつと「アンナ」があるに違いないのだ。そして奴はそれを、請負師や商人仲間の宴会につけて出るに違いない。自分の結婚式にはなおさらつけて出るに決まっている！ しかしまあ、あんな奴のことはどうでもいい！……

二、ドゥーニャのこと

「……まあ、お袋のことはそれでもいいさ。かまわないことにしよう。もともとそういう人なんだから」。しかし、ドゥーニャはどうしたもんだ？ ドゥーネチカ、可愛い妹よ、おれはお前をよく知っている！ 一番最後にお前に会った時には、お前はもう二十歳だった。そしてもうその時、お前の性格もよくわかった。お袋は書いている、「ドゥーネチカはたいがいのは忍ぶことができる」って。そんなことはおれもよく知ってるよ。二年半の前からちゃんと知っている。そしてそれから二年半の間、おれはそれについて考えたのだ。つまり、「ドゥーネチカはたいがいのは忍ぶことができる」ってことについて

だ。すでにスヴィドリガイロフ氏と、それから生じたすべての結果さえも忍び終えたのだから。實際たいがいのは忍ぶことができるに違いない。そこで今度はお母さんと一緒になって、貧乏人からもらわれて夫に恩を着せられた女房の長所云々という法則を明言した。しかもそれをほとんど初対面早々から明言したルージン氏をも、忍ぶことが出来るだろうと想像したわけだ。しかし、まあ仮に奴がなかなかしつかりした人であるくせに、「つい口をすべらした」ものとしよう、「……しかしひよっとすると、全然口をすべらしたのではなくて、むしろ前以てはつきりさせておこうという魂胆だったかも知れないのだ」。だが、それにしてもドゥーニャはどうしたというのだ。ドゥーニャは？ あれには男の人となりがはつきり分かっているんじゃないか、だって、一緒に暮らそうという男だからな。あれは黒パンに水ばかり飲んで暮しても、自分の魂を売るような女ではない。安逸のために自分の心の自由を売るような女ではない。シュレズヴィツヒ・ホルスタイン一國をくれようたつて、売るような女ではない。いわんや、ルージン氏ごときは問題ではないのだ。いや、ドゥーニャは、おれが知る限りでは、断じてそんな女ではなかった。そして、今だつて、もちろん変わっているはずはないのだ！

そりやスヴィドリガイロフ家はつらかつたろう！ また一生家庭教師をして、二百ルーブリのために方々をほつつきまわるのもつらからう。しかしおれは知っている、おれの妹は、わが身一つの利益のために、尊敬もしなければ、一緒になつたところでどうしようもないような男と縁を結んで、自分の魂や道徳的感情を、永久に卑しくするよりは、むしろ植民地の農園主のところへ奴隷になって行くか、それともバルチック州のドイツ人のところへ下女に行く方が、まだしもだと考える質の女だ！ そして、よしんばルージン氏が純金か、ダイヤモンドでできた人間だとしても、まさかルージン氏の法律上の妾（妻）になるのを、承知するはずがない。では、なぜ今度はそれを承知したのか？ 原因はいったい何か？ この謎を解く鍵はどこにあるのか？ わかり切つたことだ——自分のためには、自分一身の安逸のためには、いや、わが身を死から救うためにだつて、自分を売るようなことはしないが、人のためとなれば、これこの通り売ろうとするのだ！ 愛する人のため、敬慕する人のためには売るので！ ここに手品の種があるんだ——兄のため、母のために売ろうとするんだ！ 何もかもを売ろうとするんだ！ おお、元来われわれは、場合によつては、自分自身の道徳的感情を抑えつけてもしおうとし、自由も、安静も、良心までも、それこそありとあらゆるものを、ぼろ市へ持ち出しもしよう！ 一生だつてどうともなれ！ 自分の愛する者がそれで幸福になりさえすれば。そればかりか、自分で勝手な理屈をこしらえて、ジェスイット派そのけの研究をつむ。「……これはそうしなければならぬのだ、実際、善き目的のためには、そうしなければならぬのだ」などと、たといほんの一時だけでも、自分を慰めたり説得したりするのだ。われわれは大体こうした者なんだ、万事は火を見るごとく明らかだ。またこの事件で、ロジオン・ローマーノヴィッチ・ラスコーリニコフが関係者で、しかもその主役だということも明らかなのだ。

まあ、それもよからう、そりや彼の幸福を図ることも出来るし、大学を続けさせることも出来る、法律事務所の間にして、彼の将来を安全にすることも出来る。なお後にはたぶん、世間から尊敬される、名誉ある金満家になるかも知れないし、或いはまた荣誉ある人物になって世を終るようなことになるかも知れない。だが、お袋は？ 問題はロージヤなのだ、かけがないのロージヤ、総領息子のロージヤなのだ！ さあ、こういう総領

息子のためなら、どんなすばらしい娘だって、どうして犠牲にしないでいられようか！
ああ、二人とも何といういらしい、しかし間違つた心だ。いや、何のことはない——これではわれわれも、ソーネチカの運命を拒むことは出来ないぞ！ ああ、ソーネチカ、ソーネチカ・マルメラードフ、人の世の続く限り永遠に尽きぬソーネチカ（ソーニヤ）よ！
お前たち二人は犠牲ということ、犠牲ということの意味を十分に考えてみたのかね、どうだね？ 手に合うかね？ 利益になるかね！ 理屈に合うかね？

ねえ、ドゥーネチカ、お前は分かっているかい？ ソーネチカの運命は？ ルージン氏と結びつくお前の運命に比べて、少しも賤しいことはないのだよ。「……そうした間に愛情のあるわけがない」とお袋は書いている。愛情はともかく、尊敬すらありえないとしたら、いやそれどころか、反対に嫌悪、軽蔑、憎悪なんてものがあるとしたら、その時にはどうなるんだ？ さあ、そうなったが最後、たちまち「さっぱりとした身なりということ、気をつけなければ」ならぬことになる。そうじゃないか、え？ ところでおわかりですかね、あおわかりですかね、このさっぱりとした身なりということがいったい何を意味するのか？ おわかりですかね、このルージン夫人（ドゥーニヤ）のさっぱりとした身なりも、ソーネチカ（ソーニヤ）のさっぱりとした身なりと同じものだということが。いや、あるいはもつとわるく、もつと穢らわしく、もつと卑しいものかも知れないということが。なぜかと言えば、ねえドゥーネチカ、お前の方は何と言っても、多少樂をしようという目算も潜んでいるが、一方はそれこそもう飢え死するかどうかの問題なんだからな！

この場面は、ドゥーニヤとソーニヤの「自己犠牲」の違いについての考察であり、ドゥーニヤは、兄や母のために愛情のない金持ちのところに嫁ぐという場合であり、一方、ソーニヤの場合は、飢えた家族のために身を売る淫売婦になったという場合であり、どちらも悲惨であるが、ドゥーニヤの場合には、多少樂をしようという目算も潜んでいるので、その分だけ、もつと悪く、もつと穢らわしく、もつと卑しいものかも知れないが、一方、ソーニヤの場合には、まさに飢えて死ぬか生きるかの問題に直面してのことであり、そこには卑しさや穢らわしさというものはむしろないのだと言いたいのである。

だから、このさっぱりとした身なりという奴はなかなか高いものにつくんだよ、ドゥーネチカ、高いものに。それで、もしあとで力及ばず（結婚したことを）後悔するようになったら？ しかもお前は、マールファ・ペトロヴナとは違うから、その悲しみはどれほどだか、嘆き、呪い、苦しんで、人知れず流す涙はどれほどか知れないだろう？ そして、その時お袋はどうなるのだ？ だって、現にお袋は、今から氣をもらんで、心を痛めているじゃないか、万事がはつきりわかった時（娘の不幸を知ったその時）には、それこそどうなると思うのだ？ それからおれだ？ ……いったいお前は、おれのことをほんとうにどう考えたんだね？ ドゥーネチカ、おれはお前に犠牲になんかなって貰いたくないよ、いやですよ、お母さん！ 「……いやしくもおれが生きている間は、そんなことは断じてさせない、させるものか！ 断じてさせんぞ！」と、彼は不意にわれに返って、歩みを止めた。

三、自分は今何をすべきなのか？

さて、主人公は、「……させるものか？ じゃあそうさせないために貴様はいったいど

うするつもりだ。禁止でもしようのか？ 貴様にそれだけの権利があるのか？ それだけの権利を持つために、貴様として彼等に何を約束することが出来るのだ。大学を出て地位を得た時に、自分の一切の運命を、すべての未来を、彼等に献げるといふことなのか？ だが、そいつはよく聞くやつだし、それに、それは先の話だ。今はどうするのだ、今すぐどうにかしなければならんじゃないか。貴様だってそれはわかっているだろう？ それなのに、貴様は今何をしているか？ 彼等の脛をかじっているんじゃないか。しかも、その金は、百ルーブリの年金をかたにしたり、スヴィドリガイロフ家に奉公したり、質を置いたりしてつくったものじゃないか？ スヴィドリガイロフ家や、あのアフアナシー・イヴァーノブイチ・ヴァフルーシンなどに対して、貴様はどうして彼等を保護するつもりか、おい、こら、未来の百万長者、あの女達の運命をつかさどるゼウスの神様？ 十年もしたらどうか？ が、十年も経つうちには、お袋は内職の襟巻のために、恐らく、涙のためだけにでも、盲目になってしまっただろう。いやそれどころか、栄養不良で参ってしまうだろう。ところで妹は？ まあ考えてみるがいい、十年後には、いやこの十年の間にも、妹はどうなってしまうだろう？ わかったか？」

こうして彼は、一種の快感をすら覚えながら、これらの質問によって自分を苦しめ、自分を嘲笑し愚弄した。しかしこれらすべての問題は、新しいものでも突発的なものでもなく、むしろ古くから持病のようになっていて、昔ながらのものであった。それらが彼の心を責めさいなみ始めたのはもうずいぶん久しいことで、今ではすっかり彼の心を引き裂いてしまったのである。現在のあらゆる憂愁が彼の心に発生したのは、もう遠い遠い以前のこと、それが成長し、集積し、最近に至りますます成熟し凝結して、恐ろしい、奇怪な、幻想的な疑問の形をとって、克つべからざる勢いで解決を要求しながら、彼の理性と感情とを悩み疲らしてしまつたのである。今や母の手紙は、突如として雷のように彼を打つた、今はもはや明瞭に、問題の解きたいことばかりを考えて、受動的に悩んだり苦しんだりしている時ではない、ぜひとも今すぐ、一刻も早く、どうかしなければならぬ時である。どうでもこうでも何とか心を決しなければならぬ時である。

でなければ……「……でなければ、ぜんぜん人生を拒否するのだ！」と彼は突然、夢中になって絶叫した。「……あるがままの運命を生涯変わることなく従順に受け入れて、活動し、生き、愛するいつさいの権利を断念し、自己内部のいつさいを圧殺してしまうことだ！」「……わかりますかな、先生、これがわかりますかな、もうどこへも行く先がないという意味が？」——不意に昨日のマルメラードフの質問が思い出された。「……なにしろ人間て奴は、せめてどんなところにしろ、どこか一カ所ぐらいは、行くところがなくちゃ困りますからね……」というものであった。

彼は急にぶると震えた。あの昨日と同じ考えが、またしても彼の脳裡に閃いたのである。しかし彼がぶると震えたのは、この考えが閃いたからではなかった。だって彼は、そのの必ず（閃く）ことを承知していたのだから、予感していたのだから、その上もうそれを待ちつけてさえいたのだから。それに、その考えは全然昨日だけのものではなかったのだから。が、ただ一つ違うところは、ひと月前には、いやまだ昨日までも、ただの空想に過ぎなかったものが、今では……今では急に空想の域を離れて、何やら一種新しい、恐ろしい、彼にも全然親しみのない形をとって（それは現実味を帯びて）現われて来たことを、彼自身がそれを意識したことである。で、彼は、頭を一つがんとどやされたような気

がして、眼の中がまっ暗くなつてしまつたのである。(本文)

* *
さて、主人公(ラスコーリニコフ)は、泣きながら手紙を読み終えたあと、この狭い部屋にすることがどうにも息苦しく感じられ、帽子を手に持ち、すぐにも外へと出かけた。そして、人出の少ない並木道をあてもなく歩きながら、独り言を言いつつ「手紙の内容」をあれこれ深く吟味しては、とにかく、人間性に問題のある「弁護士」と自分や母のために結婚しようとしている「妹」との結婚は、なにがなんでも阻止しなければならぬと固く決心するのであった。それに加えて、「……今や母の手紙は、突如として雷のように彼を打つた、今はもはや明瞭に、問題の解きたいことばかりを考えて、受動的に悩んだり苦しんだりしている時ではない、せひとも今すぐ、一刻も早く、どうかしなければならぬ時である。どうでもこうでも何とか心を決しなければならぬ時である」。そこまで追い込まれた主人公の「頭の中」(或いは「心の中」)には、自ずと例の高利貸しの「老婆殺し」の考えがふと襲つて来るのである。ただ今まではつきりと違うのは、「……ひと月前には、いやまだ昨日までも、ただの空想に過ぎなかつたものが、今では……今では急に空想の域を離れて、何やら一種新しい、恐ろしい、彼にも全然親しみのない形をとつて(それは現実味を帯びて)現われて来た」ということである。

十二、彷徨さまよひ

さて、彼は急にあたりを見まわした。彼は何かを求めていたが、それは、腰かけて休みたくなつたので、ベンチをさがしていたのである。その時、彼はK並木通りを通つていたが、ベンチは百歩ばかり先の方に見えた。彼はできるだけ急いで歩いた。ところが、その途中でちよつとしたことが起こつて、それが数分後、彼の注意をすっかり惹きつけてしまつたのである。

一、酔つた女に出遇う

ベンチを見まわしているうちに、彼は、二十歩ばかり前の方を歩いて行く一人の女を認めたのだが、しかし最初は、その女にも、今まで自分の前にひらけた一切の事物に対するのと同様、何の注意も払わなかつたのである。いったい彼には、例えば、家まで歩いて帰りながら、通つて来た道筋もてんで記憶しないというようなことも一度や二度ではなかつた。もうそういう風に歩くのが癖になつていたのである。けれども、いま前を歩いて行く女には、ひと目見た瞬間から、どことなく変わったところのあるのが目について、それが次第に彼の注意を惹きつけ始めた。——それも最初は気乗りがせず、何やら忌々いまいましいような気さえたのであったが、やがてだんだんに強く惹きつけられてしまつたのである。と、彼は急に、その女の持つ変わった感じの正体を突きとめてみたくなつた。第一に彼女は、まだうら若い娘のはずなのに、この炎天に帽子をかぶらず、洋傘も持たず、手袋もはめないで、何だかおかしな恰好に両手を振りまわしながら、歩いてた。彼女は軽い絹地の服を着ていたが、これもやつぱり何だかひどく変な着方で、ボタンもかけたりかけなかつたり、おまけに後ろの腰あたり、スカートのつけ根へんが、ひどく破れていた。髪もひと房

はなれて、ぶらぶらぶら下がっていた。小さな襟巻があらわな首に巻かれていたが、それもゆがんで脇の方へずれていた。その上、娘は時々つまずいたり、八方へよろめいたりしながら、危なっかしい足どりで歩いてきた。この邂逅は、遂にラスコーリニコフの注意をことごとく呼びました。彼はベンチのすぐそばで娘に追いついたが、彼女は、ベンチまで行き着くやいなや、その片隅へ倒れかかって、ベンチのもたれへ頭を投げかけると、いかにも疲れたらしい様子で目を閉じた。その様子にじっと見入った時、彼はすぐに彼女がひどく酔っていることを察した。しかしそうした現象を見ることは、いかにも変な、奇怪なことであつた。彼は自分の見違いではないかとさえ思った。彼の前にあるのは、いかにも若々しい、可愛らしい、やつと十六、ひよつとすると十五とも思われるような、明髪の、美しい、けれども、すっかり真赤になつた、どこやら腫れぼったいところのある、小さな顔であつた。娘は、どうやらほとんど正体がない様子で、一方の足を片方の上へのせていたが、その上げ方が普通よりずっと高かつた。あらゆる点から見て、自分が往来にいることさえも意識していない様子であつた。

ラスコーリニコフは腰もおろさず、立ち去ろうともしないで、途方に暮れたように彼女の前に突つ立っていた。この並木通りはいつも人通りの少ないところであるが、今、この日盛りの二時過ぎには、ほとんど人影一つ見えなかつた。ただ、十五歩ばかり離れた並木通りのはずれに、一人の紳士が立ち止まっていたが、いかにも何か目的があるらしく、しきりにこの娘へ近づきたがつている様子であつた。たぶん彼も、遠くから彼女を見つけ、あとをつけて来たのだが、ラスコーリニコフが邪魔になるらしい様子であつた。彼は相手に気取られないように努めながら、ラスコーリニコフの方へ意地わるげな視線を投げて、この忌々しい乞食野郎が行つてしまひ、自分の番の来るのをもどかしそうに待っていた。それはもう明白であつた。その紳士は年の頃三十前後、でっぷりと脂ぶとりにふとつた、栄養のよさそうな男で、ばら色の唇に口ひげをたくわえ、恐ろしく洒落た身なりをしていた。ラスコーリニコフは、ひどく腹の中がむしゃくしゃして来た。急に、彼はどうかしてこの脂ぎつた気障野郎を思うさま侮辱してやりたくなつた。彼はちよつと娘をうっちゃつて、つかつかと紳士の方へ近づいた。「……おい、君、スヴ、イドリ、ガイロフ！ 君はここに何の用があるんだ？」と彼は拳を固めて、憤激のあまり泡立つた唇に冷笑を浮かべながら、こう怒鳴りつけた。「……いったいそれは何のことです？」と紳士は眉をしかめて、見下すような驚きかたをしながら、いかめしい調子で問い返した。「……ここを去りたまえと言うんだよ！」と言うと、「……何を生意気な、この悪党め！」と、そう言つて彼はステッキを振り上げた。ラスコーリニコフは、このでっぷりとした紳士なら、自分のような男の二人ぐらい、わけなく始末出来るというようなことさえ考えないで、拳をふり上げて飛びかかった。が、その瞬間、誰やら後ろから彼をしつかりと抱きしめた――二人の間に巡査が割つて入つたのである。

二、巡査が割つて入る

「……おいおい、往来で喧嘩なんかしちゃいけませんよ。いったいどうしたというんです！ 君はいったい何者だね？」と、彼はラスコーリニコフのぼろ服に気がつくつと、きつとその方へ顔を向けた。ラスコーリニコフは注意深く相手を見つめた。それは白い口ひげ

と頬ほひげのある物分かりのよさそうな眼をした、たくましい軍人ほづらの男であった。「……ちよūdいところへ来てくれました」と、彼は、巡査の手をむずとつかんで叫んだ。「……僕はもとの大学生でラスコーリニコフという者です。それは君にもわかるはずだ」と、彼は紳士の方へ顔を向けた。「……君も一緒に行くこうじやないか、あなたに見せたいものがあるんです……」と、こう言つて巡査の手をつかんで、ベンチの方へ連れて行つた。「……ほらごらんさい、すっかり酔つ払つています。つい今しがたこの並木通りを歩いて来たんです——どうした女だかは分かりませんが、商売人でもなさそうです。一番たしかな推測は、どこかで飲ませられて、だまされたものでしょう、今度はじめて、そうでしょう？　そして、そのまま往来へ放り出されたんです。ごらんさい、この服の破れ具合を、ごらんさい、この服の着ぎまを——これは誰かが着せたので、この娘が自分で着たんじやありませんよ。しかも不器用な手で、男の手で着せたんですよ。もうそれに決まっていますよ。」

ところで、今度はこちらをご覧なさい——この、僕が今喧嘩をしようとした気障きざ男は、僕の知らない、初めて見る男ですが、この男も今ちよūd、——どうでも娘に近づいて、うまく手に入れて、どこかへ引っぱつて行くこうとして行っているのです……いやもうたしかにそれに違いないです。大丈夫、僕の言うことは間違つちやいけません。僕がこの眼で見たんだから、こいつがこの娘に眼をつけて、あとをつけて来るところは。ただ僕が邪魔をしてやつたので、奴は今僕のいなくなるのを待つてたんですよ。ふん、いま少しばかり向こうへ行つて、煙草を巻くようなふりをして立つてやがる……いったいどうしたらこの女を、奴の手へ渡さないように出来るでしょうね？　どうしたらこの娘を、家まで送り届けてやれるでしょうね——ひとつ何と考えてくれませんか！」と言うのであつた。

巡査はすぐ一切の事情をのみ込んで、頭をひねつた。ふとつちよの紳士のほうはむろん明白めいだったから、残るは娘の処置だけである。巡査はもつと近くでよく見るために、彼女の上へかがみ込んだが、その顔には、心からの同情が現われていた。

「……ああ、実に可哀想だ！」と、彼は頭を振りながら言つた。「……まだまるでねえだ。だまされたのだ。それに違いない。あ、これこれ、娘さん」と、彼は彼女を呼び始めた。「……あんたのおうちはどこですかね？」と聞くと、娘は疲れてどんよりした眼を見開き、尋ねた人の顔をぼんやり眺めて、面倒くさそうに片手を振つた。「あの……」と、ラスコーリニコフは言つた。「……ほら（と彼はポケットをさぐつて、二十カペイカつかみ出した。そこにあつただけを）。これで辻馬車つじばをやとつて、それでうちまで送らせてください。しかし、ところが分からなくちゃね！」と言つたので、「……お嬢さん、お嬢さん！」と巡査は金を受け取つて、また呼び始めた。「……今すぐ辻馬車つじばをやとつて上げますよ、そしてわたしが自分で送つてあげます。どちらまで行けばいいんですか？　えっ、お住まいはどちらなんですか？」と聞くと、「……あつちけ！　うるさいよう……」と娘はつぶやき、またしても片手を振つた。

「……やれ、やれ、これは何と言うことだ！　お嬢さんともある人が、恥ずかしいじゃありませんか、何という恥ずかしいことです！」と彼は、恥じたり、同情したり、憤慨ふんがいしたりしながら、ふたたび頭を振り出した。「……どうも困りましたなあ！」と彼は、ラスコーリニコフの方を向いたが、またしてもちらりと、彼を足の先から頭のとつぺんまで眺めまわした。彼には、この男もまた変に思われたのであろう——こんなぼろを着ているく

せに、自分から金を出したりしたので、「……あなたはこの辺でこの娘さんを見つけられたのですか？」と、巡査はラスコーリニコフに聞いた。「……お話ししましょう——この娘はね、この並木通りで、僕の前の方をよろよろしながら歩いてたんですよ。そして、ベンチへ着くなり、そのまま倒れてしまったんです」「……やれやれ、当節の世の中は、何という浅間しいことが増えたんでしょう！　なんとという馬鹿な酔っ払い女だ！　だまされたのだ、それに違いない！　まあこの服の裂けようはどうだ……ああ、何というみだらな世の中になったものだ！　これはてっきり落ちぶれた貴族の娘さんですぜ、近頃はこんなのが大へん増えましたからな。見たところはしとやかな、まるでいいとこのお嬢さんのようだのになあ」と。彼は再び女の上へかみ込んだ。

彼自身にも、或いはこんな年頃の娘があるのかも知れない。「……まるでいいとこのお嬢さんのようなきやしゃな育ちらしい」、上流の見よう見まねで流行を追いまわすことの好きな娘が……。「……とにかく肝腎なことは」と、ラスコーリニコフはやきもきして、「……どうでもして、あの悪漢の手に渡さないことです！　奴はまだまだこの娘を辱めようとしている！　奴が何をしようとしているか、もうちゃんとわかっている。見たまえ悪漢め、行こうともしないから！」と、ラスコーリニコフは声高にこう言って、片手でまっすぐ彼の方をさした。相手はそれを聞くと、またもやかっとなりかけたが、思い直して、ただ軽蔑するような眼を投げただけで我慢した。そしてそのそと十歩ばかり遠のいて、再びそこに立ち止まった。「……あの男に渡さないくらいのことは何でもない」と、下土あがりの巡査は思案顔で答えた。「……だが、どこへ連れて行けばいいか、それを言ってくれないんだが、でない……お嬢さん、これ、お嬢さん！」と、彼はまたかみ込んだ。

娘はふいに大きく眼を開いて、注意深くじつと見ていたが、どうやら様子かみ込められたらしく、やがてベンチから立ちあがると、もと来た方へ歩き出した。——「……ちえっ、恥知らず、うるさいってばよう！」と、こう彼女は、もう一度手を振って呟いた。そして足早にすたすたと、だがやはり前のようにひどくよろめきながら歩いて行った。気障男は並木通りの向こう側を通過して、彼女から眼を離さないで、彼女のあとを追って行った。「……安心してらっしゃい、渡しゃしませんよ」と、ひげ男は断固たる口調で言って、彼らのあとに続いた。「……ああ、何というみだらな世の中になったものだ！」と彼は溜息まじりに、声を出してこう繰り返すのであった。

三、ふとあることに気づく……

この瞬間、ラスコーリニコフは、何かにちくりと刺されたような気がした。一瞬の間に、彼はがらりと人が変わったように見えた。「……まあ待ちたまえ、おーい！」と彼は、あとからひげ男を呼びかけた。相手は振り返って、「……よしたまえ、よしたまえ！　君に何の関係がある？　ほっとき給え！　あいつに楽しませてやるさ。(彼は気障男を指した)。君に何の関係があるんだ？」と、巡査はわけが分からないので、眼をいっばいに見張りながら彼を見つめた。ラスコーリニコフは笑い出した。「……ちえっ、なんのこった」と巡査は片手をぐんと振ってこう言うのと、紳士男と娘のあとを追って駆け出した。多分ラスコーリニコフを狂人か、もつと大へんなものとも思ったのであろう。

「……おれの二十カペイカを持って行っちまやがった」とラスコーリニコフは、一人取

り残されて腹立たしげに呟いた。「……フム、あいつからも取るがいいんだ、そしてあいつに娘を渡してやる、それでおしまいだ。それをなんだっておれは余計な口出しなどしたのだろう？ おれが人を助ける柄かい？ おれにそんなことをする権利があるかい？ 奴等はお互いに生きながら食い合いをするがいいんだ。——それがおれにとつて何だというのだ？ よくもおれは、あの二十カペイカを平気でやってしまえたものだ。あれがいったいおれの金だろうか？」（いやあれはもとは母親の金ではないか？……）

こうした奇つ怪な言葉を吐き散らしながらも、気持ちは重くなる一方であった。彼は残されたベンチに腰をおろした。彼の考えは支離滅裂になっていた。それに、総じてこの時には、何事であれ、考えるということが苦痛だった。彼は何とかしてすっかりわれを忘れたと思った、そしてすべてを忘れて、それから眼ざめて、全然新しく出直せたらと思った。「……かわいそうな娘だ？」とがらんとしたベンチの片隅をながめながら、彼は言った。「……正気に戻る、少し泣く。母親が知る……初め手で打つただけだが、あとには鞭で打つて、痛い恥ずかしい思いをさせた上、恐らく、うちを追い出されてしまうだろう……よしんば追い出されないうちで、どうせすぐダーリヤ・フランチョーヴナといった連中に嗅ぎ出されて、あちこち出沒するようになる。そうなるともうすぐ病院だ。（そしてこういうのは得てして、母親のそばではしごく堅気に育てられて、こつそりいたずらをしたという連中に多いのだ）。そして、その次は……次もまた病院だ、酒だ、酒場だ、そしてまた病院だ。こうして二、三年もたちや——もう廃人だ。それでやつとまだ十九か、わるくすれば十八で、その一生はおしまいなのだ……おれなんかもほんとにそんなのを見なかっただろうか？ ああいう娘達はどうしてそうなったのだろう？ みんなこんなふうにしてなったのだろう……ちよつ！ 勝手にしやがれ！ 世間の奴等に言わせると、これもやむを得ないんだそうだからな。年々それくらいの割合は、こういうのが出なければならぬんだそうだ。何のために？ たぶん悪魔にでも（社会の犠牲者として）喰われるためなんだろう、つまりほかの者を純潔に保って、その邪魔をしないためにだ。割合いだって！ いやなかなかうまいことを言ったものだ——それは実に気休めになる言葉だ。科学的だ。つまり——割合い（やむを得ない数）ということにしておけば、ちつとも騒ぐことはないのだ。これがもしほかの言葉だったら、それこそ……こう平気ではいられなかったに違いない。しかしなんだ、もしドゥーネチカがどうかしてこの割合いの中へ落ち込んだらどうだろう！ この割合いでなくてもほかの割合いに！」と思うのであった。（この最後の部分は、妹のドゥーニヤも同じような運命に墮ち入らないかと心配しているのである。）（本文）

十二、手紙を読んだ後のここまでの要旨

さて、主人公（ラスコーリニコフ）は、泣きながら手紙を読み終えたあと、この狭い部屋にすることがどうにも息苦しく感じられ、帽子を手に持ち、すぐにも外へと出かけた。そして、人出の少ない並木通りをあてもなく歩きながら、独り言を言いつつ「手紙の内容」をあれこれ深く吟味しては、とにかく、人間性に問題のある「弁護士」と自分や母のために結婚しようとしている「妹」との結婚は、なにがなんでも阻止しなければならぬと固く決心するのであった。やがて、疲れを感じて、ベンチで休もうと探していると、一

人の酔った若い女性が肌着を乱してふらふらしながら歩いているのが目に止まる。恐らく、どこかで飲まされ、だまされ、そして、当時、若い女性が性的被害などを受けるようなことは頻繁に起こっていたのだろうが、しかも、その後をつけるような紳士まで一人いたのである。やがて、酔った若い女性は、ベンチまで来て、そのベンチに倒れてしまう。

主人公（ラスコーリニコフ）は、途方にくれたように彼女の前に突っ立っていたが、やがて、十五歩ばかり離れた並木通りの所で、「酔った彼女」を狙っているに違いないと思つた紳士の方へと近づき、「……君はここに何の用があるのだ？」（さつさと）ここを去りたまえ！」と言うと、「なんだと生意気な、悪党め！」と、お互い殴り合いの喧嘩をしかかるところに、たまたま「巡查」が通りかかり、その「仲裁」に入る。そこで、主人公（ラスコーリニコフ）は、その「巡查」に、ポケットにあつた二十カペイカを渡して、「……これで辻馬車をやとつて、彼女をうちまで送らせてください」と頼むと、巡查は、「……いますぐ辻馬車をやとつて上げますよ。そして、わたしが自分で送って上げます」と言い、彼女に「……お住まいはどこか？」と聞かすが、彼女は、「……あつちけ！ うるさいよ」と呟いて、手を振つて答えようとしめない。巡查と主人公は、困つたものだと思案に暮れるが、再び、巡查が、「……お嬢さん、お嬢さん」と呼びかけると、彼女は、今度はどうやら様子が見込めたらしく、やがてベンチを立ちあがり、早足ですたすたと、だがやはりひどくよろめきながら、もと来た方へと歩いていく。そのあとを紳士が追つて行く。巡查は、「……安心してらっしゃい。渡しやしませんよ」と言い、そして、「……ああ、何とどうみだらな世の中になつたものだ！」と、声を出して、こう繰り返しながら、やはり彼らのあとを追うのであつた。

そして、「……この瞬間、ラスコーリニコフは、何かにくくりと刺されたような気がした。一瞬の間に、彼はがらりと人が変わったように見えた」とある。これは、一体、どういうことなのか？ それは、次のようなことである。つまり、巡查の、「……ああ、何とどうみだらな世の中になつたものだ！」という言葉を聞いているうちに、主人公（ラスコーリニコフ）は、はっと「気づく」のであつた。それは、警察の制服をちゃんと着ていたので、その「巡查」という人物を、主人公（ラスコーリニコフ）は、全く疑うこともなく、頭からすっかり信じきってしまったが、しかし、この「巡查」は、一体、なぜここにいたのだろうか？ つまり、たまたま偶然に通るかかっただけなのか？ それとも、この「巡查」も、もう一人の紳士と全く同じように、酒に酔つたこの「若い女性」に目をつけて、あとをずっと追つて来たのではないのか？ そう思つた瞬間、主人公（ラスコーリニコフ）は、「……ああ、自分は、何というお人よしなのだ。お金まで渡して」と、笑い出してしまふ。そして、あの「巡查」は、やがて彼らに追いついて、もう一人の紳士からも「お金をもらい、その酔つた「若い女性」を紳士が手ごめにするのを黙つて見て見ぬふりをするのか？ それとも、警察という「権力」をかさに着て、相手の紳士を追い払い、そして、自らがその酔つた「若い女性」を手ごめにしようとするのか？ どっちにしろ、勝手にしやがれ、おれが人を助ける柄かい？ これが現実だ！ と思うのであつた。

つまり、若い娘たちの「何割」かは、金か酒か仕事か恋愛か何かに誘われ、だまされ、そして、手ごめにされて墜ちて行く。それが現実だ。それが割合いだ。そして、そのうちの「何割」かが、また、酒、薬物、酒場（風俗）、そして、病院へと墜ちていく。それは、いつの時代でも、また、どこの国でも、それほど変わりようのない現実なのだ。そして、

この作品の「時代背景」の頃のロシアというのも、「……酒だ、酒場だ、そしてまた病院だ。こうして二、三年もたちや——もう廃人だ。それでやっとまだ十九か、わるくすれば十八で、その一生はおしまいなのだ」とある。そして、淫売婦であった女主人公の「ソーニャ」も、そのままずっと続けていたならば、同じような「運命」を辿ったのである。

十三、親友ラズーミヒン

だが、「……おれはいつたいどこへ行くつもりなんだ？」と、彼は急に考えた。「……おかしいぞ。それは何やら当てがあつて出てきたはずだぞ。手紙を読んでしまふと、すぐ出掛けたんだ、あ、そうだ、ワシーリエフスキ島の、ラズーミヒンのところへ出掛けたんだ。そうだ！　今こそ思い出した。だが、待てよ、何だつてあの男のところへ！　どうして今頃おれの頭へ、ラズーミヒンのところへ行こうなんて考えが舞い込んだんだろ？　こいつは不思議だ」（これは友達から「お金か仕事を」という思いからであろう。）

彼は自分でも不思議でならなかった。ラズーミヒンは大学での友達の一人だった。妙なことにラスコーリニコフは、大学にいた時も、友達というものをほとんど持たず、すべての人を避けるようにして、人をたずねもしなければ、人にたずねられることも喜ばなかった。もつとも、ほかの連中も、じき彼から遠ざかつてしまった。一般的の会合にも、談話にも、娯楽にも、彼は一切仲間入りをしなかった。彼は骨身を惜まず、必死になつて勉強した。そのために人は彼を尊敬したが、愛する者は一人もなかった。彼は非常に貧乏だったが、そのくせ何となく尊大で傲慢で、まるで何か秘密でも抱いているように、人とうち解けなかった。で、一部の友人たちからは、彼は一人お高くとまつてみんなを子供のように見下して、教養でも、知識でも、見解でも、まるで彼等よりすべてで抜きん出ている、彼等すべての見解や興味をば、何か一段低いものとして見てるように思われていた。

一方、ラズーミヒンとは、どうしてか不思議にうまが合った。いや、うまが合ったというよりも、ほかの誰とよりも遠慮がなく、うち解け合ったという方がいい。最も、ラズーミヒンとは、それ以外の関係を持つことは不可能であった。それは並はずれて快活な、気さくな、単純なまでに善良な、青年だった。とは言え、この単純の下には、深さと威厳とが隠されていた。彼の友人の中でも親しい連中はみなこの点を理解して、彼を愛していた。彼は、実際ときどき愚直らしく見えることもあったが、なかなかどうして馬鹿ではなかった。彼の風采もちよつと異彩あるものだった——痩せて、背が高く、髪が真黒で、いつも無性ひげをはやしていた。彼はときどき乱暴をやつた、そして力持ちとして知られていた。一度など彼は、ある夜の会合の席上で、六尺豊かな大男の監視人を一撃のもとに打ち倒したことがある。酒も度なしに飲めたが、また全然飲まないこともできた。時には、眼に余るようないたずらをしたが、また全然いたずらなどしないこともできた。ラズーミヒンはなお、どんな失敗をしても平気であることと、どんなに困つても決してへこたれないことで有名であった。彼は屋上に下宿することもできれば、地獄のような飢餓や、並みはずれた寒さを忍ぶこともできた。彼は非常に貧乏であった。そしてまったくの独力で、何かしら仕事をして金を得ながら、自分の生活を支えていた。彼は、働きさえすればいくらでも汲み出すことのできる泉を無数に知っていた。嘗て彼は、冬じゅう室を温めないで過ごして、寒いほうがよく睡れるから、この方がかえって気持ちがいいなどどうそぶ

いていたこともあった。現在では、彼もまた大学を去るべく余儀なくされていたが、それも長いことではなく、今彼は全力をあげて、再び学業を続けるべく、生活状態の改善を急いでいた。ラスコーリニコフは、もう四カ月も彼のところへ行かなかつたが、ラズーミヒンは彼の住居さえ知らなかった。ふた月ばかり前のこと、彼等は一度ふと町で出会わしうになったことがあったが、ラスコーリニコフは顔をそむけて、その上、彼に見つからないように向こう側へ移ってしまった。ラズーミヒンの方でも気がついたけれども、友達のことを乱すまいと思つて、これもそしらぬ顔で通り過ぎてしまったのである。(この場面は、主人公《ラスコーリニコフ》とともに、親友ラズーミヒンの実に詳細な人物像が具体的に紹介されていて、作者は彼をほとんどべたほめである。)

*

*

さて、「……：そうそう、おれはついこの間も、ラズーミヒンのところへ仕事を頼みに行こうとしたつて、家庭教師の口か何か、見つけて貰いたいと思つて……」と、ラスコーリニコフは考えた。「……だが、あいつも今じやどうしておれが助けられよう？　かりに教師の口が見つかつて、彼の手もとに一カペイカでもあれば、その最後のカペイカまでわけてくれるとして、それで教えに行く靴も買えるし、服も直せるとしたところで……：フム……：ところで、その先はどうなんだ？　五カペイカ銅貨一つで、いったい何ができるといふのだ？　今のおれに果たしてそんなもの(そんなはした金)が必要だろうか？　いやまったくおかしいよ、おれがラズーミヒンのところへ出掛けて来たなんて……」(それは、今は何よりもまとまった金が欲しいのであり、はした金などではないのである。)

今ごろなぜラズーミヒンへ行くのかという問題は、彼自身の感じた以上に、強く彼の心をかき乱した。彼は、不安の念にかられながら、このきわめて普通な行爲と思われるものの中に、自分にとって一種不吉な意味をさがし求めた。「……：何だ、するとおれは、ラズーミヒン一人の力で万事を回復しようとしたのか、一切の解決を、あのラズーミヒンに求めていたのか？」と、彼は驚いて自分にたずねた。

彼は考え込んで額をこすつた。すると不思議にも、非常に長い沈想の後に、ふいにほとんど自分自身にも思いがけなく、一つの奇怪きわまる想念が頭に浮かんで来た。「フム……：ラズーミヒンのところへ……」と彼はふいに、すっかり落ちついて、最後の断案を下したのである。おれはラズーミヒンのところへ行く、それはむろんだ……：だが……：今ではない……：奴のところへは……：あれがすんだ翌日行くんだ、あれが片づいてしまつてから、万事が新しく動き出してから……」と、とたんに、彼ははつとわれに返つた。「……：あれがすんでから」と彼は、ベンチからはね上がりながら叫んだ。「……：じゃあ、本当にあれをやるのだろうか？　実際(自分に)あれが出来ることだろうか？」と。

彼はベンチを捨てて、歩き出した。いや、ほとんど駈け出した。彼はもと来た方へ、家の方へ引つ返そうとしかけたが、家へ帰るのが急にたまらなく厭わしい気がしてきた。そこには、あの隅っここの恐ろしい押入れのような中に、すでに一カ月前から、絶えずあれが成熟しているのだ。そこで、彼は足の向くままに歩いて行つた。

彼の神経性の戦きは、一種熱病的なものに変わった。彼は悪寒すら感じた。この暑さのなかで、ぞくぞくと寒さを感じ出した。彼は一種の内的要求にかられて、ほとんど無意識のうちに何となく努めて、行き会ふものすべてを注視し始めた。まるで何か気のまぎれるものを無理にさがしてでもいるように。けれど、この試みはうまく成功しなくて、彼

は刻々に深い物想いの中へ沈んでいった。そして再び、ぎくりとしながら頭を上げてあたりを見まわした時に、今自分は何を考えていたのか、どこを通っていたのかさえも、はたと忘れてしまっていた。こんな有様で、彼はワシリーエフスキ島をずっと通り過ぎ、小ネヴァの河畔へ出ると、橋を渡つて群島の方へ歩みを向けた。木々の緑と爽やかな空気は、初めちよつと、街の埃や、石灰や、狭苦しくのしかかるような大きな家並みばかりを見慣れた彼の疲れた眼に、快く感じられた。そこにはむしろ暑さも、悪臭も、酒場もなかった。しかし、これらの清新な快い感じも、じき病的な、苛立たしい気分に変わってしまった。ときどき彼は、緑葉の奥にすけて見える美しく塗られた別荘の前に立ちどまって、垣の中をのぞき込み、遠くのバルコンやテラスの上にいる美しく着飾った女達や、庭の中を駆けまわっている子供たちの姿を眺めた。とりわけ、彼は花に心を惹かれて、何よりも長くそれを見ていた。彼はまた立派な馬車や、騎馬の紳士や貴婦人たちと出会った。そしてもの珍しように彼等を見送つたが、彼等がまだ視界から消えてしまわないうちに、もう彼等を忘れてしまった。一度彼は立ち止まって、自分の有り金を数えてみた。三十カペイカばかりあった。(巡查の奴に二十カペイカ、ナスターシャに切手代三カペイカ——してみると、昨日マルメラードフのところへは、四十七カペイカか五十カペイカ置いてきたわけだな)と、彼は何のためにもなく勘定しながら考えたが、しかしそれもさつそく、何のためにポケットから銭を出したかすら忘れてしまった。が、彼はそれを、とある安料理屋ふうの飲食店のそばを通りかかった時に思い出した。そして自分は何か食べたいということを感じた。料理店へ入るとすぐ、彼はウォーツカを一杯ひっかけて、何かをつめたピローグを一つ食つた。そしてその残りは、再び往来へ出てから食い終わった。もうずいぶん久しいことウォーツカを口にしなかつたので、たった一杯だったけれども、見る見る利き目が現われてきた。急に足が重くなつて、ひどく睡気を催してきた。彼はうちの方へ足を向けたが、ペトロフスキ島までくると、すっかりへとへとになつて足を止め、往来から下りて草の中へ這入り、草の上へ倒れると、そのままぐっすり寝込んでしまった。

頭が病的な状態にある時に見る夢は、しばしば特色として不思議な立体性と、鮮明さと、現実に対する異常な類似とを持つものである。どうかすると、奇怪な場面の現われることもあるが、その場合にも、場面の配置や通過全体は、いかにも微妙な、突飛な、それでいて場面の内容を充実させる上でいかにもよく芸術的に調和した詳細を持つもので、この点ばかりは、当の夢見る人が、かりにプーシキンとかツルゲーネフとかいうような芸術家であつたとしても、現実ではどうも考えつくことも出来なかつただろうと思われるくらいである。そしてこうした夢、病的な夢は、必ず長いこと記憶に残つて、調子が乱れて興奮しきっている人間の組織に、強烈な印象を与えるものである。

十四、悪夢

さて、恐ろしい夢が、ラスコーリニコフを訪ずれた。それは、彼がまだ田舎の町にいた頃の、子供時分の夢であつた。彼はまだ七つばかりで、祭りの日の夕方近く、父に連れられて郊外を散歩していた。鬱陶しい季節の、むしろ暑い日、場所は彼の記憶に残っているのと寸分ちがわぬところであつた。いや、その記憶の方が、今夢に現われたより、むしろ遙かにぼんやりしているくらいであつた。地方の小市街は、周囲に一本の柳もないむき出し

の姿で、あけっ放しに遠く見通せるものであった。どこかずつと遠い空のはずれに、小さい森が黒く見える。街の一番はずれの野菜畑から五、六歩のところ、一軒の酒場が——彼が父と散歩してそのそばを通るたびにいつも、不快まわる印象や、恐怖さえも与える大きな酒場があった。そこにはいつもいろんな連中が集まって、喚いたり、笑ったり、罵り合ったり、しゃがれ声をふり絞って無茶苦茶な唄を歌ったり、またよく喧嘩をしたりしていた。酒場の周囲には、たとずそういう酔っ払った、恐ろしい人相をした男どもがうろついていたのである。彼等に出くわすと、彼はすっかり父にしがみついて、全身わなわなと震え上がるのであった。

酒場のそばを通っている道、田舎道は年じゅうほこり立っていて、そのほこりがまた年じゅう実に真黒である。道はうねりながら先へのびて、三百歩ばかり行ったところで、町の墓地に着いて右へ曲がっている。墓地の中央には緑色の円屋根を頂いた石造の教会が立っていて、そこへは彼は年に二度ぐらいずつ、一度も見たことのない、ずっと昔に死んだ祖母の法要の営まれるたびに、父母に連れられてミサに行った。その時にはいつも、白い皿に聖飯を盛って、ナプキンに包んで持って行った。その聖飯は、米との中へ十字架形につぶし込んだ葡萄とでこしらえた甘いものであった。彼はこの教会と、そこにあるおおかたは縁飾もついでない古い聖像と、いつも頭をふるわしている老司祭とが好きであった。平たい墓石の据わっている祖母の墓のそばに、生後六カ月で死んだ彼の弟の小さい墓があった。その弟をも、彼はてんで知らなかったもので、思い出すことも出来なかった。けれども、弟のあったことは聞かされていたので、彼は墓地に訪うたびに、この墓に対して、宗教的にうやうやしく十字を切り、頭をさげて、それを接吻したものであった。

一、悪夢の内容

さて、そこで彼の「悪夢」であるが、彼は父と一緒にこの道を墓地のほうへ歩いて行きながら、酒場のそばを通りかかった。彼は父の手をしっかりとつかんで、恐る恐るその方を見やった。すると、いつもと違った光景が彼の注意を惹きつけた。——おりからそこには、祭りでもあるらしく、着飾った町のかみさん達や、百姓女や、その亭主たちや、いろんな下層民の群が集まっていた。一人残らず酔っ払って、唄を歌っていた。酒場の入口の階段のそばには、一台の荷馬車が立っていたが、それは妙な荷馬車であった。それは、大きな運送馬を付けて貨物や酒樽をはこぶ大型の荷馬車の一つであった。彼はふだんから、こうした大きな、長い鬚と太い脚とを持った運送馬が、車を曳かないよりは曳いているほうがかえって楽だともいうように、些かの疲労も見せないで、山のような荷物を何の苦もなく、正しい足どりで曳いて行くのを見るのが好きであった。ところが、今は、不思議にも、そんな大きな荷馬車に、ちっぽけな、痩せぼちの茸毛の百姓馬がつけてあるのだ。それは——彼はそれをよく見かけた——時には薪や乾草などを山のように積んだ車を曳いて、特に車が泥沼や轍のあとへはまりでもしようものなら、たちまちへたばって、そのたびに百姓から、思うさまこっぴどく、時には鼻面や眼までも鞭打たれる痩せ馬の一つであり、彼はいつもそれを見るたびにかわいそうでかわいそうでたまらなくなり、今にも泣き出しそうになるので、いつも母親は窓のそばから引き離すのであった。ところが、その時、急にあたりがひどく騒々しくなると、酒場の中から、喚いたり、歌ったり、バラライ

カを鳴らしたりしながら、赤や青のシャツの上から百姓外套をひっかけて、ぐでんぐでんに酔っ払った大きな百姓どもが出て来た。「……乗らっせえ、みんな乗らっせえ！」と、まだ若い、首の太く遅い、人參のように赤い、肉づきのいい顔をしたその中の一人が叫んだ。だが、その「……みんな乗っけてかあ、乗らっせい！」が、たちまち笑い声と叫び声とを呼び起こした。

それは、「……あんげな痩せ馬が引っぱるだつてよ！」「……やい、ミコールカ、汝あ、正気けえ、やあ——そげえにちっぽけな牝馬を、こんげなでけい車におつつけるなんて！」「……みんな見ろやい、葦毛の奴あ、もうきつと二十からになつてゐるぞ！」と言うと、「……さあ、乗らっせえ、みんな乗っけてかあ！」とミコールカは真先に馬車へ飛び乗りながら、またもやこう叫ぶと、手綱を取って、背いっばいに馭者台の上へすくと立った。「……栗毛の奴あ、さつきマトヴェイと出かけただ」と、彼は馬車の上から叫んだ。「……ところがこの牝馬めときたら、ひとに業を煮やさせるきりだあ——ぶち殺したつてかまわねえだよ。こんな穀つぶしやあ。さあ、乗らっせえと言うだに！ うんと飛ばしてくれべえ！ 飛ばして見せるだよ！」と、こう言いながら彼は鞭を手に取って、面白半分に葦毛馬を鞭打つ身がまえをした。そして、「……さあ、乗らっせえ、どうしただよ！」と言うと、群衆はどつと笑った。「……聞いたかい？ 飛ばして見せるだよ！」、「……あの馬あもう十年も飛んだこたねえだよ」、「……だから、これから飛ばして見せるだよ！」、「……かまうことはねえだ、さあみんなあ、みんな鞭を持って、支度しなせえ！」と言うと、「……ちげえねえ！ 馬の奴さひっぱだけ！」と騒ぐのであった。

みんな大声に笑ったり、洒落を言ったりしながら、ミコールカの馬車へと乗った。六人ばかり乗り込んでも、まだすわる余地があったので、一行はふとつた赤ら顔の女を一人連れ込んだ。彼女は真紅な木綿の服を着て、南京玉で飾り立てた冠のように高い帽子をかぶり、足には百姓靴をはいて、胡桃を噛み割りながら笑っていた。まわりの群衆も同じように笑っていた。実際、このみじめな牝馬が、これだけの重荷を引いて走ろうというのでも、どうして笑わずにいられよう！ 馬車の中では二人の若者が、ミコールカに手を貸そうと、てんでに鞭を取り上げた。——「そうれ」という声を合図に、痩せ馬は必死になつて曳き出したが、飛ぶどころか、歩くさえやつとなくらいで、ただ足をばたばたやるばかり、豆粒のように背の上へまき散らされる三つの鞭に、うめきながら膝をつきそうになる。馬車の中と群衆の中の笑い声は、前にも倍して高くなった。ミコールカはますますいきり立って、実際この馬が駆け出すものと思っているかのように、躍起となって鞭をふるった。「……おいみんな、おらも乗せろや」と、誘い込まれた一人の若者が、群衆の中から叫んだ。「……乗らっせえ！ みんな乗らっせえ！」とミコールカは叫んだ。「……みんな乗っけてかあ、うんとぶつてやるべえ！」とこう言いながら、びしびしと打ち続けるうちに、しまいには夢中になつて前後を忘れて、この上などで打ってやったらいいか、分からないような様子であった。

すると、「……お父さん、お父さん！」と、ラスコーリニコフは父に叫んだ。「……お父さん、あの人たちは何をしてるの！ お父さん、かわいそうな馬をぶつてるよ！」「……行こう、行こう！」と、父は言った。「……酔っ払いの馬鹿者どもが、いたずらをしてるんだよ。さあ行こう、もう見ないでおいで！」こう言つて、父は彼を連れ去ろうとしたが、彼は、父の手からすりぬけて、われを忘れて馬の方へ走り寄った。しかし哀れな馬は

もうすっかり弱り果てていた。馬はあえいでは立ち止まり、また曳き出しては、あやうく倒れそうになった。「……ごねるまでぶたっせえ！」と、ミコールカは叫んだ。「……こうなりやしかたがねえだ、ごねる(死ぬ)までぶつてやるべえ！」と騒ぐのであった。

一方、「……やい、悪魔め、われやいつたい十字架を持つてねえだが！」と、一人の老人が群衆の中から叫んだ。「……こんげな馬に、そんな重荷曳かせるつてことがあるかや」と、他の一人が言い足した。「……手前てめいよいよぶち殺す気だな！」と、三人目が叫んだ。「……やかましいやい！ おれのものでえ！ してえようにするんだわ。さあもつと乗らっせえ！ みんな乗らっせえ、おらどうでも駈け出さしてみせるだよ！」、ふいにどつという笑い声が起こつて、すべてを覆い尽くした——牝馬は激しい続け打ちに耐え切れなくなり、力なげに後ろ足で蹴り始めたのだ。老人までがたまりかねてにたりと笑った。実際、このみじめな牝馬は、まだ生意気に蹴ろうとしているのだった！

群衆の中からまた二人の若者が、両側から馬を打とうとして、鞭むちを手にして駈け寄つた。二人はそれぞれ左右から走り寄つたのである。「……鼻はなつ面を、眼をひっぱたけ、眼を！」と、ミコールカは叫んだ。「……おいみんな、一つうたえや！」と、ミコールカは叫んだ。すると、乗つていた連中がみな声を揃そろえてうたい出した。卑猥な歌がおこり、羯鼓かつかが鳴り、伴奏には口笛が吹かれた。例の女はなお胡桃くるみを噛み割りながら、笑つていた。

*

*

彼(ラスコリニコフ)は馬のそばへ走つて行つた。彼は前の方へ駈け抜けて、馬が眼を、眼の真上を打たれるのを見た！ 彼は泣いた。心臓の鼓動は高まつて、涙が流れた。一人の振つた鞭むちが彼の顔をかすめたが、彼はまるで感じないで、彼は手を揉みだいて叫びながら、先刻からしきりに頭を振つてこうした仕打ちを非難していた一人の髭ひげの白い老人にすがりついた。一人の女房が彼の手をつかんで、連れて行こうとしたが、彼はそれを振り放して、再び馬の方へ走り寄つた。馬はもう息も絶え絶えになっていたが、それでももう一度足で蹴り始めた。

「……えい、こん畜生、くたばりやがれ！」と、ミコールカはたけり立つて怒鳴つた。彼は鞭むちを投げ捨てて、身をかがめると、馬車の底から大きな太い轆ながえを取り出し、その端を両手で握つて、力いっぱい葦毛あしげの上に振りかぶつた。「……ぶつ殺す気だな！」と、周囲の者が叫んだ。「……殺しちまうぞ！」、「……おれのもんでえ！」とミコールカは叫んで、力まかせに轆ながえを打ちおろした。重い打撃の音が響いた。「……ひっぱたけ、ひっぱたけ！ 何してるだ！」と、群衆の中からいくつもの声が響いた。ミコールカは二度目を振り上げた。すると、第二の打撃が渾身の力で、不幸な痩せ馬の背へ打ちおろされた。馬はたじたと尻餅をついたが、また跳ね起きると、車を曳きだそうとして、死力をふるいながら八方へはねた。が、六本の鞭むちはところかまわず雨のように降るし、轆ながえはまた振り上げられて、三度目が打ちおろされ、ついで四度目と、正確に繰り返された。一撃のもとに打ち殺すことが出来なかつたので、ミコールカはもう氣ちがいのようになつていた。

「……なかなかしぶてえぞ！」と、周囲の者は喚わめいた。「……なにみんな、もうすぐおつ死ぬだよ、もうしめえだよ！」と、群衆の中から一人の野次馬が叫んだ。「……どうでえ、いっそ斧おのでやったら、え！ ひと思いに片づけちまえよ」と、三人目が叫んだ。「……ええい、うるせえや！ どけどけ！」とミコールカは狂暴に叫んで、轆ながえは捨て、またもや馬車の中へかがみ込むと、今度は鉄槌かねてこをぬき出した。「……危あぶねえだぞ！」と叫びざま、

彼は力限りに振りかぶって、哀れな馬に打ちおろした。当たりはづれて碎けた。馬はよろめいて、腰を落とし、また一跳ねしようとしたが、鉄槌がさらに力いっぱいその背へ振り下ろされて、馬は四本の足を一度になぎ払われたように、どっと地べたに倒れた。

「……それ、息の音を止める！」とミコルカは叫びながら、もう無我夢中で車から飛び降りた。同じように酔っ払って、真赤な顔をした幾人かの若い者も、鞭、棒、轆と、手当たり次第にものをつかんで、息も絶え絶えの牝馬のそばへ駆け寄った。ミコルカは脇の方に位置を定め、鉄槌で馬の背中をめった打ちに打ち始めた。痩せ馬は首をさし延べ、苦しげな息をついて、死んで行った。

「……とうとうやつつけやがった！」と、群衆の中で誰かが叫んだ。「……だって駆け出さなかったでえねいか！」「……おらのもんだあ！」とミコルカは、手に鉄槌を持って、突っ立っていた。「……ほんとにわれや十字架を持たねえだな！」と群衆の中から、また多くの声が叫びかけた。だが、あわれな少年は、もうわれを忘れてしまった。彼は叫び声を上げながら、群衆をかき分けて羣毛のそばへ駆け寄り、すでに息の絶えた血まみれの首を抱えて、その眼や唇に接吻した。やがて、ふいにはね起きると、われを忘れて小さな拳を固め、ミコルカに飛びかかった。その瞬間、さつきから彼のあとを追っていた父親が、やつとの事でひつつかまえて、彼を群衆の中から連れ出した。

そして、「……行こう！ 行こう！」と、父は彼に言った。「……家へ帰ろう！」、すると、「……お父さん！ 何だってあいつらは……かわいそうな馬を……殺しちゃったの！」と彼は泣き声をふりしぼったが、息がつまって、言葉は押し狭められた胸の中から、ただの叫びとなってほとぼり出るだけであった。「……酔っ払いが……悪ふざけしてるんだよ。こっちの知ったことじゃない。行こう、行こう！」と父は言った。彼は両手で父に抱きついたが、胸は苦しくて苦しくてたまらなかった。彼は息をついて、叫ぼうとした。その瞬間、目が覚めたのである。(本文)

十四、ベンチから悪夢までの要旨

さて、酔った女と紳士と巡査が去った後、主人公(ラスコーリニコフ)は、ふと自分はどこへ行くつもりで外に出たのかを、急に考え出しては、「……そうだ、ワシリーエフスキイ島の、ラズーミヒンのところだ」と思い出す。そして、その「ラズーミヒン」という人物は、恐らく、「……大学での(唯一の)友達の人一人だった。妙なことにはラスコーリニコフは、大学にいる時も、友達というものをほとんど持たず、すべての人を避けるようにして、人をたずねもしなければ、人にたずねられることも喜ばなかった。もつとも、ほかの連中も、じき彼から遠ざかってしまった。一般的な会合にも、談話にも、娯楽にも、彼は一切仲間入りしなかった。彼は骨身を惜しまず、必死になって勉強した。そのために人は彼を尊敬したが、愛する者は一人もいなかった。彼は非常に貧乏だったが、そのくせなんとなく尊大で傲慢で、まるで秘密でも抱いているように、人とうち解けなかった。――それで、一部の友人たちからは、彼は一人お高くとまってみんなを子供のように見下して、教養でも、知識でも、見解でも、まるで彼等よりすべてで抜きん出ている、彼等すべての見解や興味をば、何か一段低いものとして見ているように思われていた」とある。こ

れが、まさに主人公（ラスコーリニコフ）であった。

一方、なぜかうまが合う唯一の友である「ラズーミヒン」という人は、「……並みはずれて快活であり、気さくで、単純なまでに善良な、青年であった。とは言え、その単純さの下には、深さと威厳とが隠されていて、仲間からも愛されていた。また、彼の風采もちよつと異彩あるものだった——痩せて、背が高く、髪が真黒で、いつも無性ひげをはやしていた。彼はときどき乱暴もやったが、力持ちとして知られていた。酒も度なしに飲めたが、また全然飲まないでもいられた。ラズーミヒンはなお、どんな失敗をしても平気であることと、どんなに困っても決してへこたれないことで有名であった。彼は屋上に下宿することも出来れば、地獄のよう飢餓や、並みはずれた寒さを忍ぶこともできた。彼は非常に貧乏であった。そして全くの独力で、何かしら仕事をして金を得ながら、自分の生活を支えていた。彼は、働きさえすればいくらでも汲み出すことのできる泉を無数に知っていた。現在では、彼もまた大学を去るべく余儀なくされていたが、それも長いことではなく、今彼は全力をあげて、再び学業を続けるべく、生活状態の改善を急いでいた」のである。

さて、その友に会いに行くはずであったが、急に、「……おれはラズーミヒンのところへは行くが、それは、今ではない。あれがすんだ翌日行くんだ。あれが片づいてしまつてから、万事が新しく動き出してから……」と考え直して、彼はベンチから離れて、また歩き出した。家の方に引返そうとしたが、家へ帰るのが急に厭わしい気持ちになり、足の向くままに歩いて行つた。やがて、料理店のそばを通りかかった時に、何か食べたいと思ひ、その料理店で、ウオーツカを一杯ひっかけ、何かをつめたピローグを一つ食べ、残りは歩きながら食べ終えて、その往來を歩き続けていくと、酔いが回つてきて、足が重くなり、ひどく眠気を催してきたので、「……往來から下りて叢の中に這入り、草の上に倒れると、そのままぐつすり寝込んでしまった」とある。

*

*

そして、ここで有名な「悪夢」を見ることになるが、それは、次のようなものである。つまり、「……それは、彼がまだ田舎の町にいた頃の、子供時代の夢であった。彼はまだ七つばかりで、祭りの日の夕方近く、父に連れられて郊外を散歩していた。その道の先には、一軒の『酒場』があり、そこにはいろんな連中が集まつて、喚いたり、笑つたり、唄を歌つたり、罵り合つたり、また、よく喧嘩をしていた。酒場の周辺には、たえずさういふ酔つ払つた、恐ろしい人相をした男どもがうろついていたのである。彼らに出くわすと、彼はしっかりと父にしがみついて、全身わなわなとふるえあがるのであった。また、その酒場から三百歩先には町の墓地があり、その墓地の中央には教会が建っていた。その教会には、年に二回ぐらい亡くなった祖母の法要の営まれるたびに、父母に連れられてミサに行つた。その祖母の墓のそばに、生後六カ月で死んだ彼の弟の小さい墓もあった」とある。

さて、本題の「悪夢」の内容は、次のようなものである。つまり、「……彼は父と一緒にいつもの道を歩いて、酒場のそばを通りかかると、いつもとちがった光景が彼の注意を惹きつけた。——おりからそこには、祭でもあるらしく、着飾つた町のかみさん達や、百姓女や、その亭主たちや、いろんな下層民が集まつていた。一人残らず酔つ払つて、唄を歌つていた。酒場の入口の階段のそばには、一台の荷馬車が立っていたが、それは妙な荷馬車であった。それは、（本来）大きな運送馬をつけて貨物や酒樽をはこぶ大形の荷馬車の一つであった。ところが今は、不思議にも、そんな大きな荷馬車に、ちっぽけな、痩せ

っぽっちの葦毛の百姓馬（しかも牝馬）がつけてあった」とある。

そして、その酒場の中からぐでんぐでんに酔っ払った大きな百姓どもが出てきた。その中の一人が、「みんな乗つけてかあ、乗らっせい！」と叫ぶと、たちまち笑い声と叫び声が起こった。それは、「やい、ミコルカ、正気けえ、やあ——そげえにちっぽけな牝馬を、こんげなでけい車におっつけるなんて！」と。それに構わず、ミコルカは、「乗らっせい、乗らっせい」と叫び、六人が馬車に乗ってもまだ余裕があるので、もう一人、百姓女も乗り込む。そして、ミコルカは、その痩せた牝馬を鞭で叩いて走らそうとするが、思うように進まず、そうすると、さらにムキになって、何度も何度も鞭で強く叩き、乗っていた二人の若者も一緒になって鞭で叩き、もうめった打ちされているやせ馬を見ては、まわりの野次馬たちは笑ったり面白がったりしているが、七歳の主人公（ラスコーリニコフ）は、「……お父さん、お父さん、あの人たちは何をしているの！ お父さん、かわいそうな馬をぶってるよ！」と。それに対して、「行こう、行こう」と、父は言った。「……酔っ払いの馬鹿者たちが悪ふざけをしているんだよ。さあ行こう、もう見ないでおいで！」と、父は彼をつれ去ろうとしたが、彼は、父の手からすり抜けて、我を忘れて馬の方へと走り寄った。一方、鞭の攻撃は徹底的に続けられて、最後には、ミコルカは、鞭から太くて長い「鞆」に代えて、何度も力一杯に振り下ろして叩き、さらに、今度は「鉄槌」で二度ほど馬の背中を力まかせに叩きつけると、その馬は、どっと一度に地面へ倒れてしまう。そうすると、今度は、ミコルカは荷馬車から飛び降り、また、同じように酔っ払って真赤になった幾人かの若者も、鞭、棒、手当たり次第のものをつかんで、息も絶え絶えの牝馬のそばへ駆け寄った。そして、ミコルカの鉄槌のめった打ちとともに、その「痩せた牝馬」をみんなで叩き殺してしまう。それを見ていた七歳の主人公（ラスコーリニコフ）は、その死んでしまった牝馬にかけ寄って、その牝馬の「目と唇」に接吻するとともに、彼は、無謀にもミコルカにこぶしで殴りかかろうとするが、探しまわっていた父親が彼をひつとらえて、群集の中から連れ出したのである。

十五、悪夢の謎解き

それでは、これらは、いったい何を意味するのだろうか？ この「難題」をこれから敢えて「読み解いて」みたいと思うが、それは、次のようなことである。

まず最初に、死んだ「父親」が「夢の中」に出て来る。これは、一体、どういうことかと問えば、それは、つまり、死んだ「親や兄弟（姉妹）その他」が「夢の中」に出て来る時には、その人が何らかのことで悩んだり迷っていて、それに対する何らかの「暗示」（或いは「啓示」）になっている場合が多いのである。——それでは、この「悪夢」は、一体、何の「暗示」（或いは「啓示」）かと問えば、それは、これからまさに「老婆殺し」をしようとしていることに対する、一つの「暗示」（或いは「啓示」）であり、それは、つまり、「……お前がやろうとしていることは、夢の中の酔っ払いどもがやっていることと全く同じことなのだ」という「暗示」（或いは「啓示」）になっているかと思う。

次に、この「場面」の設定であるが、まず、七歳の主人公とその父親、次に、酒に酔った数多くの下層民の人たち、その人たちは、荷馬車に乗る人たちと野次馬とに二分される。そして、もう一つは、大きな荷馬車と一頭の痩せた「百姓馬」（牝馬）ということになる。

それでは、これらは、一体、何をそれぞれ「象徴」（或いは「暗示」）しているのだろうか？ それは、次のようなことである。まず、七歳の主人公とその父親であるが、七歳の主人公というのは、本来、人間であるならば誰もが持ち合わせている「良心」（つまり「悪を憎む心」）の「象徴」であり、一方、その父親は、大人の持つ「現実的な対応」の「象徴」であり、できるだけ「関わらない」ようにして、つまり、「悪」に対しても、見て見ぬ振りをして、出来るだけ「わが身や子供の安全を守ろう」とする「象徴」なのである。次に、酒に酔った数多くの下層民の人たちというのは、例えば、酒を飲めば、誰でも知性や理性の働きが弱くなるが、そのように「知性や理性」の働きが弱く、実に様々な「欲望や感情」などに容易に振りまわされてしまふ、そういう人たちの「象徴」であり、しかも、その中の「馬車に乗る人たち」というのは、この世で権力や地位或いは富などを得た人たちであり、そのような人たちは、権力や地位或いは富などをかさにして、力のない者、弱い者、或いは、貧しい者たちを容赦なく虐げ（しいた）ていく存在の「象徴」なのである。そして、もう一方の野次馬たちというのは、まさに「第三者的立場」の人たちであり、それゆえ、自分には直接火の粉は降りかかって来ないので、何でも無責任に「面白がる」という最大特徴があるが、そのような無責任な人たちの「象徴」である。そして、最後の、大きな荷馬車と一頭の痩せた「百姓馬」（牝馬）というものは、例えば、ソーニヤの場合、家が極めて貧しく、それゆえ、その「一家の家計」を支えるためには、どうしても「淫売婦」に身を随として働くしかないという、そういう背負いきれないほどの重荷を背負われた女性たちの「象徴」であり、それは、淫売婦をはじめ、身売り、過酷な労働、虐待、暴力、差別、その他、そのような背負いきれないほどの重荷を背負わされ、虐げ（しいた）られている女性たちの「象徴」になっている。——それは、いつの時代でも、また、どこの国でも、力のない女性たちの、また、弱い立場の女性たちの、或いは、貧しい境遇の女性たちの虐げ（しいた）られている象徴的な「痛ましい姿」になっているのである。

十六、目覚め

彼は、全身汗みずくになって眼をさました。髪は汗のためにべっとり濡れ、彼はあえぎあえぎ、恐ろしくなつて起きあがった。

そして、「……やれやれ、夢でよかつた！」と、彼は樹の下に座つて、深く息をつきながら言った。「……だが、いったいどうしたつて言うんだらう！ もしや熱病でも始まつてるんじゃないかな——こないやな夢を見るなんて！」

彼はまるで全身をうち砕かれたようであつた。心の中は混沌（こんとん）として真暗だつた。彼は膝の上へ肘（ひじ）をついて、両手で頭をささえた。「ああ！」と彼は叫んだ。「……おれは、おれは実際、実際斧をふるつてあいつの頭を、あいつの脳天をたたき割るつもりなんだからか……ねばねばする暖かい血の中ですべったり、錠前をこわしたり、盗んだり、ぶるぶる震えながら、全身血まみれの体を隠すんだらうか……斧をさげて……ああ、ほんとうにそんな事をするんだらうか！」

彼はこう呟（つぶや）きながら、木の葉のようにわなわな震えた。「……おれはいつたいていどうしたというのだ！」と、彼は再び身を起（た）ししながら、深い驚愕（きょうがく）に襲われたように言葉を続けた。「……だつておれは、あれが自分にとてもやりきれないことは、ちゃんとわかつていたじ

やないか。それを何のために、今まで自分を苦しめていたんだろう！ 現について昨日、昨日もあの……瀬踏みに出かけた時、おれはそれがとても出来ることではないことを、はっきりと合点したはずじゃないか……それをなんだ、何だって今頃？ 何だって今頃までそれを（出来ないことを）疑っていたんだ！ 現に昨日、階段を下りながら、おれは自分に言ったじゃないか、これは愚劣なことだ、卑しいことだ、穢らわしいことだと……現にこの通り、ちよつとそのことを現実、に考えただけでも、おれは胸が悪くなり、恐ろしくてぞつとなるじゃないか……」と思うのであった。

そして、「……いや、おれには出来ない、とても出来ない！ よし一切のこの計算に何の疑いもないとしても、このひと月の間に決せられたことのすべてが、日のように明らかであり、数学のように正確であるとしても、ああ！ やはりおれには決行は出来ない！ とても出来ない、とても！ それをなんだ、何だって今頃まで……」

彼は立ち上がって、きよろきよろとあたりを見まわした。自分がこんなところへ来ていることに、さも驚きでもしたように。そしてやがて、T橋の方へ足を向けた。その顔は蒼ざめ、両眼は燃え、四肢はぐったりとしていたが、しかし彼は、何やら呼吸が急に楽になったような気がした。これまでずいぶん長い間自分を苦しめていたこの恐ろしい重荷を、きれいさっぱりと振り捨ててしまったように感じて、心が急に軽く、穏やかになったのである。「主よ！」と彼は祈った。「……われにわが道を示したまえ、すればわたしは、この呪うべき……妄想を放擲（ほうてき）（振り捨て）ます！」と。

橋を渡りながら、彼は静かに落ちついた気持ちでネヴァ河を眺め、輝かしい真紅な太陽の、燦爛（さんらん）として沈みゆくさまを眺めた。彼は極度な衰弱にもかかわらず、身内にいささかの疲労をも感じなかった。ちよつどそれは、彼の心臓内でまる一カ月も化膿（かのう）していた腫物（はれもの）が、急に口があいたようなあんばいだった。自由、自由！ 今こそ彼は、ああした妖術（まじ）から、魔法から、誘惑（ゆうわく）から、まどわしから、自由の身となったのである。

*

*

後になって、彼がこの時のこと——この二、三日の間に彼の身辺に起こったいっさいのことを、その一刻一刻、一点一点、一面一面と、細大もらさず想い起した時に、そのたびに、いつも彼は、実際はそれほど不思議でも何でもないのだけれど、それからというもの、ある一つの事が、いつも何か運命の予定のように感じられるのであった。

それはほかでもない——自分があれほど疲労し困憊（くわい）して、一番近いまっすぐな路をとって帰るのが何より得策だった際に、何がゆえに、あんな遠まわりの草市場など通って家へ帰ったのか、その理由がどうしても合点ゆかず、説明のつきかねることであった。もつとも、それは大したまわり道ではなかったけれども、まわり道には違いなく、また全然用のない道であった。もちろん、自分の通った町筋をおぼえないで家へ帰るようなことは、彼には決して珍しいことではなかった。だが、どうして、と彼はいつも自分にたずねるのだった。どうしてあんなに重大な、自分にとってあんなに決定的な、同時にあのように高い程度において偶然な草市場での邂逅（かいこう）が、（彼にはそこを通る用は何もなかったのに）時もあるうちにちよつどこんな時に、彼の生涯におけるこんな瞬間に、とくに彼がこんな精神状態でいた時に、しかもそれが、その邂逅（かいこう）が、よりにもよって彼の全運命に対して、最も決定的な、絶対的作用を与えうるような、そういう状態にあった時に起こったのか？ それはまるで、ここでことさら彼を待ち伏せしてでもいたようではないか！

十七、草市場

彼が草市場を通ったのは、九時頃のことだった。テーブルや盤台或いは屋台や小店などを並べた露店商人たちは、めいめい自分の店を閉めたり、商品をかき集めてかたづけたりして、客たちと同じように、わが家へ散りかけていた。地下室に巣くう小料理屋の付近、草市場をとりまく家々の悪臭漂う汚らしい裏庭、殊に酒場の近くには、ありとあらゆる職人やぼろ服の連中が、大勢うようよぞろぞろしていた。ラスコーリニコフは、あてなしに町へ出る時には、付近一帯の横町と同じく、この界限をぶらぶら歩きまわることが一番好きだった。そこでは彼のぼろも、誰にじろじろ高慢ちきな目で見られることもなく、誰はばからず好きな服装をして歩くことが出来たからである。K横町のつつき片隅に、夫婦づれの小商人がテーブルを二つ並べて、糸だの、紐だの、更紗の頭巾だの、そういった風の雑貨をあきなっていた。彼等もやはり帰りたくをしていたが、立ち寄った知合いの女との立ち話に暇どっていた。この女というのは、昨日ラスコーリニコフが時計を持って瀨踏みに行った、十四等官未亡人の金貸しの老婆、アリオナ・イワーノヴナの妹、リザヴェータ・イワーノヴナ、世間一般の呼び方では単にリザヴェータと呼んでいた。彼はずつと前からこのリザヴェータのことを何もかも知っていたが、彼女の方でもうすうすは彼を知っていた。それは背の高い不格好な、臆病でおとなしい三十五になる老嬢（行かず後家）で、姉のところでもまるで奴隷みたいに夜昼なく働かされながら、姉の前ではちりちりして、甘んじて打たれてさえいる、馬鹿に近いような女であった。彼女は包みをさげて、思案顔に商人夫婦の前に立ったまま、彼等の話をじつと聞いていた。夫婦は何やらひどく熱心に、彼女を説きつけている様子だった。ラスコーリニコフはふと彼女の姿を見る時、この邂逅に別段なんの不思議もなかったにも関わらず、突然、ある深い驚愕に似た奇妙な感じが、彼の全身を領したのである。

「……お前さん、ねえリザヴェータ・イワーノヴナ、自分でよく決めなくちゃいけないよ」と、商人はあたりかまわぬ高調子で言った。「……明日七時ごろに出ておいでなさいよ。その人たちも来るんだから」と言うと、「明日——？」とリザヴェータは、まだ肝が決まらない様子で、言葉じりをひいて、沈んだ調子でこう言った。「……ああ、あなたはアリオナ・イワーノヴナが怖いんだわね！」と、勝気な商人の女房が早口にしゃべり出した。「……あなたを見てると、ほんとにまるで小さな子供みたいね。あの人はあなたにとつちや、親身でも何でも無い、ただの義理の姉さんじゃないか！ それなのに、なんて大した権利を持ったもんだらうね」、「……だからお前さん、今度のこととは、アリオナ・イワーノヴナには何にも言わないほうがいいんだよ」と、亭主の方がさえぎった。「……これがわしの忠告さ、うちへは断らないで出ておいでよ。なにしろ割のいい仕事だからね。姉さんだつてあとになりや分かってくれるさ」、「……じゃ行くとしようかね？」、「……七時だよ、明日の、あつちからも来るのだから、一つ自分で肝をきめなさいよ」、「……サモワールも支度しておくからね」と、女房は口を添えた。「……ええ、じゃあいいわ、行きますわ」と、やはりまだ考え込みながら、リザヴェータはこう答えて、のろのろとその場を動き出した。

その時、ラスコーリニコフはもう店を通り越していたので、その先はよく聞こえなかつ

た。彼は一語も聞き洩らすまいと努めながら、静かに、そっと目立たぬように通り過ぎた。彼の最初の驚愕は、次第次第に恐怖の念と変わって行った。彼はさながら背筋に氷水を浴びせられたような気がした。——彼は知ったのだ、しかもふいに、偶然に、まったく思いがけなく知ったのである、明日の晩、きつきり七時に、あの老婆にとつて唯一の同居者である妹のリザヴェータが、うちにいらないということ。しぜん老婆は、晩の正七時には、一人きりでうちにいるだろうということ。

彼の住居までは、あとわずかに数歩を余すのみであった。彼は、死刑の宣告でも受けた人のようになって、自分の部屋へはいって行った。彼は何事をも考えなかった。いや、全く考えることが出来なかったのである。けれど、彼は、突然に、自分にはもはや考慮の自由もなければ、意志もないということ、そして一切がふいに、絶望的に決定されてしまったということ、自分の全存在をもって感じたのである。

もちろん、よしんば今後なお幾年もの間、彼が都合のいい機会を待ってみたとしても、例の計画をなし遂げるのに、いま偶然彼に提供されたこの機会以上に確実な第一歩をつかむことは、とうてい出来なかつたに違いない。とにかくどういふ場合であっても、その前夜に、しかも確実に、一切の危険な質問や探索なしに、明日これこれの時刻に、それに対して自分が大それたことを企てている当の老婆が、全く一人きりでうちにいるということを知るの、よほど困難なことに違いないのである。(本文)

一、目覚めの要旨

さて、彼は、「……全身汗みずくになって眼を覚まし、髪は汗のためにべっとり濡れて、あえぎあえぎ、恐ろしくなつて起きあがつた」とある。そして、夢でよかつたと思ひながらも、なぜこのような「悪夢」を見るのだろうか、「自問自答」をするなかで、「……ああ、おれは、おれは実際、實際斧をふるつてあいつの頭を、あいつの脳天をたたき割るつもりなんだろうか……ねばねばする暖かい血の中ですべったり、錠前をこわしたり、盗んだり、ぶるぶる震えながら、全身血まみれの体を隠すんだろうか……斧をさげて……ああ、ほんとうにそんなことを!」、「……いや、おれには出来ない、とても出来ない! よし一切のこの計算に何の疑いもないとしても、このひと月の間に決せられたことすべてが、日のように明らかであり、数学のように正確であるとしても、ああ! やはりおれには決行は出来ない! とても出来ない、とても……!」というような「心の状態」(つまり「老婆殺し」計画の中止)へと大きく変化するのである。

それは、「……橋を渡りながら、彼は静かに落ち着いた気持でネヴァア川を眺め、輝かしい真紅な太陽の、燦爛として沈みゆくさまを眺めた。彼は極度の衰弱にもかかわらず、身内にいささかの疲労をも感じなかつた。ちようどそれは、彼の心臓内でまる一カ月も化膿していた腫物が、急に口があいたようなあんばいだった。自由、自由! 今こそ彼は、ああした妖術から、魔法から、誘惑から、まどわしから、自由の身となつたのである。

十八、運命の一瞬

ところが、彼は、その日、自分は疲労困憊をしていて、一番近いまっすぐな路をとつて

帰るのが何よりも得策だった際に、何がゆえに、遠まわりをして何の用もない草市場を通ったのだろうか？ それは、まるで「運命」に導かれるように、わざわざ遠まわりをして草市場を通ったのは、夜九時頃であったが、そこで、偶然にも老婆の義理の「妹」（リザヴェータ）を見かけることになる。彼女は、背は高く、不格好で、臆病で、おとなしい、三十五になる老嬢（行かず後家）であり、姉のところでもまるで奴隷みたいに夜昼なく働かされながら、姉の前ではちりちりして、甘んじて打たれてさえている、馬鹿に近いような女であった。その彼女が、草市場で商人夫婦と会話をしている、「……あす七時ごろに出ておいでなさいよ」。「……明日——？」。「……ああ、うちへは断らないで出ておいで。なにしろ割のいい仕事だからね」。「……じゃ行くとしようかね？」という会話を、たまたま耳にして、「……彼は知ったのだ。しかもふいに、偶然に、まったく思いがけなく知ったのである。あすの晩、きつちり七時に、あの老婆にとつて唯一の同居人である義理の「妹」（リザヴェータ）が、うちにいないということをし、ぜん老婆は、晩の七時には、一人きりでうちにいるだろうという、ことを……」。まさに「この瞬間」、すべてが決定づけられてしまった。彼の「迷い」は、一瞬にして消えて、「……一切がふいに、絶望的に決定されてしまったのである」……。

十九、老婆を初めて訪ねる

後になってラスコーリニコフは、ふとしたことから、商人夫婦がリザヴェータを自宅へ呼び寄せたわけを知った。それはきわめてありふれた、べつだんなんの変わったこともない事情であった。他国から来て急迫した一家が、手まわりのものだとか、衣類だとか、その他すべて婦人用の物を売ることになった。が、市場へ出すのは不利益なので、女の仲買人をさがしていたところ、ちょうどリザヴェータがそれを稼業にしていたのである。——彼女は手数料を取って用を足すのであるが、いたって正直で、いつもいっぱいの値——少しも掛け引きのない値をつけるところから、お得意をたくさん持っていた。それに、彼女は全体に無口で、前に言ったようにおとなしい、内気な女性だったのである。

けれども、ラスコーリニコフは、近頃では大分迷信的になっていた。その痕跡は、その後も長い間、ほとんど消しがたいものになって、彼の中に残っていた。で、この事件全体のうちにも、彼は後日いつも、一種の不可思議と神秘性を見、特殊の影響と偶然の符合というものの存在を見ようとするのだった。ついこの冬のことである。友人の大学生ポコリヨフがハリコフへ立つ時に、話のついでにふと、万一質でも入れるような場合にとつて、アリョーナ・イワーノヴナ婆さんの住所を教えてください。が、その時分の彼は、教師の口などもあって、どうにかやっていた時だったので、長らく婆さんのところへは行かなかった。ところが、ひと月半ばかり前に、その住所書きを思い出した。ちょうど彼には、質草になりそうなものが二つあった。一つは父ゆずりの古い銀時計と、いま一つは妹が別れの時に記念としてくれた、何やら紅い石の三つ入った金の指輪である。彼はその金の指輪を持って行くことに決めた。老婆の住まいを捜し当てた時に、ひと目見たばかりで、まだ何にも知らぬうちから、彼女に対してどうにも抑えきれない嫌悪を感じた。彼は老婆から二枚の「札」を受け取って、帰りに一軒のある安料理屋へ立ち寄った。彼はお茶を命じて、そこに腰をおろすと、すっかり考え込んでしまった。すると、奇怪な想念がまるで卵から雛

がかえるように、彼の頭の中をつつきまわって、たちまち彼を占領してしまった。(この時に、あるいは「老婆殺し」というような想いがふと浮かんで来たのかも知れない。)

一、安料理屋での大学生と将校

ところで、ほとんど彼と並んだ隣りのテーブルには、彼のまるで知らない見おぼえもない一人の大学生が若い将校と一緒に陣どつていた。彼らはちようど玉突きを終わって、お茶を飲みかけたところだった。ふと彼は、大学生が将校に向かつて、十四等官未亡人の金貸しアリヨナ・イワーノヴナのことを話して、その住所を教えているのがふと耳に入ってきた。もうそれだけでも、ラスコーリニコフには何となく不思議に思われた。というのも、今しがたそこから出て来たばかりなのに、ここでもまたその噂をしているではないか。もちろん、偶然である。けれど彼はいま現に、あるきわめて異常な印象をふるい落とすことが出来ないでいるのに、まるで誰かが彼の世話を焼いてでもいるようなあんばいであった。大学生は急にその友人に向かつて、当のアリヨナ・イワーノヴナのこと、いろいろ詳しいことを話し始めたのである。

それは、「……ありやどうしてたいした婆よ」と彼は言った。「……あいつのところへ行きやいつだって金ができるよ。ユダヤ人のように金持ちでね、一度に五千ルーブリの融通もつけば、ルーブリの質だつていやとは言わないだ。われわれの仲間はいたいあいつのところへ行つてる。ただ、とても恐ろしい畜生だよ……」。

それから彼は、彼女がどんなに意地わるで気むずかし屋だかということ、ただの一日でも期限を遅らしたが最後、容赦なく品物を流してしまうということなどを話し始めた。その品物の相場の四分の一ぐらいしか貸さないで、月に五分から七分の利子を取るといふことなど。また、妹があるが、それをあの小さなうす汚い婆は、たえず打擲して、少なくとも五尺六寸(約一六八釐)は背のあるリザヴェータを、まるで小さな子供のようすつかり奴隷扱いているということまで語った……。

「……まあ、これもちよつと類のない話じゃないか！」と大学生は言って、からから笑つた。それから、彼らはリザヴェータのことを話し始めた。彼女のことは大学生も、なにやら特別満足そうな様子で語って、絶えずにやにや笑つていたが、将校の方もまたひどく興味をもつて聞いていた挙げ句、大学生に向かつて、そのリザヴェータを肌着のつくろいに寄こしてくれるように頼んだりした。ラスコーリニコフは、一語も聞きもらさないようにして、一度に何もかも知ってしまった。——リザヴェータは、老婆にとつて義理の(腹違いの)妹で、年はもう三十五であった。彼女は姉のために夜昼なしに働いて、家では料理女と洗濯女の代わりをしている上、内職に裁縫もやれば、床洗いにまで備わって、しかも稼いだもの(報酬)はそっくり姉に渡していた。どんな注文でも、仕事でも、老婆の許しなしには決して引き受けようとはしなかった。しかも、老婆はもう遺言状をつくつていたが、それによるとリザヴェータは、家財道具や椅子などと言つたもの以外には、金は一文ももらえないことになつていた。そしてこのことはちゃんと彼女自身にも知れていた。金は全部N県の某修道院へ、死後の永代供養料として寄付することに決めてあつた。リザヴェータは、官吏でなく町人の娘で、おそろしく不格好な、むやみに背の高い、長い曲がつたような脚に、いつも踏み減らした山羊皮の靴をはいている女だったが、ちよつと身ぎ

れいにはしていた。しかし大学生が驚いたり笑ったりしていた主なことは、リザヴェータが年じゆう妊娠しているということであつた……。

すると、「……だつて君は、その女は不器量だつて言つたじゃないか！」と、将校は口を入れた。「……そうだ、色がばかに浅黒くつて、まるで仮装した兵隊と言つたような女さ。しかしね、決して不器量じゃないよ。あの女はあれでなかなか善良な顔と目をしているんだ。いや、非常にと言つてもいいくらいなものだよ。その証拠にたいいていの人にすかれてるよ。もの静かで、おとなしくて、素直で、従順で、何事にも決して逆らわない女だよ。それにその笑顔がすてきがいいんだ」、「……じゃ、君も大分思召しがあるんだな？」と、将校は笑い出した。「……ちよつと変わつてるからね。それはそうと、君に一つ言いたいことがある。僕はあの呪うべき婆をぶち殺して、金をふんだくつてやつたつて、大丈夫、なんら良心に恥じるところはないと思うんだがね」と、大学生は熱を帯びた調子で言い足した。

二、大学生の論理

将校はまたあははと笑つたが、ラスコーリニコフはぶるつと身ぶるいした。これはまた何という不思議なことであつたらう！「……そこで僕は、君に一つ真面目な問題を提出したいと思うんだ」と、大学生は次第に興奮してきた。「……ぼくの今言つたことはむろん冗談だ。だが、いいかい——一方には無知で無意味な、何の価値もない、おまけに因業で病身で、何人にも用がないどころか、むしろ万人に害のある、その上、自分でも何のため生きていかぬかも知れない、そして今日明日にもひとりで死んでいく婆がいる。いいかね？ わかるかね？」、「……うん、わかるよ」と、熱しきつた友達を注意深く見すえながら、将校は答えた。

「……じゃあさきを聞きたまえ。しかるに他の一方にはだ、金が続かないばかりに空しく失われてゆく、若い、新鮮な力がある、しかもいたるところ無数にあるんだ！ 修道院へ寄付される婆の金さえあれば、建設し復活することのできる、百千の立派な事業や計画があるんだ！ 或いは数百数千の生活が、それによつて正しい道へ向けられるかも知れないのだ。また幾十の家族が、それによつて、窮迫から、腐敗から、破滅から、墮落から、花柳病院から救われるかも知れないのだ。それがみなあいつの金でだ。奴を殺してその金を奪え！ ただそれは、しかるのちその金を利用して、全人類への奉仕、公共事業への奉仕にわが身を献げるといふ条件のもとにだ。君はどう思うかね、一個の細小なる犯罪で、数千の善事をつぐなえないものだろうか？ わずか一つの生命のために——幾千の生命が腐敗と墮落から救われるんだぜ。一つの死が百の生に変わるんだ。——これは一個簡単な数学問題じゃないか！ それに第一、一個の肺病やみで、愚劣で、因業な婆の生命が、生命全体の量に対してなにほどの意味を持つか！ 虱や油虫の生命と、何の選ぶところがあるか、いやむしろそれにも劣るよ。なぜつて、婆のほうはむしろ有害だからさ、第一、奴は他人の生命を食つている——奴は業つくばりだ。この間も腹立ちまぎれに、リザヴェータの指にくいついて、すんでのことにかみ切つてしまふところだつた」。

将校は、「……むろん、そんなものは生きてる価値はないね」と口をはさんだ。「……しかし、そこには自然の法則というものもあるからな」と言つと、大学生は、「……いい

や、君、だって人は自然を修正し、(よい方向を) 指向してるじゃないか。それがなかったら、偏見の中に沈没してしまわなければならんことになるよ。でなかったら、一人の大人物も出なかっただろう。人はよく『……義務だ、良心だ』と言う、僕は義務や良心に対して、とやかく言おうとは思わない、——だが、われわれはそれをどんなふう^にに解釈しているだろうか？ 待ちたまえ、僕は君にもう一つ問題を提出する。いいかね！」と言うと、将校の方は、「……いや、君こそ待ちたまえ、今度は僕の方から質問する、いいかね！」と言い。「よし！」と応えると、「……君は今、蝶々と大熱弁をふるったが、ひとつ一歩を進めて言ってくれ——君は、み^みずから手を下して、その婆を殺すかどうか！」と言うことだ。「……もちろん、否さ！ 僕は正義のために叫ぶまで……僕の周知するところにあらずさ……」と答えると、「……しかし、僕に言わせると、君が自ら決行するの^でな^きや、正義も何もあつたもんじゃないよ！ さあ行つて、もう一勝負！」と言うのであつた。

ラスコーリニコフは異常な興奮に襲われていた。むろん、これらはすべて形式や題名こそ違つてはいるけれど、彼も再三聞いたことのある、きわめてありふれた、平凡な、青年達の議論であり、意見であつた。けれども彼自身の頭にも……まさに同じような思想が生まれたばかりの今この時に、なぜ特にこんな談話、こんな意見を聞かなければならなかったの^だらう？ なぜ、彼自身、いま当の老婆のところから、自分の思想の芽生えを抱いて出て来たばかりの時に、老婆についてのこんな話を耳にしなければならなかったの^だらう？……この暗合(偶然に一致したこと)が、彼にはいつになつても不思議に思われてならなかつた。実にこの取るにも足らぬ、安料理屋の談話が、事件の将来の発展に際して、彼の上に異常な影響を持ったのである。それは、あたかも事実そこに「一種の宿命、一種の暗示」でもあつたかのように……。(本文)

三、老婆殺しのきつかけ

さて、主人公(ラスコーリニコフ)の「頭の中」(或いは「心の中」)に「老婆殺し」という「考え」が浮かんで来たのは、一体、何を「きつかけ」としてかとあらためて考え直してみた時に、主人公(ラスコーリニコフ)の「頭の中」(或いは「心の中」)に浮かんで来たのは、次のようなことであつた。——まず、そもそも「老婆殺し」の発想の「原点」そのものは、一体、どこから始まるのかと問えば、それは、半年前、授業料が払えず、大学を退学する時に、独自の「論文」(特殊な人間)というものを書いた時からであり、その「特殊な人間」という「考え方」が「潜在意識」としてあつたからこそ、やがて、「老婆殺し」という具体的な「考えや想い」などが生じて来ることにもなるのである。

それは、まず、実際に今からひと月半ばかり前に、主人公(ラスコーリニコフ)は、金貸しの「老婆」(アリョーナ・イワーノヴナ)のところに、妹が別れの時にくれた金の指輪を質草として、老婆をたずね当てた時に、「……ひと目見たばかりで、まだ何にも知らないうちから、彼女に対してどうにも抑えきれない嫌悪を感じた」とある。この時に、なぜか「……この老婆ならば、たとえ殺しても構わないかも知れない」という漠然とした「思い」がふと浮かんで来たのかも知れない。そして、その帰りに、ある安料理屋へ立ち寄り、そこで、一人の大学生と若い将校とが一緒にいて、大学生の方が、次のような話をして、それを耳にするのである。それは、「……僕はあの呪うべき老婆をぶち殺して、金をふん

だくってやったって、大丈夫、何ら良心に恥じるところはない」と。さらに続けて、「……一方には、無智な、無意味な、何の価値もない、おまけに因業で、何人にも用がないどころか、むしろ万人に害のある、その上、自分でも何のため生きていかも知れない、そして今日明日にもひとりで死んでゆく老婆がいる」。そして、「……もう一方には、金が続かないばかりに空しく失われてゆく、若い、新鮮な力がある。しかもいたるところ無数にあるんだ！ 修道院へ寄付される老婆の金さえあれば、建設し復活することのできる、百千の立派な事業や計画があるんだ！ また幾十の家族が、それによって、窮迫から、腐敗から、破滅から、墮落から、花柳病院から救われるかもしれないのだ。——それがみなあいつの金でだ。奴を殺してその金を奪え！ ただしそれは、しかるのちその金を利用して、全人類への奉仕、公共事業への奉仕にわが身を捧げるといふ条件のもとにだ。——君はどう思うかね。一個の最小なる犯罪が、数千の善事でつぐなえないものだろうか？ わずか一つの生命のために——数千の生命が腐敗と墮落から救われるんだぜ。一つの死が百の生に変わるんだ。——これは一個簡単な数学問題じゃないか！ それに第一、一個の肺病病みで、愚劣で、因果な老婆の生命が、生命全体の量に対して何ほどの意味を持つところか？ 虱や油虫しらみの生命と、何の選ぶところがあるのか？ いやむしろそれにも劣るよ、なぜって、老婆のほうはむしろ有害だからさ。第一、奴は他人の生命を食っている——奴は業つくばりだ。この間も腹立ちまぎれに、リザヴェータの指にくいついて、すんでのこと噛み切ってしまうところだったとある。この「会話」が、なぜか主人公（ラスコーリニコフ）の「頭の中」（或いは「心の中」）に残って何らかの働きかけを受ける。そして、ひと月前からは、主人公（ラスコーリニコフ）は、部屋に閉じ籠もっては、まさに「老婆殺し」のことばかりを考えるようになってしまったということである。

*

*

ちなみに、この若い大学生の「論理」（理屈）というものは、極めて「幼稚なもの」であり、例えば、この大学生にしてみても、若しも自分（大学生自身）が「老婆の立場」であった場合、喜んで犠牲になって死んでいけるのか？ また、祖父母をはじめ、親兄弟（姉妹）親戚、その他が「老婆の立場」であった場合、無残に殺されてもそれをよしと考えることができるのか？ できるわけがない。また、「老婆」を虫けら同然と勝手に決めておけるが、「老婆」の「全人生」（全人格）のいったい何を知っているのか。また、「老婆」を殺しても、それを悲しむ親兄弟（姉妹）親戚、その他など一人もいるはずがないと、なぜ、そう言い切れるのか？ すべては、外からのちよつと見て勝手にそう決めつけているだけである。——例えば、よくホームレスを若い人たちが襲う事件が起こることがあるが、その場合、若い人たちは、ホームレスなどは、所詮、人間のクズ、虫けら同然と思つて襲うのかも知れないが、しかし、誰が好んでホームレスなどになるだろうか。実に様々な理由があつてやむを得ずそうしているのであり、それらすべてを本人だけの責任だとなぜ言い切れるのか？ 本人の努力だけではどうにもならないことだっていくらもあり、実に様々な「悲しみや苦しみ」などを背負っている人たちを、虫けら同然に面白がつて、「殴り殺し」にする行為の方が、遙かに「人間性を欠いた行為」になるだろう。なぜ、それに気づかないのか？ 若い時には、どうしても「一面」からしかものが見えず、自分（たち）に都合のよい「論理」（理屈）を振りかざして、例えば、勇気でもないことを勝手に勇気だと思ひ込んで、逆に無謀で愚かなことを行なったり、また、正義でもないこと

を勝手に正義だと思い込んで、かえって不正なことを行なったりするものである。

* さて、ここで最も大事なことは、この「安料理屋」での大学生と将校との「談話」というのは、妹が別れの時にくれた金の指輪を質草として、主人公（ラスコーリニコフ）が初めて高利貸しの老婆をたずねた、その帰りに寄った「安料理屋」であり、それは、ひと月半ばかり前のことである。そして、その後、ひと月前からは、主人公（ラスコーリニコフ）は、部屋に孤独閉じ籠もっては、まさに「老婆殺し」の中心にあれこれ考えるようになってしまふ。そして、空想に耽つていたその「老婆殺し」の「瀬踏み」（下見）として、今度は、事件の三日前に、父の形見の古い銀時計を質草として、二回目、高利貸しの老婆をたずね、室内の様子をできるだけ記憶しておこうと、すばやく室内のすべてに眼を走らせる。その帰り、にたまたま寄った「酒場」で、女主人公（ソーニャ）の父親（マルメラードフ）に偶然出合い、その酔った父親（マルメラードフ）を家まで送り届ける。その翌日の朝、九時頃、女中のナスターシャが彼を起こすとともに、一通の手紙が来ていることを告げられるが、それは母親からの「長い手紙」であった。

* さて、主人公（ラスコーリニコフ）は、その母親からの「長い手紙」を涙ながらに読み終えると、この狭い部屋にすることがどうにも息苦しく感じられ、帽子を手に持ち、すぐにも外へと出かけた。そして、人出の少ない並木通りを歩きながら、とにかく、人間性に問題のある「弁護士」と愛する「妹」との結婚は、何が何でも阻止すると固く決心するのであった。やがて、疲れを感じて、ベンチで休もうと探していると、一人の酔った若い女性がふらふら歩いているのが目に止まる。しかも、その後をつけるような紳士まで一人いて、酔った若い女の子は、やがてベンチまで来て倒れてしまふ。一方、主人公（ラスコーリニコフ）は、その一人の紳士の方へと近づき、「……君はここに何の用があるのだ？」（さつさと）「ここを去りたまえ！」と言うと、「なんだと生意気な、悪党め！」と、お互い殴り合いの喧嘩になりそうになるが、そこに割って入ったのが一人の「巡查」であり、主人公は、その「巡查」にお金を渡して、酔った女の子を辻馬車で家まで送らせてくれと頼む。が、やがて、ふと「……若ししたら、この巡查も酔った女の子をつけて来たのではないか？」と思ひ直して、自分で自分の「お人好し」を笑ってしまうのであった。

さて、三人が去った後、ラスコーリニコフは、ふと自分はどこへ行くつもりで外に出たのかを、急に考え出しては、「……そうだ、ラズーミヒンのところだ」と想ひ出すが、それは、「……今ではなく、あれがすんだ翌日行くんだ」と考え直して、彼はベンチから離れて、家の方に引返そうとしたが、家へ帰るのが急に厭わしい気持ちになり、足の向くままに歩いて行った。やがて、料理店のそばを通りかかると、何か食べたいと思い、その料理店で、ウオーツカを一杯ひっかけて、何かをつめたものを食べ、その往來を歩き続けていくと、酔いが回ってきて、ひどく眠気を催してきたので、「……往來から下りて叢の中に這入り、草の上に倒れると、そのままぐっすり寝込んでしまった」とある。

そして、ここで有名な「悪夢」を見ることになるが、その「悪夢」から目覚めると、ラスコーリニコフは、「……いや、おれには出来ない。とても出来ない！ よし一切のこの計算に何の疑いもないにしても、このひと月の間に決められたことのすべてが、日のように明らかであり、数学のように正確であるとしても、ああ！ やはりおれは決行は出来ない！ とても出来ない。とても、とても……」というような「心の状態」（つまり「老婆

殺し」計画の中止)へと大きく変化するのである。——それはちやうど、彼の心臓内である一カ月も化膿していた腫物が、急に口があいたようなあんばいだった。自由、自由！今こそ彼は、ああした妖術から、魔法から、誘惑から、まどわしから、自由の身となったのである。

ところが、彼は、その日、自分は疲労困憊をしていて、一番近いまっすぐな路をとって帰るのが何よりも得策だった際に、何がゆえに、遠まわりをして何の用もない草市場を通ったのだろうか？ それは、まるで「運命」に導かれるように、わざわざ遠まわりをして草市場を通ったのは、夜九時頃であったが、そこで、偶然にも老婆の義理の「妹」(リザヴェータ)を見かけることになる。そして、その彼女が、草市場で商人夫婦と会話をしている、「……あす七時ごろに出ておいでなさいよ」。「……じゃ行くとしようかね？」という会話を、たまたま耳にして、「……彼は知ったのだ。しかもふいに、偶然に、まったく思いがけなく知ったのである。あすの晩、きっちり七時に、あの老婆にとつて唯一の同居人である義理の「妹」(リザヴェータ)が、うちにいないということをし、しぜん老婆は、晩の七時には、一人きりでうちにいるだろうということ……」。まさに「この瞬間」、すべてが決定づけられてしまった。彼の「迷い」は、一瞬にして消えて、「……一切がふいに、絶望的に決定されてしまったのである」。

十九、草市場から部屋へ帰る

さて、草市場から帰ると、彼は長椅子の上へ身を投げて、まる一時間も身動きしないで腰かけていた。やがてそのうちに暗くなつて来た。彼のところには蠟燭もなかったが、また灯をつけようという考えも起こらなかった。いったい彼は、その時何かのことについて考えていたのかどうか、それすらどうも思い出せなかった。遂に彼はまた、先刻と同じ熱と悪寒とを感じた。そして、今は長椅子の上に寝ることも出来るのだということを、この上なく嬉しく思った。間もなく、重い鉛のような睡りが、まるで彼を押し潰すように襲いかかつて来た。

一、ナスターシヤとの対話

彼は、普段になく長いこと、夢も見ないで熟睡した。翌朝十時、彼の部屋へはいつて来たナスターシヤは、やつとのこと彼を揺り起こした。彼女は彼にお茶とパンとを持って来たのだ。お茶は例の通り出がらして、またしても彼女の急須に入れてあつた。

「……まあずいぶんよく寝るわねえ！」と、彼女は憤慨して叫んだ。「……このひとはしょっちゅう寝てばかりしているじゃないの！」すると、彼はやつとのこと身を起こした。頭がずきずき痛んだ。彼は立ち上がろうとしたが、ぐるりと一つ身をねじっただけで、再び長椅子の上へ倒れてしまった。「……また寝るの！」と、ナスターシヤは叫んだ。

「……あんた病気なの、え？」と聞くと、彼は何とも答えなかった。「……お茶はほしくないの？」と聞くと、「……あとで」と、彼は再び眼を閉じて、壁の方へ向きながら、やつとのことと言った。ナスターシヤは彼を見おろしながら、しばらくそこに立っていた。

そして、「……ほんとうにどこか悪いのかも知れないよ」と、彼女はこう言うと、くる

りと向きを変えて出て行った。——彼女はまた二時に、スープを持ってはいって来た。彼は前の通りに寝ていた。お茶は手つかずに残っていた。ナスターシヤはどうとうむつとして、意地になつて彼を揺さぶり始めた。「……何だつて寝ぐさつてるのよ！」と、忌々しげに彼をにらみながら、彼女は叫んだ。彼は起きあがつて座つたが、彼女には口も利かないで、じつと床を見つめていた。「……どこか悪いの、悪くないの？」と、ナスターシヤは聞いたが、また何の返事も得られなかった。「……ちよつと外へ出てみたらどう」と、しばらく黙つていてから、彼女は言った。「……少し風に吹かれて来るといいのよ。何か食べないの、え？」と聞くと、「……あとで」と、弱々しい声で彼は言った。そして、「……もう行つてくれ！」と手を振つた。彼女はなおしばらく立つたまま、気の毒そうに彼を眺めていたが、とうとう出て行つた。それから数分の後、彼は目を上げて、長いことお茶とスープを見つめていた。やがてパンをとり、さじをとつて、食事にかかった。

二十、老婆殺しの準備と決行と二人の来客

彼は、食欲もなく、ほんの三さじか四さじを機械的に食べた。頭痛は少しうすらいだ。食事を終えると、彼は再び長椅子の上へ身を伸ばしたが、もう眠ることは出来ないで、うつぶせに枕に顔を押しつけ、身動きもしないでじつとしていた。彼にはたえず幻が見えた。それがみな実に奇怪な幻であつた——わけてもたびたび彼の前に現われたのは、彼がアフリカのどこか、エジプトあたりのオアシスみたいな所にいる夢だつた。隊商が休んでいて、駱駝がおとなしく寝そべっている。あたりには椰子の木がびっしりと丸くなつて茂っている。みんなは食事をしているのに、彼はそばをさらさらと流れている小川に口をつけて、絶えず水をがぶがぶ飲んでゐた。何とも言えないほど涼しく、そして、すばらしいコバルト色した冷たい水は、色さまざまな石や、金をちりばめた清らかな砂の上をさらさらと走っている。……ふいに、時計の打つ音がはつきりと聞えた。彼は身ぶるいしてわれに返り、頭をもたげながら窓の方を見て時刻を考えると、すっかり正氣づいて、急にさつとはね起きた。まるで誰かが長椅子からひつぺがしでもしたように。爪先立ちで戸口へ近づき、ドアをそつと開けて、下の階段の方へ耳を澄ました。彼の心臓はどきどき激しく鼓動した。しかし階段は、寝静まつたように、しんとしていた……。彼には、自分が昨日からこんなにかうかかと睡つてしまつて、未だに何もせず、何の準備もしないでいられたのが、不思議な、途方もないことのように思われた。だのに、今打つたのは、もう六時だつたかも知れない。こう思うと急に、突拍子もない熱病やみのような、妙にあわたましい活動性が、睡気と朦朧とした気分になつて彼をつかんだ。準備と言つても大したことはない。彼は、考える上にも考えて、万事手落ちのないようにと、全力を傾倒した。が、心臓は絶えずどきどきして、息をするのも苦しいほどだつた。まず第一に輪をつくつて、それを外套に縫いつけなければならなかつた。——これは一分間の作業である。彼は枕の下へ手を差し入れて、その下に押し込んであるものの中から、すつかりぼろぼろになつた、洗濯もしてない古いシャツを一枚引きずり出した。そのぼろから幅一寸、長さ八寸ぐらいの紐を裂きとつた。そしてその紐を二重に合わせ、着ていた幅の広い、丈夫な、分厚な木綿の夏外套（彼の唯一の外套）を脱ぐと、その内側の左脇下へ紐の両端を縫いつけにかかつた。彼の手は、縫いながらもぶるぶる震えたが、彼はやつと自分を抑えて、再び外套を

着込んだ時には、そこからは何も見えないようにすることができた。針と糸とは、すでにずっと前から彼の手許に用意されて、紙に包まれて小机の中心にころがっていたのである。が、輪の方はどうかと言え、それは非常に巧妙な彼自身の思いつきで——斧のために工夫されたものであった。まさか斧をぶらさげて町中を通るわけにはいかなかったからであり、と言つて、外套の下へ隠すにしても、やはり手で押さえて行かなければならないとすれば、どうしても人目に立ちやすい。ところが、今はこの輪があるから、それへ斧の刃を差し込みさえすれば、斧は、内側の脇の下に、途中ずっと安全にぶらさがっているわけだ。それに、手を外套の脇ポケットへ突っ込んでいけば、斧が振れないように柄のはしを抑えることも出来る。それは外套がまるで袋のようにだぶだぶだったからであり、彼がポケットの中で何かを抑えていることは、外側からは少しも気づかれることもないのだ。この輪のことも、彼はやはりもう二週間も前に考えついていたのである。

それをすまずと、彼は指を、例の「トルコ式」長椅子と床板との間の小さな裂け目へ突っ込んで、左の隅の方をさぐり、これもよほど前に用意しておいた質草を取り出した。その質草は、しかし、決してほんとうの質草ではなく、ただ、銀の巻煙草入りがちょうどこれくらいと思われるほどの大きさと厚さに滑らかに削られた板切れに過ぎなかった。彼はこの板切れを偶然に近くの横町のとある裏庭の、何かちよつとした工場になつていた離れの中で見つけたのである。それから彼はその板へ、やはりこれもその時町で見つけた、すべすべした薄い鉄片——たぶん何かの切れっ端だろう——を重ねた。鉄片のほうが板より少し小さかったが、彼はその二つを一つに合わせて、糸でしっかりと十文字にしぼった。そして、それから念入りにきれいな白い紙で体裁よく包んで、解くのに少しでも余計な手間がかかるように結えた。これは、老婆が結び目を解こうとする時に、しばらく彼女の注意をその方へそらせておき、その間に隙を狙うためであった。鉄の板ぎれは、老婆がたとえ最初だけでも、「品物」が木だと気づかないよう、目方をつけるために加えたのである。こうしたすべてのものは、時期の来るまで、長椅子の下に隠されていたのであった。彼がその質草を取り出したとたんに、ふと、どこか庭のほうで誰かの叫び声が聞こえた。それは、「……六時はもうとうに過ぎたぜ!」「……とうに! そいつあ大変だ!」というものであった。

一、準備を整え、外へと出る

彼は戸口へ駆け寄つて、聞き耳を立ててから、帽子をつかんで、猫みたいに用心深く足音を忍ばせて、いつもの十三段の階段を下へおり始めた。最も肝腎なこと——台所から斧を盗み出すことが、まだ目の前にさし迫っていた。仕事は斧でなければならぬということ、もうずっと前から決めていたのである。彼はほかにまだ折り込み式になっている庭師用のナイフを持っていたが、ナイフには、ことに自分の力に望みが置けなかつたので、結局斧ということに決めたのである。なおついでに、この事件で彼がとつたすべての最終的決心について、ある特殊な点を指摘しておこう。彼の決心は一つの奇体な特質を持つていた。ほかでもない、計画が断固たる性質を帯びれば帯びるほど、彼の眼には、ますます醜悪な、ますます愚劣なものに映じるのであった。そして、限りなく悩ましい内的の闘争にもかかわらず、彼はこの間じゅう嘗てただの一瞬間も、自分の計画が実現し得るものとは、

信ずることが出来なかった。

だから、たとえ何かの偶然で、すべてが最後の一点まで解剖され、最終的に決定されて、もはや何の疑念も残らなくなつたとしても、——その時になつても彼はなお全計画を愚劣なこと、醜怪なこと、不可能なこととして、断念してしまつたかも知れない。けれど未解決の点と疑念とは、まだ山ほど残つていた。斧をどこで手に入れるかというようなこと、こんな些細は、少しも彼をわずらわさなかつた。これくらい容易なことはなかつたからである。というのは、ナスターシヤがよくうちをあけて、ことに夕方には、——隣り近所や、近くの小店などへ駆け出し、いつもドアをいっばいに開け放しにしておくからで、ただこのためだけに、おかみさんはよく彼女と喧嘩したくらいである。だから、時が来たらそつと台所へ入つて、うまく斧を持ち出し、それから一時間もして（万事がすつかり片づいてから）またこつそり入り込んで、元へもどしておくだけのことであつた。しかし、全然懸念がないでもなかつた。彼が一時間たつてそれをもどしに行くとは仮定して、もしその時ナスターシヤが帰つていたらどうだろう。もちろん知らん顔で通り過ぎて、彼女が再び出ていくまで待たねばならない。が、その間に斧のないことに気がついて、さがし出したり、わめき立ててもしたら——その時こそたちまち嫌疑だ、少なくとも嫌疑の端緒となる。

しかし、それはまだ些細なことだつた。彼はそんなことなど考えてみようともしなれば、またそんな余裕もなかつた。彼は主要な点だけを考へて、些細な点はすつかり確信のつく時まで、わきの方へのけておいたのである。ところが、その確信がつくということは、絶対に実現されそうもなかつた。少なくとも、彼自身にはそう思われた。例えば、彼は、いつかは自分が考へることよりも実際に身を起こして——平氣であそこへ出掛けて行くことがあろうとは、どうしても想像が出来なかつた。……現にこの頃試みた例の瀬踏み（すなわち、十分場所を見ておくために行なつた訪問）さえ、彼はただちよつとやつてみただけであり、全然真剣ではなく、いわば「……まあいいや、とにかくひとつ行つて、調べてみよう、空想だけじゃ仕方がない！」と、これくらいの氣持ちだつたのである。ところが、すぐさま我慢し切れなくなり、自分自身に対する堪え難い憤懣を心に抱きながら、愛想づかしの唾をぺつと吐いて、そのまま逃げ出してしまつたのである。もつとも問題の道徳的解釈という意味では、一切の分析はもう遂げられているはずであつた。彼の決疑力（疑つたり判断する力）は剃刀のように鋭くなつて、もはや自分自身の内部に意識的な駁論を見出すことは出来なかつた。けれど、いざという段になると、彼はただもう自分を信じることが出来なかつた。そして、何者かが彼を強制して、その方へ引つ張つていくように、奴隷じみた卑屈な態度で、あらゆる所に執拗に弁駁を求めながら、手さぐりで進んで行つた。（これは、ああでもないこうでもないという自問自答を無限に果てしなく繰り返してたのである）。ところが、（突然）ああして思いがけなく（決定的瞬間が）やつて来て、万事を即座に決定してしまつた最後の日は、ほとんど（本人の意志とは別に）機械的に彼に作用したのである。さながら何者かが彼の手をとつて、否応なしに、盲目的に、超自然的な力で、無理やりに引っぱつて行つたようなものであつた。まさしく彼は、着物のはしを機械の輪にはさまれて、じりじりと巻き込まれていくようなものであつた。

*

*

つまり、主人公（ラスコーリニコフ）は、もうひと月も、屋根裏に孤独閉じ籠もつては、夜も、昼も、外へ出ようともしななければ、働こうともせず、始終寝そべつてばかりして

て、勉強もしなければならぬのに、本は売り飛ばして、机の上のノートや手紙の上には、今でもほこりがたまっている。彼は、むしろ考えることが好きで、そして、終始考えていた。……その頃からである。あの『考え』（老婆殺し）が浮かんで来たのは。しかし、それはあくまでも彼の「頭の中」（或いは「心の中」）での「空想や妄想」であつて、実際に、「老婆殺し」など出来るはずがないと考えていたのである。

ところが、彼は、その日、自分は疲労困憊をしていて、一番近いまっすぐな路をとつて帰るのが何よりも得策だつた際に、何がゆえに、遠まわりをして何の用もない草市場を通つたのだろうか？ それは、まるで「運命」に導かれるように、わざわざ遠まわりをして草市場を通つたのは、夜九時頃であつたが、そこで、偶然にも老婆の義理の「妹」（リザヴェータ）を見かけることになる。その彼女が、草市場で商人夫婦と会話をしているのを、たまたま耳にして、「……彼は知つたのである。しかもふいに、偶然に、まったく思いがけなく知つたのである。あすの晩、きつちり七時に、あの老婆にとつて唯一の同居人である義理の「妹」（リザヴェータ）が、うちにいないということをし、しぜん老婆は、晩の七時には、一人きりでうちにいるだろうというのを……」。まさに「この瞬間」、すべてが決定づけられてしまつた。彼の「迷い」は、一瞬にして消えて、「……一切がふいに、絶望的に決定されてしまつたのである」。

それは、「……（突然）こうして思いがけなく（決定的瞬間が）やつて来て、万事を即座に決定してしまつた最後の日は、ほとんど（本人の意志とは別に）機械的に彼に作用したのである。さながら何者かが彼の手をとつて、否応なしに、盲目的に、超自然的な力で、無理やりに引っぱって行つたようなものであつた。まさしく彼は、着物のほしを機械の輪にはさまれて、じりじりと巻き込まれていくようなものであつた」のである。

二、一つの疑問

初めのうち——と言っても、もうかなり前のことであるが、——一つの疑問が彼の心を領していた。なぜ、ほとんどすべての犯罪は、ああも易々とかき出されて、真相を暴露してしまうのだろうか？ なぜほとんどすべての犯罪者の罪跡（犯罪の証拠となる痕跡）は、ああも明瞭に残つてしまうのだろうか？ そして彼は次第に、多種多様な興味ある結論に到達した。彼の意見によると、その最も主要な原因は、犯罪を隠蔽する物的不可能の中にあるのではなくて、むしろ犯罪者自身の中にあることにあるのである。何となれば、犯罪者自身がほとんど一人の例外もなく、犯罪の瞬間には、意志と理性の喪失とも言うべき状態に陥り、その代わりに、子供じみた異常な小心浅慮（浅い考え）のとりことなるからである。しかも、理性と細心を最も必要とする瞬間にである。彼の信ずるところによると、この理性の混乱と意志の喪失は、病魔のごとく人を襲つて、次第次第に力を増し、犯罪の遂行の直前に極度に達する。そして、そのままの状態で行の瞬間まで、なお人によつては、犯罪後もしばらく継続する。けれどいつさいの病気が癒えると同じように、やがてその状態も過ぎてしまう。そこで、病気が犯罪を生むのか、あるいは犯罪そのものが固有の特質として、常に病気に類した何物かを伴うのか？——という疑問については、彼もまだそこまでは自分に解決する力のないことを感じていた。

こうした結論に達したところで、彼は次のように断定した、今度の仕事をすることについて

自分には、こうした病的な変化は決して起こり得ないだろう。理性や意志も、計画実行の全時間を通じて明確に保たれるに違いない。それは、自分の企て事が——「犯罪ではない」という理由によるのである。もつとも、彼がこういう結論に到達した全過程はすべて省略することとする、それでもわれわれはちと先走りし過ぎているのだから。ただ一つ付記しておきたいのは、この仕事の実際上の、純然たる物質的の困難は、彼の頭の中では概して第二義的の役割しか勤めていなかった。「……なかに、これしきの困難などは、自分の意志と理性を完全に保持してさえいれば、仕事の詳細をあくまでこまかく研究して行くうちに、自然と征服されるに決まっている」。けれども、仕事はなかなか着手されそうもなかった。自分の最後の決心（それは、よし「老婆殺し」を執行しようという決心）を、彼は依然として信じていなかった（つまり「老婆殺し」など出来ないと思っていた）ので、いよいよ時が来た時には、すべてがまるで違ってしまった、何やら偶然な、ほとんど思いがけないようなことになってしまったのである。

*

*

つまり、彼は、自分の「知性や理性や意志」などの冷静かつ緻密な「完全なる働き」があれば、多くの問題は解決でき得るという、そういう未だ「観念の世界」に深く閉じ籠もっている状態であるが、しかし、現実のわれわれ「人間界」というのは、むしろ「意図的なもの」（知性や理性や意志的なもの）と「偶発的なもの」（その時々の実に様々な偶然的なもの）との極めて複雑かつ微妙なからみ合いから現実が生じるものであり、実に様々な偶然（偶発的なもの）が複雑かつ微妙にからみ合ってくれば、われわれの「知性や理性や意志」などであれこれ考えたり想像したりしたものとは全く違うようなことが、現実には幾らでも無限に生じて来るものである。（例えば、次の「斧の問題」にしても、また、金貸しの「老婆」だけではなく、その「妹」（リザヴェータ）まで殺害してしまうようなことも、まさにその「典型的な例」になっているのである。）

三、台所の斧が手に入らない

あるきわめて些細な一つの事情が、まだ階段をおり切らないうちに、彼をはたと当惑させた。いつものように開け放しになっていたおかみさんの台所の前までくると、彼はその方へ注意深く横目を投げて、ナスターシヤはいなくとも、おかみさん自身がそこにいないか、またよしいなくても、彼が斧を取りに入る時に、不意にのぞいたりしないように、彼女の居間に通ずるドアがよく閉まっているかどうかを、あらかじめ見さだめようとした。ところが、彼の驚きはどんなだったろう！ ふと見ると、その時に限ってナスターシヤは台所にいたばかりか、まだ何やら仕事をしているではないか！ 彼女は洗濯物を籠から出して綱にかけていたのである。彼を見ると、彼女は干しもの手をとめて、後ろを振り返り、彼の通り過ぎてしまうまで、じっと見送っていた。彼は目をそらし、何も気づかないふりをして、そのまま通り過ぎた。ああ、もう万事休した——斧は手に入らない！ 彼はがんとやられたような気がした。（これがまさに「頭の中」だけと現実との決定的な違いであり、現実には予期せぬ事（偶然）がどこまでもついてまわるのである。）

彼は、「……何だっておれは決めてたんだろう？」と門の方へおりて行きながら、そう考えた。「……何だっておれは、一人で決めていたんだろう。あいつが今頃はきつとうち

にいないだろうなんて？ なぜ、なぜ、なぜ、おれはそうと決めていたんだろう？」と、彼は粉みじんに叩きつぶされ、踏みにじられたような気がした。彼は腹立ちまぎれに、自分で自分を冷笑したかった……鈍い野獣のような憤怒が、胸の中で煮えたぎった。

彼は思案に暮れながら、門の下に立ち止まった。ちよつと散歩という見せかけで町へ出て行くのもいやだったが、うちへ引き返すのはなおさらいやだった。「……ああ、あたら機会を永遠に逸した！」と、彼は何のあてもなく門の下に（これもやはり開け放しになっていた）暗い門番小屋の腰かけの右手下の真つ正面に突つ立ったまま、こう呟いた。急に、彼はぶるつと身ぶるいした。何やらびかりと眼を射たものがあつたのである……。彼は周囲を見まわした。——誰もいない。彼は爪先立ちで小屋へ近づき、段々を二段おりて、弱い声で門番を呼んだ。「……やはりいないんだ！ しかし、戸が開け放してあるところをみると、中庭のどこか近くにいるんだろう」が、彼はしやにむに斧へ飛びついた（それはまさに斧だつたのである）。そして腰かけの下から、二本の薪の間にころがつていたのを引き出すと、外へ出ないうちにすぐその場で、例の輪にしつかりとひっかけ、両手をボケツトへ突つ込んで門番小屋を出た。誰もそれには気づかなかつたようである。「……（これは）理性じゃない、悪魔の仕業だ！」と、奇妙な薄笑いを浮かべながら、彼はそう考えた。このことがこの偶然、彼をいぢるしく元気づけた。（これは、最初の偶然で失望し、次の偶然で元気づく。われわれ「人間界」は、まさに「意図的なもの」と「偶然的なもの」との極めて複雑かつ微妙なからみ合いから形成されているのである。）

彼は静かに、落ちつき澄まして、どんな嫌疑をまかけられないように、ゆうゆうと歩いて行った。彼はあまり通行人の方を見なかつた。いや、人の顔は全然見ないように、できるだけ人目に立たないようにと努めた。と、急に帽子のことが思い出された。「……しまった！ 一昨日なら金があつたのに、学生帽を買うのをすっかり忘れた！」と、呪いの言葉が思わず胸をついて出た。

四、通りを歩きながら自由な空想にふける

彼はふと、とある店屋の中をのぞいて見て、その柱時計がもう七時十分になっているのを見た。急がなければならぬ。しかも同時に、まわり道もしなければならぬ。——ぐるりとまわって、反対側から当の家へ近づくためである……。

これより以前、彼がまだこんなことを想像してただけの頃には、いざとなつたらきつとひどく気おくれするだろうと考えたものだった。ところが、今彼はあまり恐怖を感じなかつた。いや、むしろ全然感じないくらいであった。この瞬間に彼の心を占めたのは、かつて全然関係のない別な想念であつたりした。もつともそれもほんのちよつとの間ではあつたが、ユスポフ公園のそばを通りかかつた時には、彼はあらゆる広場広場に高い噴水を設けたら、どんなに空気をさわやかにすることかを考えて、その着想に没頭しかけたくらいである。それから、彼は夏の園をマルソ才原一帯に拡張した上、ミハイロフスキイ帝室遊園地と合併でもしようものなら、街のためにきわめて立派な、きわめて有益なことだろうというような核心へ、次第次第に移つて行つた。その時ふと、すべて大きな都会では、人間が単に必要に迫られるばかりでなく、特に何かの理由によつて、公園もなければ噴水もない、汚濁や、悪臭や、その他あらゆる醜悪事に満ちたところに好んで住んだり、移つ

たりする傾向のあるのはどうか、という問題に興味をいだき始めた。すると、いつも好んで草市場を歩きまわる自分自身の散歩が思い出されて、ちよつとの間われに返つた。「……何だ愚にもつかないことを」と彼は考えた。「……いや、これはもう何も考えない方がいい！」と思うのであった。

そして、「……きつと、刑にひかれて行く者もこんなふうには、途中で出会うすべてのものに心を奪われるに違いない」。(これは本人の経験からでもあるのだろう)。こういう考えが、突如として彼の頭にひらめいたが、しかしそれは、稲妻のようにただひらめいただけで、彼は自分で急いでこの考えを打ち消した。だが、もう間近だ、もうその家だ。門口だ。どこかでふいに時計が一つ打った。「……何だ、あれは、もう七時半だろうか？ そんなはずはない、きつと進んでるんだ！」(本来なら、七時までに到着しているべきであったが、出発をはじめ、斧や遠回りその他などでのこの「三十分」の遅れが、或いは「リザヴェータ」と運悪く遭遇してしまう一つの要因になっているのかも知れない。)

ありがたいことに、この門もまた無事に通れた。そればかりか、まるであつらえたように、ちよつどの時山のように枯れ草を積んだ大きな車が門へかかったところで、彼が門の下を通り抜ける間、十分に彼を隠してくれた。そして、車が門から庭へはいると同時に、彼はすつと右の方へすべり込んだ。車の向こう側では数人の声が、叫んだり言い争ったりしているのが聞えたが、誰一人彼に気のないものはなかったし、また誰にも出会わなかった。この大きな四角な中庭に面した多くの窓々は、おりしも開け放されてあつたが、彼は頭も上げなかった。——その力がなかったのである。老婆の住居へ行く階段は、門からすぐ右手にあつた。彼はもう階段へかかつていた……。

彼は、ほつと息をつきながら、どきどきする心臓を片手で押さえ、そこでもう一度斧にさわつてみてその位置を直すと、彼は用心深く、たえず耳をそば立てながら、静かに階段をあがつて行つた。ところが、この時には階段もすつかりがらんとしていて、ドアというドアはみな閉まり、人には一人も出くわさなかった。ただ、二階に一軒あき住居があつて、ドアを一ぱいに開け広げた中でペンキ屋が仕事をしていたが、その連中も彼を見はしなかった。彼は立ち止まって、ちよつと考えてから、先へ進んだ。「……もちろん、ここにあいつらがまるきりいなかったら、一層都合良かったんだが、しかし、まだ上に二階あるんだからな」と思うのであった。(ここにペンキ屋が何気なく登場するが、これはこれからの「物語」《ストーリー》の展開には大事な存在になるのである。)

五、老婆の戸口に立つ

さて、やがてもう四階である。早くも戸口まで来た。向かい合わせのアパートであるが、それは空き家になっている。三階でも老婆の住まいの真下に当たるアパートは、すべての様子からもやはり空き家らしかった。——戸口へ釘づけにされていた名刺がとれていたから、引越したのに違いない……。彼は息がつまって来た。「……いつそ帰つてしまおうか？」と、こういう考えが一瞬間彼の脳裡をかすめた。しかし、彼はそれには答えを与えないで、老婆の住まいの気配に聴き入り始めた。死のような静けさだ。それから、彼は再び階段の下に耳を澄ました。長い間、注意深く聞き耳を立てた。やがて最後にもう一度あたりを見直して、心を引きしめ、身づくろいして、改めて輪にかけた斧に手をやってみた。

「……蒼くなつてやしないかな、おれは……ひどく?」、こう彼は考えた。「……あまり興奮し過ぎてやしないかな? あいつは疑うたぐり深いからな、もう少し待ったほうがよくはないかな、せめて動悸の鎮まるまで……」と思うのであった。

しかし、動悸はなかなか鎮まらなかった。それどころか、まるでわざとのように、さらにさらにと激しくなつて行つた。彼は我慢がきれなくなつて、ゆるゆると呼鈴よびりんの方へ手をのびして、がらがらと鳴らした。三十秒ばかり経たつて、また鳴らした、今度は少し強めに、だが、答えはなかった。むやみに鳴らしても仕方がないし、それに、彼には似合にわわしくないことである。老婆はむろんうちにいるのだが、彼女は用心深い上に、今は一人きりである。彼も多少は彼女のくせを心得ていた。そこで、もう一度ひとと耳をドアに押しあてた。彼の感覚がする鋭く研ぎ澄まされていたのか(そうと想像することは概して困難ではあるが)或いは実際によく聞えたのか、とにかく彼は錠前のハンドルに用心深く触れる手のかさかさという音と、ドアに当たるきぬずれの音らしいものを聴きわけた。誰かがそつと錠前のすぐそばに立つて、彼がこちら側でしていると同じように、中からもドアに耳をあてて、息を殺して様子をうかがっているらしく思われた。

彼はわざとこそそ身動きして、隠れているなどとは思われぬように、何やら大きな声でひとり言を言った。やがて彼は三度目の呼鈴よびりんを、しかし静かにしっかりと、あらゆる焦慮しょうりょ(焦りや苛立ち)を抑えて鳴らした。後日このことを思い出してみると、この瞬間のことは、彼の心の中に永久にはつきりとあざやかに刻みつけられていた。あの、思考力が時々瞬間的に雲つて、自分の肉体さえ感じられないでいた時に、これほどのわる智慧がいつどこから得られたのか、われながら判断がつかなかった……。やがて、門かどをぬく音が聞えた。

六、老婆との対話

ドアは、いつかのように、ごく細目に開かれて、この時も、鋭いうさん臭におそうな二つの眼が、闇の中からじつと彼にそそがれた。とたんに、ラスコーリニコフはまごついて、危うく重大な過ちをしでかすところだった。

彼は、老婆がほかに人のいないのを見て怖おじけるだろうという懸念もあり、また自分の身かけが彼女を安心させるといふ自信もなかった。ドアに手をかけると、老婆がまたそれを閉めようと考えないように、自分の方へぐいと引いた。老婆はそれを見ても、ドアを引き戻そうとはしなかったが、錠前のハンドルは放さなかったので、彼は殆どドアと一緒に老婆を階段口まで引き出しそうになつてしまった。それでも老婆が戸口に立ちほだかつて、彼を通すまいとする様子を見て、彼はまっすぐ老婆の方へ進んで行つた。彼女は驚いて飛びのきながら、何か言いたそうにしたが、どうしてか声が出ず、眼をいっぱいに見開いて彼を見つめた。

「……今晩は、アリオーナ・イワーノヴナ」と、彼はできるだけ砕けた口調で口を切つたが、声はいうことをきかないで、途切れたり、震えたりした。「……僕はあんたんとこへ……品物を持つて来たんですよ……どうです、あつちへ行きませんか……明るい方へ……」と、こう言つて、彼は、彼女には眼もくれないで、許しも待たずにさつさと部屋の中へ通つた。老婆は彼のあとから駈け出した。彼女の舌はやつとほぐれた。「……まあ、何

ですわね、あんたは？……いったい誰さ？　そして何の御用ですわね？」と聞くので、「……これは驚いた、アリヨナ・イワーノヴナ……もうご存じの……ラスコーリニコフじゃないですか。ほら、こないだお約束しといた質しちを持って来たんですよ……」と、こう言つて彼は、彼女の前へ質草を差し出した。

老婆はちらとその方へ眼をやったが、すぐまた、招かざる客の眼にひたと見入った。彼女はじろじろと意地わるく、うさん臭そうに彼を眺めた。一分ばかり過ぎた。彼には、彼女の眼の中に、もう一切を見透してしまつたような、何か嘲笑に似たものがひらめいたような気さえた。彼は、自分がひどくあわくつているのを感じた。すっかり恐ろしくなつて来た。もし彼女がこんなふうにもう三十秒も口を利かずにじつと彼を見つめていたら、彼は恐らく、自分の方から逃げ出したらうと思われたほど、恐ろしくなつて来た。

「……何だつてそんなに見るんです、まるで僕に見覚えがないように？」と、彼は急にむつとした調子で言い出した。「……よかつたらとつて下さい、いけないなら——ほかへ行きます、急いでいるんだから」と、まさかこんなことを言うつもりもなかったのだが、ひとりでにふいと口へ出てしまつたのである。

老婆はわれに返った。客のはっきりした口調が、どうやら彼女を安心させたのである。「……だつてお前さん、あんまりだし抜けなんだね……何だねこれは？」と、彼女は質草のほうを見ながら、たずねた。「……銀の巻煙草タバコ入れですよ。この前話しておいたじやありませんか」と言つと、彼女は手をのぼした。「……それはそうとお前さん、何とわるい顔色をしているんだね？　これ、こんなに手も震えてるし！　何かびつくりでもしたのかね、え！」と聞くと、「……熱があるんですよ」と、彼はとぎれとぎれに答えた、「……いやでも蒼くならずにはいられないさ……何にも食うものがなけりやあね」と彼は、やつと言葉を出しながら言い足した。——またしても氣力が彼を見捨てたのだつた。しかしこの返事は、いかにもまことしやかに聞えた。老婆は質草を手にとつた。「……何だね、こりゃ？」と、彼女はたずねた。もう一度じつとラスコーリニコフを見て、手で質草の目をひきながら。「……ちよつとしたもの……巻煙草タバコ入れさ……銀のね……まあ見て下さいよ」と言うのであつた。

七、老婆殺し

老婆は、「……どうも何だか銀らしくないがね……また、恐ろしく結ゆわえたもんだねえ」と、その紐ひもを解こうとして、彼女は窓の方へ、あかりの方へ振り向いた。（この蒸し暑いのに、窓は全部しめ切つてあつたのである）。彼女は数分間、まったく彼から眼をはなして、彼に背を向けて立つた。彼は外套のボタンをはずし、斧おのを輪からはずしたが、まだすっかり抜き出しはしないで、外套の下で右手でささえていた。が、その手は恐ろしく力抜けがして、一瞬ひとひなごとに萎なえこわばつていくのが自分でもわかつた。彼は、斧おのを取りはずして、落しはしまいかと恐れた。たちまち彼は、頭がぐらぐらとなるのを感じた。「……まあ、何だつてこんなに絡からみ付けたもんだらうね！」と、老婆は忌々いまいましげにこう言つて、彼の方へとその身を捻ひねりかけた。……

もう一瞬の猶予もならなかつた。彼は斧おのをすっかり抜き出すと、それを両手で振り上げて、本人ははっきりとした意識もなく、ほとんど力を入れず、ほとんど機械的に、斧おのの背

(峰)の方を下にして頭の上へ打ちおろした。その時、力というものはまるでないようであつた。が、一度斧を打ちおろすやいなや、たちまち彼の身内には力が生じて来た。

老婆は、いつものように素頭だつた。白髪まじりのまぼらの薄色の髪は、例の通りこてと油がぬられていて、鼠の尻尾のように編まれ、角櫛に巻かれて、うしろ頭に突つ立っていた。打撃は脳天へ加えられたが、それは彼女の背が低かつたからであつた。彼女はあつと声を上げたが、それはしかし、極めて弱い声だつた。そして、両手を頭まで上げるには上げたが、すぐぐたぐたと床の上へ崩れおれた。でも彼女は、片手にまだ質草を持つていた。そこで彼は力まかせに、一度、二度斧の峰のほうばかりで、脳天めがけて打ち続けた。血は、コップをぶちまけたようにほとばしり、からだは仰向けにどうと倒れた。彼は一步身を引いて、倒れさせると、すぐ老婆の顔の上へかがみ込んだ。彼女はもう死んでいた。眼は今にも飛び出しそうにむき出され、額と顔全体は皺だらけになつて、いかにも酷く引きつっていた。(この「斧の峰」で殴打したのは、最初からの計画通りであり、それはやはり浴びる血しぶきをなるべく少なくするためでもあつたのだろう。)

彼は斧を死骸のそばの床に置き、流れる血で汚れないように気をつけながら、いきなり彼女のポケットに手を突っ込んだ。この前、彼女が鍵を取り出したあの右のポケットへ……彼の理性は今完全に働いて、もはや昏迷も眩暈も感じなかつた。手はなお依然として震え続けた。彼は後になつてから、この時の自分が非常に注意深く、細心をきめわて、たえず身を汚さないように気をつけていたことを思い起こした。……鍵はすぐ取り出した。全部あの時のように鋼の輪に通して、一まとめになつていた。彼はそれを持つてすぐ寝室へ駆け込んだ。それは聖像を祭つた大きな厨子のある、いたつて小さな部屋であつた。

一方の壁際には、絹の小切れをはぎ合わせてつくつた綿入り蒲団のかかつている、大型な、見るからにさつぱりした寝台が据えてあつた。今一方の壁際には筆筒があつた。不思議なことに、彼が鍵を筆筒に合わせかけて、そのがちやがちや鳴る音を聞くやいなや、瘻瘻が彼の身内を走つたような気がした。彼は急にまたしても、すべてを放擲して逃げ出さなくなつた。が、それもほんの一瞬間のことだつた。逃げ出すにはもう遅かつた。そして彼は、突如として別の不安な考えが脳裡にひらめいた時には、自分を嘲るように、にやりと笑つたくらいだつた。ひよつとしたら老婆がまだ生きていて、再び正気づくかも知れないという気がふいとしたのである。鍵と筆筒とを打つちやつて、彼は元へ、死骸の方へ駆け戻ると、斧をつかんで、もう一度老婆の上へ振りかざしたが、打ちおろしはしなかつた。老婆の死んでいることはもう疑いなかつた。近々とかがみ込んで、もう一度仔細に老婆をあらためて見ると、頭蓋骨が粉碎されて、おまけに少し脇の方へずつていのがはつきりと見分けられた。彼は指で触れて見ようとしたが、すぐ手を引つ込めた。そんな事をするまでもなく、一見明白であつた。その間に血はいつかもう大きな溜りになつていた。ふと彼は老婆の首に紐がかかつているのに気づき、ぐつと引っぱつてみたが、紐が丈夫でなかなかちぎれなかつた。おまけに血でべとべとしていた。そこで、そのまま懐から引っぱつてみたが、何かが邪魔をして引つかかる。彼はじれつたくなって再び斧を振り上げ、死骸の上でひと思いに紐を切り離そうとしたが、そうする勇氣もなく、二分間ばかりごそごそした後、死骸には斧を当てず、手と斧とを汚しただけで、やつと紐を切り放して取り出した。彼の想像は誤らなかつた。——それは財布であつた。紐には木製と銅製の十字架が二つと、ほかにエメラル製の聖像がついていた。そして、それらと一緒に、鋼のふちと

小さな環わのついている羚羊皮かもしかがわの、脂あぶらじみた小さな財布さいふが下げてあった。財布はぎつしりつまっていた。ラスコーリニコフは調べもしないで、それをポケットへねじこみ、十字架を老婆の胸へ投げつけると、今度は斧おのを引つつかんで、寝室の方へと駆け戻った。

*

*

彼はやたらにせかせかして、鍵をつかむといきなり、またもやいじり回しにかかったが、なぜかどれもうまくいかない——鍵が錠前の穴に填はまらなかった。手がそれほど震えていなくても、のべつ間違えてばかりいた。それは、鍵が違って合わないのを見ながら（入れ方が悪いと思つて）やはりそれを押し込んでいくという風であった。そのうちに彼はふと気がついて、この大きな鍵は——ほかの小さいのにまじつてぶらぶらしている、先に歯形ギザギザのついたこの大きな鍵は、確かに筆筒たんすではなくて、（これは前の時にも彼の頭に浮かんだことなのだが）きつとほかの長持類ながもち（靴類トラシク）の鍵に違ちがいがない。そして、その長持ながもち（靴トラシク）の中にこそ、すべて何でも入っているに違ちがいがないと思いつくのである。

そこで、彼は筆筒たんすを捨てて、すぐさま寝台の下へ這い込んだ。年寄りというものは、靴トラシクなどはたいてい寝台の下へ入れて置くのを知っていたからだ。すると、果たして——そこには、長さ一アルシ以上もある、中高なかたかの蓋ふたのついた、赤いモロッコ革張りの、鋼鉄の鉞びようの一面に打つてある、かなり立派なトランクが置いてあった。歯形ギザギザのついた鍵がぴったりと合つて、すぐ開いた。上の方には、白いシーツの下に、赤い飾りの付いた兎の毛皮外套が入っていた。その下には絹の着物、そのまた下には肩掛け、それから底うらのほうには、ただぼる切ればかりが詰まっているように見えた。彼はまず、自分の血よに汚よごれた手を、外套の表で拭こうとしかけた。「……赤、うん、赤の上なら血も目立つまい」と彼は考えたが、急にわれに返った。「……ああ！ おれは気でも違うんじゃないか？」と、思わずぎよつとしてそう考えた。（これは、現場げんじょうにわざわざ証拠しんこを残すことにもなりかねない。）

けれど、彼がごみごみしたばる切れをほんの少し動かすと、ふいに毛皮の外套の下から、金時計がすべり出た。彼はいきなり中を引っくり返しにかかった。実際、ぼる切れの間には、いろんな金属品が入れ合せてあった——多分たぶんみな質物しちの流れたのやまだ期間前のもなのだろう——腕輪、鎖、耳環、ピンなどと言つたたぐいであつた。あるものはサックに入れてあり、あるものはじかに新聞紙に包まれていたが、しかし几帳面に、綿密に、紙は二重になつていて、くるくると紐ひもがかけてあつた。彼は一刻も猶予せず、包み紙やサックをあけても見ないで、それらをズボンと外套の両ポケットへつめ込み始めた。が、そうたくさん取り込む暇はなかつた……。

ふいに老婆の倒れている部屋で、人の歩く音が聞こえた。彼は手を止めて、死人のように息をひそめた。しかしあたりはひっそりとしていた。してみると、空耳うつろだったかも知れない。ふいに微かな叫び声なげきが、というよりも、誰かが低く切れ切れに呻うないて、すぐ黙つたような気配が、はつきりと聞こえた。それからまた、死のような静寂が一、二分続いた。彼はトランクの傍そばにうずくまり、息を殺して待っていたが、急に飛びあがると、斧おのをつかんで、寝室から駆け出した。

八、リザヴェータの殺害

部屋のまん中にはリザヴェータが、手に大きな包みを持ったまま棒立ちになり、全身麻

痺したように、殺された姉を眺めていた。布のように真白になって、叫ぶ力もないらしかった。躍り出てきた彼を見ると、彼女は木の葉のように小刻みに震え出し、痙攣がその顔一面に走った。彼女は片手を少し上げて、口を開こうとしたが、それでもやはり声は出なかった。ひたと真正面に彼を見ながら、のろのろと後ずさりして隅の方へさがり出したが、叫ぼうにも空気が足りないように、声は少しも立てなかった。彼は、斧を持って躍りかかった——彼女の唇は、さも情けなさそうにゆがんで、あたかもごく小さな子供が何かおびえかけた時に、その恐ろしいものをじつと見つめながら、今にも泣き出しそうにするのと、同じような具合であった。その上、この不幸なりザヴェータは、お人よしで、すっかり虐げられて、意気地もなくなっていたので、手をあげて自分の顔を防ごうともしなかった。斧は彼女の顔の真上へ振り上げられたのだから、この瞬間にはそうすることが、最も必要かつ自然な動作だったにもかかわらず、彼女はただあいている右手を、ほんの心持差し上げたが、それも顔よりずつと下の方であった。そして、彼を押しつけようとでもするように、のろのろと彼の方へ突き出した。打撃は、斧の刃の方がまっすぐ頭蓋骨へ突っ立って、立ちどころに額の上部を完全に、ほとんどこめかみまで打ち割った。彼女はそのままどろりと倒れた。ラスコーリニコフは、ひどくまごついてしまい、やにわに彼女の包みを引つつかんだが、またそれを投げ出して、入り口の方へと駆け出した。(本文)

さて、老婆殺しは、まさに「意図的なもの」(計画されたもの)であり、その老婆の「殺し方」は、斧の峰で頭部を数回叩くものであるが、彼女の背が低かったので、打撃は脳天へと加えられた。一方、リザヴェータの場合は、まさに「偶発的なもの」(全くの偶然的なもの)であり、それゆえ、気が動転して、本来なら「斧の峰」で叩くところを無意識に「斧の刃」の方で叩いてしまった。そして、彼女は背が高いので、脳天ではなく、額の上部を完全にほとんどこめかみまで打ち割ってしまった。作者(ドストエフスキー)は、この「意図的なもの」と「偶発的なもの」とをはっきりと書き分けているのである。

さて、ラスコーリニコフは、ひどくまごついてしまい、やにわに彼女の包みを引つつかんだが、またそれを投げ出して、入り口の方へと駆け出した。恐怖の念は刻々に強まり、わけてもこのまったく予期しなかつた二回目の凶行後は、一層強く彼をつかんだ。彼は、一刻も早くここを逃げ出したいと思った。もしも彼がこの瞬間に、より正確に見、かつ判断することが出来たら——目下の状態の、絶望と、醜悪さと、愚劣さを思い合わせることは出来たら——また、ここを逃れ出てから家へ着くまでには、なおこの上どれ程の困難に打ち勝ち、場合によっては、悪事さえ遂行せねばならぬということ想像できたら、彼は何もかもうつちやって、すぐさま自首に出かけたに違いない。それもわが身を思う恐怖からではなく、ただ自分の行為に対する恐怖と嫌悪のためばかりである。わけても嫌悪の情がこみ上げて来て、彼の心中に一刻一刻成長するのであった。今ではもう、たとえどんなことがあっても、靴のそばはおろか、あの部屋へすら引返して行く勇氣はなかった。

けれども、一種の放心状態というか、物想いというか、そうしたものが、次第に彼を鎮めていった。そして、彼はともすればわれを忘れて、というよりはむしろ肝腎なことを忘れて、瑣末なことにかかずらうのであった。そして、ふと台所をのぞいて、半分水のはいたバケツを腰掛の上に見つけた時、彼は自分の手と斧を洗うことに気がついた。彼の手

は血まみれであり、ねばねばしていた。彼は斧の刃の方をいきなり水へ突っ込んで、小窓の上に載っていたかけ皿から、石鹼のかけらをつかみ出し、じかにバケツの中で手を洗い始めた。手を洗い終わってから、彼は斧を引き出して、まず鉄の部分の洗い終わると、長いこと三分間もかかって、石鹼で血痕を落とそうと試みながら、血のこびりついた柄の部分の洗いにかかった。それから、台所いっぱい張り渡した綱に干してあった洗濯物で、きれいにふき取った上、長い間窓ぎわで注意深く斧を調べてみた。もう血の痕は残っていなかった、ただ柄がまだ湿っているばかりだ。彼は注意深く斧を外套の裏の輪にさした。それから、薄暗い台所の光の許す限り、外套やズボンや靴などを調べてみた。ちよつと外部から見たくらいでは、どうやら何もなさそうである。ただ、靴にはしみがついていた。彼はぼろを湿らせて、靴を拭いた。しかし、彼は自分ではよく見分けがつかない場合もあることを知っていたので、それは、自分では気がつかないけれど、人の眼にはすぐ気がつくようなものがあるかも知れない。彼はもの思いに沈みながら、部屋の真ん中に突っ立っていた。悩ましく暗澹たる想念が彼の心の中にわき起こった。——自分は気が狂いかけていて、この瞬間ものを判別することも、自分を守ることも出来ず、もしかすると、今自分のしていることは、まるで見当違いのことかも知れない。「……ああそうだ！ 逃げなくちゃならんだ。逃げなくちゃ！」と彼は呟いて、入口の方へと飛び出した。ところが、そこではまた、かつて経験したことのないような恐怖が、彼を待ち受けていた。

彼は棒立ちになつて見つめるだけで、自分の眼を信ずることが出来なかった——ドアが、入口の間から階段へ通じる外側のドアが、先刻彼がベルを鳴らして入ったそのドアが開いたままになつていて、手がゆっくりはいるほどの隙間をつくっていた。錠もおろさず、門もささずに、ずうつと、あの間ずうつと開いていたのだ。老婆はもしかしたら、用心のために錠をかけなかったのかも知れない。しかし、何ということだ！ 彼はそのあとでリザヴェータを見たではないか！ それをどうして、彼女がどこから入つて来たかということに気づかずいられたのだろうか？ まさか壁をくぐれるはずもないのに！ 彼はドアに駆け寄つて、門をさした。「……いや、そうじゃない、また見当違いなことをやっている！ おれは逃げなくちゃならんだ。逃げなくちゃ……」と、彼は門を外してドアを開けて、階段の様子をうかがい始めた。

長いこと、彼は聞き澄ましていた。どこか遠くずつと下の方で、たぶん門のあたりであろう、誰か二人の声が高いきんきんした調子で、わめいたり、言い争ったり、罵つたりしている。「……何をやつらは言ってるんだらう？……」と彼は辛抱強く待っていた。やがて、まるでずばりと断ち切つたように、何もかも一時に静まった。彼らは行ってしまつたのだ。彼はいよいよ出かけようと思つた、すると、ふいに一階下あたりで、階段へ向かつたドアが騒々しく開いて、そして誰やら何かの節を鼻歌風に歌いながら、下の方へおりて行き始めた。「……何だつてこんなにのべつ騒いでいやがるんだらう！」と、こういう考えがちらと彼の頭をかすめた。彼はまたしても後手にドアを閉めて、じつと待っていた。ついにすべては静まり返り、人の気配もしなくなつた。そこで、彼はもう階段へと一歩足を踏み出そうとしたとたん、またもやふいに新しく誰かの足音が聞こえた。

九、一人の訪問客が来る

今度の足音はよほど遠く、まだ階段のどつつきあたりで聞こえたけれど、彼はその時すぐはどうしたわけか、最初の響きを聞くと同時に、これは確かにここへ、四階へ——老婆の住まいへ来るのに違いがないという疑いを抱いた。彼はその後もこのことを非常にはつきりとよく覚えていた。それはなぜだろう？ 何かそれほど特殊な、意味ありげな足音でもあったのだろうか？ それは重々しい、規則正しい、ゆったりとした足音であった。ああ、もうその男は一階を通り過ぎた、ああ、また上がって来る、次第に次第にはつきりして来る！ 上がって来る男の重々しい息ぎれの声が聞えて出した。やがていよいよ三階へかかった……ここへ来るのだ！ すると、彼はにわかには化石にでもなったような思いであった。さながら夢で人が自分を殺そうと追っかけて来るのに、こちらは根が生えたようになって、身体を動かすことも出来ない、そういうったような感じであった。

いよいよ客がもう四階へ上がり始めた時、その時初めて、彼はふいにぶるぶると全身を震わせて、つるとすばしっこく入口の間へすべり込み、やっと後手でドアを閉めることが出来た。それから門をつかんで、そつと音のしないように、柄へ差し込んだ。本能が手伝ったのだ。これだけすつかりと済ませると、彼は息を殺して、ドアのすぐ傍に身をひそめた。知らない男もやはりすでに戸口に立っていた。彼等はいま互いに相対して立っているのだった。それは、ちやうど先ほど、彼が老婆とドアを隔てて向き合いながら、耳を澄ましていたのと同じように……。

客は幾度か大きな息をふつとついた。「……きつと太った大きな奴に違いない」と、ラスコリーニコフは手に斧を握りしめながら考えた。実際、何もかもがまるで夢のようであった。客は呼鈴の紐をつかんで激しく引き鳴らした。呼鈴のブリキめいた音が響き渡るやいなや、彼はふいに、部屋の中で何かが身動きでもしたような気配を感じた。数秒間、彼は真剣に耳を澄ました。誰とも知れぬ男はもう一度呼鈴を鳴らして、しばらく待ってみたが、急に我慢しきれなくなつたらしく、力まかせにドアのハンドルを引つ張り始めた。ラスコリーニコフは慄然として、柄の中でおどり回る門の錠を見つめながら、今にも門がはずれるかと、鈍い恐怖をいだいて待っていた。事実、それはありうべきことのように思われた。——それほど激しく引つ張ったのである。彼は手で門を押さえようかと思つたが、それではすぐその男に感づかれるだろう。彼は狼狽した。頭がまたぐらぐらしかけたような気持になつた。「……いまにおれは倒れるぞ！」とこんな考えが閃いたが、しかし、外の男が喋り出したので、彼はたちまちわれに返つた。

外の男は、「……一体こりやどうしたというのだ、奴ら寝てやがるか、それとも誰かに絞め殺されでもしたというのか？ 畜生め！」と、彼は樽の中から出て来るような声で怒鳴つた。「……おい、アリヨーナ・イワーノヴナ、鬼婆！ ほんとうに奴ら寝てやがるんか！」と言うのであった。そして癩癩紛れにまたしても、立て続けに十編ばかり、力いっぱい呼鈴を鳴らした。もちろんこの男は、この家では勢力のあるじつこんな男に違いない。

十、もう一人の訪問客

ちやうどその時、ふいにまた小刻みなせかせかとした足音が、ほど近い階段の上に聞こえた。また誰かがやって来るのだ。ラスコリーニコフは、初めのうちそれに気がつかなか

った。「……おや、誰もいないんですか？」と近寄ってきた男は、やはりまだ呼鈴よびりんを鳴らし続けている先客に向かつて、いきなり声高に快活な調子でこう話しかけた。「……こんにちは、コッホ君!」、「……声でみると、どうやらまだ若い男らしいぞ」と、ふいにラスコーリニコフは考えた。「……いや、何がなんだか訳が分からない。危うく錠前を壊すところだったよ」と、コッホは答えた。「……ところで、あなたはどのようにしてわたしをご存知ですか?」と聞くと、「……それは、ほら! 一昨日ハムブリヌースで球を突いて、続けざまに三度もあなたを負かしたじゃありませんか!」、「……ああ、なるほど」、「……で、二人とも留守なんですか? 変ですね。実に馬鹿げた話ですね。あの婆さんにどこに行く所があるんです! 僕は用があるんだがなあ」、「……いや、僕だって、君、用があるんですよ!」、「……だが、どうもしようがないですな、ひっ返しますかな? ええくそっ! 僕は金を手に入れるつもりでやって来たのに!」と若い男は叫んだ。

「……そりやむろん引つ返すよりほかはないが、だが、何だって時間まで決めやがったんだ! 鬼婆ばばあめ、自分で時間まで決めておきやがって、僕にはまわり道になるんですよ。いったいあいつにどこをほつき回る所があるんだ、わけがわからん。鬼婆ばばあめ、年じゅううちに座ったきり、足が痛むとかってくすぶってやがるくせに、今ごろ急に遊びに出るなんて!」、「……門番に聞いてみたらどうですかね?」、「何を?」、「……どこへ行ったか、そしていつ帰って来るか?」、「……フム……畜生……聞いてみるかね……だが、あの婆さんは決して出かけることなんかないんだがなあ……」と、彼はもう一度ドアのハンドルを引つ張った。「……ちえつ、仕方がない、行ってみるか!」と言うのであった。

すると、「……まあ、ちよつと!」と、急に若い方が叫んだ。「……ごらんなさい。引つ張るとドアが動くじゃありませんか?」、「で?」、「……つまり、ドアには錠がかかっているのではなくて、門かんぬきがさしてあるだけなんです。かけ金が掛かっているだけなんですよ! 聞いてごらんなさい、門かんぬきがことと言っているでしょう?」、「それで?」、「……おわかりにならないのですか、君? つまり二人のうちどっちかがうちにいるんですよ。もしみんな出て行ったのなら、外から鍵をかけるべきで、中から門かんぬきなんかさすわけがないじゃありませんか。ところがね——聞いてごらんなさい。門かんぬきがことと言っているでしょう? 中から門かんぬきをさすからには、うちにいなくちゃならんはずじゃありませんか、そうでしょう? してみると、家にいるくせに、開けやがらないんですよ!」、「……な——るほど! まったく仰せの通りだ!」と、驚いたようにコッホは言った。「……じゃ、あいつら内部なかで何してやがるんだ!」と、こう言つて、彼は猛然とドアを引つ張り始めた。

「……まあ、お待ちなさい」と、また若い方が叫んだ。「……引つ張るのはおよしなさい! きつと何か変わったことがあるんですよ……これほどあなたがベルを鳴らしたり引つ張ったりなさるのに——開けようとしなんでしょう、してみると、二人とも気絶でもしてるか、でなければ……」、「……なんですって?」と、「……ね、こうしましう! ひとつ門番を呼んで来ようじゃありませんか、あいつに二人を起こさせましよう」、「……それがいい!」と二人は下におりて行きかけた。「……まあお待ちなさい! あなたはここに残つてくれませんか。僕がひとつ走り門番を呼んで来ますから」、「……なぜ残るんです?」、「……だって、何が起こるか分からないじゃありませんか?」、「……それもそうだな」、「……僕はね、実は予審判事になる準備中なんですよ! これは確かに、確かに何か異変があるんですよ!」と、若い男は熱心に叫んで、ばたばたと階段を駆けおり

て行った。

コッホはあとに残って、もう一度そつと呼鈴よひりんを動かしてみた。すると呼鈴よひりんは一つがらんと鳴った。それから、彼はまるで検査や思案をしたりするような具合に、そつとドアのハンドルを動かし始めた。ドアがかんぬき門かどだけで閉ましまっているのかどうか、もう一度確かめようとして、引いたり放したりするのであった。やがて、ふうふう息をはずませながら、かみ込んで、鍵穴かぎあなをのぞきかけた。が、それには内側から鍵が差し込んであったので、何も見えなかったはずである。

*

*

ラスコーリニコフはじつと突つ立たつたまま、斧を握りしめていた。彼はまるで熱に浮かされているようだった。もし彼らがいって来たら、二人と戦おうとさえ覚悟していた。彼らがドアを叩いたり話したりしていた間、彼には幾度も、ひと思いに一切を解決してやろう、中から彼らをどなりつけてやろうという考えがふいに起おこった。ともすると、彼は、彼らがドアを開けるまでの間、彼らと罵ののり合あつたり、からかつてやつたりしたくてたまらなくなかった。「……もうどうでもいい、早く何とかなれ！」と、こういう考えが彼の頭にひらめいた。一方、「……それにしても、あの野郎、馬鹿にしてやがる……」、時は過ぎて、一分、二分——誰も来なかった。コッホはもぞもぞ身動きし始めた。「……ちえつ、くそつ……」と、彼はふいに我慢を切らしてこう叫ぶと、張り番をやめて、急いで、階段に靴音をこつこつさせながら、同じように下において行いった。足音は遠ざかった。

ラスコーリニコフは、「……ああ、どうしたもんだらう？」と、門かどを抜いて、ドアを細めに開けた。——何にも聞こえない。とふいに、もう全く何も考えないで外へ出ると、出来るだけびつたりドアを閉めて、下の方へおりて行いった。彼がもう階段を三つおりた時に、ふいに下の方で騒がしい物音が聞こえた、——どこへ身を隠そう！ どこにも隠れる場所はない。彼はまた老婆の住まいへ駈かけ戻ろうとした。

「……やい、こん畜生！ 待ちやがれ！」と、叫び声とともに、誰やらどこか下の方の部屋から飛び出して、駈おけ下おりるといふよりは、階段を転ころげるように下りて行きながら、喉のどいっぱいわに喚わき立たった。「……ミーチカ！ ミーチカ！ ミーチカ！ ミーチカ！ ふざけると承知しねえぞ！」と、やがて叫びは高い金切り声になってしまい、最後の響きはもう外で聞こえた。あたりはしんと静まり返った。けれどその瞬間に、何人かの人ひとが、大声でがやがや話をしながら、騒々しく階段を上あがって来た。三人か四人らしかった。彼は若い男のよく響く声を聞き分けた。「……あの連中だ！……」と彼は思った。

もうすっかり自棄やけになって、彼はまっすぐ彼らの方へ向かって進んだ——どうにでもなるようになれ！ 呼び止められたら万事休すだ。うまく通り過ぎたところで、やはり万事休すだ。顔を見覚えられる。すでに彼らもう両方から近づいていた。彼らの間には、もう階段一つ余すばかりだった。すると、突然思いがけない救いが現われた！ 彼から数段を隔へてた右の方に、開け放はなした空き部屋があった。それは、例のペンキ屋が仕事をしていた二階のあの住まいだったが、たつた今、喚わきながら駈かけおりて行いったのは、きつと彼らに違ちがいがない。床板ゆかはちようど塗りあがったばかりのところところで、部屋の真ん中にはペンキや刷毛はけのはいった桶おけと欠け皿おけが置いてあった。瞬時に、彼は開け放はなされたドアの中へすべり込んで、壁の陰かげに身をひそめた。それは真まに危機一髪で——もうその時、彼らは踊り場に立たっていた。それから彼らは上の方へ曲まがって、そばを通りぬけ、声高に話し合あい

ながら、四階をさして行つた。彼はそれをやり過ごしてから、爪先立ちで部屋を出ると、そのまま下へ駈けおりた。階段には誰もいなかった！ 門の下も同様だった。彼はすばやく門の円天井の下を抜けて、往來を左へ曲がった。

二一、自分の部屋へと帰る

彼はちやんと分かっていた。この瞬間、彼らがもう老婆の住まいに入っていることも、たつた今までしまつていたドアが開いているのを見て、びっくり仰天していることも、彼らがもう死骸を見ていることも、一分とたたないうちに、たつた今までそこにいた犯人がどこかへ隠れて、彼らのそばをすべり抜けて、まんまと逃げおさせたのだと、想像をめぐらして推定するに違いないということも、彼らが階上へのぼって行く間に、犯人が空き部屋にいたことも、彼らは恐らく気づくに相違ない——これらすべてのことを、彼は立派に承知していたのである。それにもかかわらず、彼はどうしてもあまり足を早めることが出来なかつた。しかも、最初の曲がり角までは、ほんの百歩ばかりに過ぎなかつたのだ。「……どこかの門の下へでも忍び込むか、それともどこか知らない家の階段で過ごすとするかな！ いや、それはだめだ！ それより、どこかへ斧を捨てた方がよくはないか！ 辻馬車でも雇うか！ いや、困つたぞ！ 大変だ！」と思うのであつた。

彼の頭の中は混乱していた。やがて、ついに横町まで来た。彼は半ば死んだ人のように、其所（横町）へと曲がった。ここまでくれば、もう半分助かつたようなものである。彼にはそれが分かっていた。疑念も少ないし、それにここは往來が激しかったから、彼は砂粒のように人混みの中にまぎれ込んで行つた。けれど、こうした様々な苦しみ、心身の力を奪い尽くしたので、彼はやつとのことで歩みを運んでいた。玉の汗がぼたぼた流れて、首筋はぐっしり濡れていた。「……どうだ、あの酔っ払つてるさまは！」と、彼が堀割へ出た時に、誰かがこう叫ぶ声が出た。

彼は今はもうはつきりとした意識がなかつた。先へ進めば進むほど、ますますひどくなつた。とは言え、思いがけなく堀割通りへ出た時には、彼は人通りの少ないのに愕然として、ここは人目につきやすい、横町へ引返そう、と思つたのを覚えていた。ほとんど倒れそうだったにもかかわらず、それでもやはりまわり道をして、全く反対の方角から家へと帰つたのである。

彼は完全な意識を持たないままで、自分の家の門をくぐつた。やつと階段口までさしかかつた時、初めて斧のことを思い出した。そこで彼は非常な大問題——斧を出来るだけ人目を避けて、元のところへ戻すという大問題にぶつかつた。もちろん、その斧をもとへ戻さないで、いつかあとでもいいから、どこかよその裏庭へでも放り込むほうが、遙かにいいのかも知れないということ、考え合やすだけの力もなかつたのである。

しかし、万事は都合よく運んだ。門番小屋の戸は閉まっていたが、錠は掛かつていなかった。してみると、門番が家にいることは確かからしかつたが、彼は全然思考の能力を失つていたので、いきなり門番小屋へ近づいて、さつと戸をあけた。もし門番が、「……何の用か？」と尋ねたら、彼はいきなり斧を渡したかも知れない。だが、門番はこの時もあり留守だったので、彼はまんまと斧をもと通り腰掛けの下へ置くことが出来たばかりか、前と同様に薪で隠しさえ出来た。彼はそこから自分の部屋まで、誰にも猫の子一匹にも出

会わなかった。おかみさんの戸口も閉まっていた。自分の部屋へ入ると、彼はいきなり着のみのまま長椅子の上へ身を投げ出した。彼は睡りこそしなかったが、しかし前後不覚の状態であった。もしその時誰かが部屋へ入って来たら、彼はすぐさまはね起きて、(何か)叫び声を上げただろう。何ともとりとめのない想念の断片や破片が、やたらに頭の中をうようよしていたが、彼はいかに努力しても、その一つさえつかむことが出来なかったし、その中のどれにも頭を集中させることが出来なかった。

*

* (第一編・完)

第一編のまとめ

一、老婆殺しのきつかけ

さて、主人公（ラスコーリニコフ）の「頭の中」（或いは「心の中」）に「老婆殺し」という「考え」が浮かんで来たのは、一体、何を「きつかけ」としてかとあらためて考え直してみた時に、主人公（ラスコーリニコフ）の「頭の中」（或いは「心の中」）に浮かんで来たのは、次のようなことであった。——まず、そもそも「老婆殺し」の発想の「原点」そのものは、一体、どこから始まるのかと問えば、それは、半年前、授業料が払えず、大学を退学する時に、独自の「論文」（特殊な人間）というものを書いた時からであり、その「特殊な人間」という「考え方」が「潜在意識」としてあつたからこそ、やがて、「老婆殺し」という具体的な「考えや想い」などが生じて来ることにもなるのである。

それは、まず、実際に今からひと月半ばかり前に、主人公（ラスコーリニコフ）は、金貸しの「老婆」（アリョーナ・イワーノヴナ）のところに、妹が別れの時にくれた金の指輪を質草として、老婆をたずね当てた時に、「……ひと目見たばかりで、まだ何にも知らないうちから、彼女に対してどうにも抑えきれない嫌悪を感じた」とある。この時に、なぜか「……この老婆ならば、たとえ殺しても構わないかも知れない」という漠然とした「思い」がふと浮かんで来たのかも知れない。そして、その帰りに、ある安料理屋へ立ち寄り、そこで、一人の大学生と若い将校とが一緒にいて、大学生の方が、次のような話をしているのを耳にするのである。それは、「……僕はあの呪うべき老婆をぶち殺して、金をふんだくってやったって、大丈夫、何ら良心に恥じるところはない」と。さらに続けて、「……一方には、無智な、無意味な、何の価値もない、おまけに因業で、何人にも用がないどころか、むしろ万人に害のある、その上、自分でも何のため生きているかも知れない、そして今日明日にもひとりで死んでゆく老婆がいる」。そして、「……もう一方には、金が続かないばかりに空しく失われてゆく、若い、新鮮な力がある。しかもいたるところ無数にあるんだ！ 修道院へ寄付される老婆の金さえあれば、建設し復活することのできる、百千の立派な事業や計画があるんだ！ また幾十の家族が、それによって、窮迫から、腐敗から、破滅から、墮落から、花柳病院から救われるかもしれないのだ。——それがみなあいつの金でだ。奴を殺してその金を奪え！ ただしそれは、しかるのちその金を利用して、全人類への奉仕、公共事業への奉仕にわが身を捧げるといふ条件のもとにだ。——君はどう思うかね。一個の最小なる犯罪が、数千の善事でつぐなえないものだろうか？ わずか一つの生命のために——数千の生命が腐敗と墮落から救われるんだぜ。一つの死が百の生に変わるんだ。——これは一個簡単な数学問題じゃないか！ それに第一、一個の肺病病みで、愚劣で、因果な老婆の生命が、生命全体の量に対して何ほどの意味を持つところなのか？ 虱や油虫の生命と、何の選ぶところがあるのか？ いやむしろそれにも劣るよ、なぜって、老婆のほうはむしろ有害だからさ。第一、奴は他人の生命を食っている——奴は業つくばりだ。この間も腹立ちまぎれに、リザヴェータの指に食いついて、すんでのこと噛み切ってしまうところだったとある。この「会話」が、なぜか主人公（ラスコーリニコフ）の「頭の中」（或いは「心の中」）に残って何らかの働きかけを受ける。そして、ひと月前からは、主人公（ラスコーリニコフ）は、部屋に閉じ籠もっては、まさに「老婆殺し」のことばかりを考えるようになってしまったということである。

ちなみに、この若い大学生の「論理」（理屈）というものは、極めて「幼稚なもの」であり、例えば、この大学生にしてみても、若しも自分（大学生自身）が「老婆の立場」であった場合、喜んで犠牲になって死んでいけるのか？ また、祖父母をはじめ、親兄弟（姉妹）親戚、その他が「老婆の立場」であった場合、無残に殺されてもそれをよしと考えることができるのか？ できるわけがない。また、「老婆」を虫けら同然と勝手に決めつけているが、「老婆」の「全人生」（全人格）のいったい何を知っているというのか。また、「老婆」を殺しても、それを悲しむ親兄弟（姉妹）親戚、その他など一人もいるはずがないと、なぜ、そう言い切れるのか？ すべては、外からのちよつと見て勝手にそう決めつけているだけである。——例えば、よくホームレスを若い人たちが襲う事件が起こることがあるが、その場合、若い人たちは、ホームレスなどは、所詮、人間のクズ、虫けら同然と思つて襲うのかも知れないが、しかし、誰が好んでホームレスなどになるだろうか。実に様々な理由があつてやむを得ずそうしているのであり、それらすべてを本人だけの責任だとなぜ言い切れるのか？ 本人の努力だけではどうにもならないことだつていくつもあり、実に様々な「悲しみや苦しみ」などを背負っている人たちを、虫けら同然に面白がつて、「殴り殺し」にする行為の方が、遙かに「人間性を欠いた行為」になるだろう。なぜ、それに気づかないのか？ 若い時には、どうしても「一面」からしかものが見えず、自分（たち）に都合のよい「論理」（理屈）を振りかざして、例えば、勇気でもないことを勝手に勇気だと思ひ込んで、逆に無謀で愚かなことを行なったり、また、正義でもないことを勝手に正義だと思ひ込んで、かえつて不正なことを行なったりするものである。

*

*

さて、ここで最も大事なことは、この「安料理屋」での大学生と将校との「談話」というのは、妹が別れの時にくれた金の指輪を質草として、主人公（ラスコーリニコフ）が初めて高利貸しの老婆をたずねた、その帰りに寄つた「安料理屋」であり、それは、ひと月半ばかり前のことである。そして、その後、ひと月前からは、主人公（ラスコーリニコフ）は、部屋に孤独閉じ籠もつては、まさに「老婆殺し」の中心にあれこれ考えるようになってしまふ。そして、空想に耽つていたその「老婆殺し」の「瀬踏み」（下見）として、今度は、事件の三日前に、父の形見の古い銀時計を質草として、二回目、高利貸しの老婆をたずね、室内の様子をできるだけ記憶しておこうと、すばやく室内のすべてに眼を走らせる。その帰りにたまたま寄つた「酒場」で、女主人公（ソーニヤ）の父親（マルメラードフ）に偶然出会い、その酔つた父親（マルメラードフ）を家まで送り届ける。その翌日の朝、「九時すぎよ」と、女中のナスターシャが彼を起こすとともに、一通の手紙が来ていることを告げられるが、それは母親からの「長い手紙」であつた。

さて、主人公（ラスコーリニコフ）は、その母親からの「長い手紙」を涙ながらに読み終えると、この狭い部屋にすることがどうにも息苦しく感じられ、帽子を手に持ち、すぐにも外へと出かけた。そして、人出の少ない並木通りを歩きながら、とにかく、人間性に問題のある「弁護士」と愛する「妹」との結婚は、何が何でも阻止すると固く決心するのであつた。やがて、疲れを感じて、ベンチで休もうと探していると、一人の酔つた若い女性がふらふら歩いているのが目に止まる。しかも、その後をつけるような紳士まで一人いて、酔つた若い女の子は、やがてベンチまで来て倒れてしまふ。一方、主人公（ラスコー

リニコフは、その一人の紳士の方へと近づき、「……君はここに何の用があるのだ？」
「(さつさと)ここを去りたまえ！」と言うと、「なんだと生意気な、悪党め！」と、お互い殴り合いの喧嘩になりそうになるが、そこに割って入ったのが一人の「巡査」であり、主人公は、その「巡査」にお金を渡して、酔った女の子を辻馬車で家まで送らせてくれと頼む。が、やがて、ふと「……若しかしたら、この巡査も酔った女の子をつけて来たのではないか？」と思い直して、自分で自分の「お人好し」を笑ってしまうのであった。

さて、三人が去った後、ラスコーリニコフは、ふと自分はどこへ行くつもりで外に出たのかを、急に考え出しては、「……そうだ、ラズーミヒンのところだ」と思い出す。それは、「……今ではなく、あれがすんだ翌日行くんだ」と考え直して、彼はベンチから離れて、家の方に引返そうとしたが、家へ帰るのが急に厭わしい気持ちになり、足の向くままに歩いて行った。やがて、料理店のそばを通りかかると、何か食べたいと思い、その料理店で、ウオーツカを一杯ひっかけて、何かをつめたものを食べ、その往来を歩き続けていくと、酔いが回ってきて、ひどく眠気を催してきたので、「……往来から下りて糞の中に這入り、草の上に倒れると、そのままぐっすり寝込んでしまった」とある。

そして、ここで有名な「悪夢」を見ることになるが、その「悪夢」から目覚めると、ラスコーリニコフは、「……いや、おれには出来ない。とても出来ない！ よし一切のこの計算に何の疑いもないにしても、このひと月の間に決められたことのすべてが、日のように明らかであり、数学のように正確であるとしても、ああ！ やはりおれは決行は出来ない！ とても出来ない。とても……」というような「心の状態」(つまり「老婆殺し」計画の中止)へと大きく変化するのである。

それはちやうど、彼の心臓内でまる一カ月も化膿していた腫物が、急に口があいたようなあんなばいだった。「……自由、自由！ 今こそ彼は、ああした妖術から、魔法から、誘惑から、まどわしから、自由の身となった」のである。……

ところが、彼は、その日、自分は疲労困憊をしていて、一番近いまっすぐな路をとって帰るのが何よりも得策だった際に、何がゆえに、遠まわりをして何の用もない草市場を通ったのだろうか？ それは、まるで「運命」に導かれるように、わざわざ遠まわりをして草市場を通ったのは、夜九時頃であったが、そこで、偶然にも老婆の義理の「妹」(リザヴェータ)を見かけることになる。そして、その彼女が、草市場で商人夫婦と会話をしている、「……あす七時ごろに出ておいでなさいよ」。「……じゃ行くでしょうかね？」という会話を、たまたま耳にして、「……彼は知ったのだ。しかもふいに、偶然に、まったく思いがけなく知ったのである。あすの晩、きつちり七時に、あの老婆にとつて唯一の同居人である義理の『妹』(リザヴェータ)が、うちにいないということをし、ぜん老婆は、晩の七時には、一人きりでうちにいるだろうということ……」。まさに「この瞬間」、すべてが決定づけられてしまった。彼の「迷い」は、一瞬にして消えて、「……一切がふいに、絶望的に決定されてしまったのである」。

それは、「……(突然)こうして思いがけなく(決定的瞬間が)やって来て、万事を即座に決定してしまった最後の日は、ほとんど(本人の意志とは別に)機械的に彼に作用したのである。さながら何者かが彼の手をとって、否応なしに、盲目的に、超自然的な力で、無理やりに引っぱって行ったようなものであった。まさしく彼は、着物のししを機械の輪にはさまれて、じりじりと巻き込まれていくようなものであった」のである。

さて、草市場から帰ると、彼は長椅子の上へ身を投げて、まる一時間も身動きしないで腰かけていた。やがてそのうちに暗くなつて来た。彼のところには蠟燭もなかったが、また灯を付けようという考えも起こらなかった。いったい彼は、その時何かのことについて考えていたのかどうか、それすらどうしても思い出せなかった。遂に彼はまた、先刻と同じ熱と悪寒とを感じた。そして、今は長椅子の上にそのまま寝ることも出来るのだと気づき、この上なく嬉しく思った。間もなく、重い鉛のような睡りが、まるで彼を押し潰すように襲いかかつて来た。

二、老婆殺し

さて、彼は、翌朝は、朝十時頃に揺り起こされた。賄いをしている女中（ナスタシヤ）であつた。二時にも、やつて来たが、その日、彼は、食事以外は、ほとんど寝ていて、起きたのは、六時過ぎであつた。——彼は、考える上にも考えて、万事手落ちのないように、全力を傾倒した。まず、外套の内側に輪綱を縫い付けた。それは、斧を隠すためのものである。また、質草（細工の巻煙草入れ）も持った。そして、斧は、台所で調達する予定であつたが、女中（ナスタシヤ）がいたので取れず、たまたま戸の開いた「門番小屋」の中の腰掛けの下にあつた斧をふと見つけ、それを外套の内側に隠した。そして、街路を歩き、やがて老婆のアパートの階段を静かに上がって行つた。そして、三度目の呼鈴で、老婆は、ようやく顔を見せ、彼は、部屋の中へと入つた。そして、質草「細工の巻煙草入れ」を見せると、老婆は、ひもを解こうとして、窓の方へ、あかりの方へ振り向いた。その時（背を向けた時）、彼は、外套の中の斧に手をかけ、そして、老婆が彼の方へと身を捻りかけた時、斧を取り出し、老婆の頭の上から両手で数回振り下ろした。老婆は床に倒れ、彼は、老婆のポケットから鍵を取り出し、それを持って、寝室の方へと駆け込み、まず、筆筒の鍵穴に鍵を入れても合わず、ふと老婆が生き返るのではないかと思つて、老婆のところへと戻るが、老婆はすでに死んでいて、その老婆の首に掛かつてあつた紐付きのサイフを切り離し、そのふくらんだサイフをポケットに入れ、そして、再び、寝室に駆け戻つて、鍵で筆筒を開けようとしても開かなかつた。そこで、今度は、ベツトの下にあつた鞆を引き出しては、その鍵穴に鍵を入れると開き、中には様々な衣類やばる切れがあり、その下の方のぼれ切れの間から質草（様々な金属類）が出てきて、それを包み紙やサツクのままズボンと外套の両ポケットへと詰め込んでいた。

ふいに、老婆が倒れている部屋で、人の歩く音が聞こえた。また、ふいに微かな叫び声や、というよりは、誰かが低く切れぎれに呻いて、すぐ黙つたらしい気配が、はつきりと聞こえた。彼は、鞆のそばにうずくまり、息を殺して待つていたが、急に飛びあがると、斧をつかんで、寝室から駆け出した。部屋の真ん中にはリザヴェータが、両手に大きな包みを抱えたまま棒立ちになり麻痺したように、殺された姉を眺めていた。そして、その躍り出て来た彼を見ると、片方の手を前に出して、怯えながら声も出せずに後ずさりする彼女に向かつて、斧は彼女の顔の真上へ振り上げられ、そして、振り下ろされた。彼は、ひどくまごついてしまい、入口の間に駆け出した。一刻も早くここを逃げ出したいと思つた。今ではもう、たとえどんなことがあつても、鞆のそばはおろか、あの部屋へすら引つ返

して行く気はなかっただろう。けれども、一種の放心が、瞑想というべきものが、しだいに彼を領し始めた。そして、台所をのぞいて、腰掛の上に半分水のはいつたバケツを見つけた時には、彼は自分の手や斧を洗うことに気がつき、血にまみれた「手と斧」を丹念に洗い落とすとともに、薄暗い台所の光のなか、外套やズボンそれに靴などを調べたあと、「……ああそうだ！ 逃げなければ」と呟いて、入口の間へ飛び出した。すると、入口のドアが開けっ放しになっていたことを見て、驚愕し、すぐにドアの門をさした。

しかし、自分は、何をしてるのだろうか？ ここから出なければならぬというのに。そこで、ドアの門をあけて、外の物音などを確認しながら、そうつと外に出るが、下の階段から上へと上がって来る足音が遠く聞こえて来る。そこで、再び、部屋の中に入って、ドアの門をさして、そこに身をひそめる。やがて、四階まで上がって来た一人の男は、部屋の呼鈴を何度か鳴らしながら、ドアを叩いたり、引っぱったりするが、中からは何の応答もなければ、誰も出てこない。やがて、もう一人の男もやって来て、何でいなんだと二人とも不思議がる。ふと、一人の男が、ドアに門がさしてあることに気づく。そして、ドアに門がさしてあるということは、誰かが中に居るといふことである。もしかしたら、中では何か大変なことが起こっているのかも知れないといふことで、一人残して、下まで門番を呼びに行くが、なかなか戻って来ないので、その残った一人も下へと降りて行ってしまう。それを察知した主人公（ラスコーリニコフ）は、こっそり部屋から出て、階段を二階まで降りてくると、再び、下の方からがやがやと階段を上がる声が聞こえて来る。そこで、たまたま目の前にドアの空きっぱなしになっていた部屋へとすばやく身を隠す。そして、下の人たちが通り過ぎた後、何とか誰にも見られずその場を逃げ出し、そして、老婆の台所で洗い落とした斧は門番小屋の元あったところに戻し、そして、自分の部屋へと戻って来るといふ展開（ストーリー）になるといふことである。

*

*

さて、このような事細かな「内容説明」をすることは、かなり異例なことであるが、それでは、なぜこのような事細かな「内容説明」を敢えて行なっているのかと言えば、それは、従来の「記述方法」では、この『罪と罰』という作品の、まさにその生々しい「感じ」といふものが、どうしても実感出来ないとと思うからである。そして、その生々しい「感じ」といふものが実感出来なければ、ここでいくらかその「内容の分析」を事細かにしても、所詮は、実感の伴わない空しい「観念的な説明」になってしまい、いわゆる生々しい「実感の伴ったもの」にはならないからである。それゆえ、いわゆる生々しい「実感の伴った内容」にするためにも、どうしても必要な「記述方法」（つまり「本文を多用する方法」）になってしまったといふことである。

三、リザヴェータの殺害

それでは、なぜ、老婆の義理の「妹」（リザヴェータ）は、主人公（ラスコーリニコフ）によつて、殺されたのか？ 或いは、なぜ、殺されねばならなかったのか？ この何の罪もない義理の「妹」（リザヴェータ）は、なぜ、このような残酷な「殺され方」をしなければならなかったのか？ ここにこそ、作者の深い「思いや考え」などが奥深く隠されているのである。——つまり、作者は、この義理の「妹」を「老婆殺し」のついでに殺した

のではない。また、「物語」（ストーリー）を複雑にするために殺したのでもない。彼女を殺したのには、次のような極めてはっきりとした「理由」があったからである。

つまり、われわれ「人間界」というのは、まさに「意図的なもの」と「偶然（偶発）的なもの」との「絡み」（つまり「組み合わせ」）から成り立っている。そして、この「二つのもの」が実に複雑かつ微妙に絡み合っては、まさに現実の「人間界」というものは、絶えず形成されているのである。——例えば、主人公（ラスコーリニコフ）が、いわゆる「老婆殺し」をしたのは、まさに「意図的なもの」であり、一方、その義理の「妹」（リザヴェータ）が殺されたのは、むしろ「偶然（偶発）的なもの」であった。つまり、彼（ラスコーリニコフ）自身は、彼女（リザヴェータ）を殺そうなどとは露ほどにも考えてはいなかった。たまたまそこに偶然居合わせたというただそれだけである。——ただ、それだけの理由で「殺されて」しまったのである。ほかにいかなる理由もない。しかし、それこそが、まさに「現実」なのだと言いたいのが、いわゆる作者の「本心」なのである。いいも悪いもない、それが、まさに「現実」そのものだと言いたいのである。つまり、「老婆殺し」というのは、まさに「意図的なもの」の象徴であり、そして、その義理の「妹」（リザヴェータ）の惨殺は、まさに「偶然（偶発）的なもの」の象徴なのである。

例えば、たまたまその飛行機に偶然乗り合わせたというただそれだけで、例えば、飛行機事故に遭遇して死んでしまう。それは、船舶や鉄道或いはバスや自動車、その他の場合でも全く同じことであり、たまたまその乗り物に偶然乗り合わせたというただそれだけで、事故に遭遇して死んでしまう。また、たまたまそこに偶然居合わせたというただそれだけで、例えば、「テロ行為」のその爆破によって、多くの人たちが「犠牲」になってしまふ。或いは、たまたまそこに偶然居合わせたというただそれだけで、例えば、ライフル銃乱射、その他などの無差別殺人の「犠牲者」になってしまふ。これらは、一体、どういうことを意味しているのだろうか？ それは、われわれ「人間界」というのは、まさに「意図的なもの」と「偶然（偶発）的なもの」との「絡み」（つまり「組み合わせ」）から成り立っているということである。そして、「テロ行為」やライフル銃乱射などは、まさに「意図的なもの」であるが、一方、その「犠牲者」たちは、むしろ「偶然（偶発）的なもの」になるということである。しかも、たとえ同じ「事件や事故」などに遭遇（つまり「巻き込まれた」）としても、結果として、助かる人とそうではない人とに大別されるかと思うが、その場合、なぜ、ある人たちは助かり、そして、なぜ、ある人たちは助からなかったのかは、極めて「偶然（偶発）的なもの」（つまりは「偶然が支配」しているものであり、それゆえ、何とも説明のしようがないものであり、それを敢えて説明しようとするれば、それは、まさに「運がよかった」としか言いようがないということである。

四、無差別殺人者

例えば、無差別殺人者は、突然、無差別殺人者になるのではない。そのためには、長いいわば「負の感情」の積み重ねがなければならぬ。例えば、ある人にいじめられれば、その人を恨み、また、ある人に馬鹿にされれば、その人を憎む。或いは、ある人に虐待されれば、今度は、その人に殺意を抱く。その他、そのように、実にいろいろな人々たちから実に様々な形でいじめられた人は、最初のうちは、あの特定の相手に「恨みの感情」を抱

くものであるが、あまりにも数が多くなり過ぎてしまうと、今度は、特定の相手だけを憎むだけでは、とても追いつかなくなってしまい、最後には、まさに「人間」そのものへの「恨み」(怨念)へと変貌してしまうということである。そうなると、今度は、特定の相手ではなく、「……人間であれば、もう誰でもいい」という、まさに典型的な「無差別殺人者」の「心理状態」が、初めてここに形成されるのである。例えば、アメリカなどでもよく発生する「ライフル銃乱射事件」なども、多くの場合、それは、さんざんいじめられた人の、いわば人間への「復讐劇」になっている場合が多いのだろう。

五、自爆テロ

例えば、「自爆テロ」というのは、まさに「報復行為」である。それは、味方の最少限度の「犠牲」で、まさに相手側に「最大の被害」を与えようとする行為である。しかも、「相手」(標的)が数多くいるような時、また、「相手」(標的)が数多く集まっている所、或いは、「相手」(標的)のまさに「重要拠点」、そして、できれば、「相手」(標的)が有頂天(或いは浮かれている)のような時、そのような時を狙って、まさに確実に「任務を遂行」するということである。その「目的」は、最大の成果を上げることである。それでは、なぜ、血で血を洗うような「争い」は、絶えないのだろうか？ それは、絶えないのではなく、むしろ「絶えないようにしている」のである。それは、一体、なぜなのか？ それは、自分たちの「存在」を示すためであると共に、絶えてしまえば、自分たちの「敗北」を認めることになるからである。だからこそ、どうしても「やめること」ができないのである。戦い続けなければならぬ。それでは、「和解」は、永遠にでき得ないのだろうか？ ——「和解」が成立するためには、どうしてもお互いが「歩み寄る」「妥協し合う」以外、いかなる道もないのである。しかし、たとえ両者が「和解」(つまり「歩み寄ろう」「妥協し合おう」としても、一部の「反対勢力」などによって、もろくもぶちこわされる場合も非常に多い。——つまり、いわゆる「話し合い」での「和解」というものが遅々として進まないとすれば、いっそむしろ圧倒的な「力」(勢力)を以って、相手側を「制圧する」(抑えつけて)しまったほうが早い。——それが、まさにわれわれ「人類の歴史」そのものなのである。

六、和解

それでは、「和解」(「歩み寄る」「妥協し合う」)道は、永々に閉ざされているのだろうか？ もちろん、そういうことには決してならない。例えば、有名な「大岡裁き」の中でも、特に有名なもの一つに、いわゆるお互いが「一分損」という「考え方」がある。

この「考え方」は、極めて有効な「考え方」であり、それは、次のようなことである。例えば、売り手は、この商品は、絶対に「一万円」でしか売らないと「主張」(言い張って)いる。一方、買い手は、その商品は、絶対に「五千円」でしか買わないと「主張」(言い張って)いる。この状態では、永遠に「問題」は解決しない。つまり、「和解」(この場合「商談成立」)のためには、お互いが「歩み寄る」(つまり「妥協し合う」)なければ、成り立たない。そこで、売り手の方が折れて、それなら、「八千円」でどうだと提案した

とする。それに対して、いや、「七千円」までだと返答したとする。もちろん、この状態では、完全な「和解」（この場合「商談成立」）にはなっていない。しかし、お互いが「歩み寄っている状態」（つまり「妥協し合っている状態」）であることに間違いはない。それゆえ、「完全な状態」ではないが、しかし、ここが、まさに「落とし所」の一つとなり得るのである。もちろん、売り手の方が、「七千五百円」まで下げてくれれば、買い手も、それにすぐに「同調」することになるだろう。この場合であれば、最初の値段に比べれば、お互いが「二千五百円」の「損」になる。——つまり、「和解」（つまり「歩み寄る」「妥協し合う」というのは、お互いの最初の「主張」に比べれば、お互いが確実に「損をし合う」ということである。その「損」をお互いどこまで認め合えるかが、まさに「妥協点」であり、まさに「決着点」でもある。お互いの「主張」が百分完全に通るなどということとは、永遠にあり得ないのである。それゆえ、最大の「問題」は、どこまでお互いが「歩み寄れるか？」ということである。

もちろん、問題の「解決」には、一つは、合法的な「解決方法」と、もう一つは、非合法的な「解決方法」とがある。そして、合法的な「解決方法」というのは、基本的には、例えば、裁判をはじめ、議会の決議、多数決、話し合い、その他、そのような「方法」で問題の「解決」を図るということである。一方、非合法的な「解決方法」というのは、いわば「法」（規則）に従わない「方法」であり、それゆえ、何らかの「不正的なもの」（或いは「犯罪的なもの」）は、基本的には、すべて非合法的な「解決方法」になるということである。——例えば、殺人を初め、暴行、傷害、脅し（脅迫）、賄賂（接待）、詐欺、恐喝、横領、証拠隠滅、陰謀、クーデター、暴動、略奪、放火、その他、何らかの「不正的な方法」（或いは「犯罪的な方法」）によって、問題の「解決」（或いは「利益」）を図ろうとするものである。——そして、ドストエフスキーという作家は、どちらかと言えば、何らかの「犯罪的な世界」（いわば「犯罪者の心理」）というものを、それは、地上の「明るい部分」ではなく、むしろ人間の地下の「心の闇」を描いていることになるだろう。そして、ドストエフスキーという作家とは、一体、どういう作家であるかと敢えて問えば、それは、後述の新聞に載った「彼の論文」の題名でもある、それは、まさに「……犯罪、遂行の全過程における、犯罪者の心理状態の研究」を徹底的に行ない、それを様々な「小説」のなかで表現し得た人であったということである。

七、殺害後の展開

さて、「老婆殺し」後の「展開」は、次のようになって行く。まず、運よく誰にも見られず自分の部屋へと戻った主人公（ラスコーリニコフ）は、長椅子に長く横になっていたが、ふと目が覚めると夜中の二時になっていて、はっと気づいて、急いで自分を調べ始める。それは、最初、服を着たままであったが、それではだめだと思い、身につけたものを残らず脱ぎ捨てて、再び入念に徹底的に調べあげると、ズボンの裾が裂けて、房のようにぶら下がっているあたりに凝血した濃い血痕が残っていたので、それをナイフで切り取ったあと、ふと老婆のところへ奪い取ったものを思い出しては、あちこのポケットに入っていた様々な「品物や財布」などは、すべてテーブルの上にはうり出し一かたまりにしてから、それを部屋（へや）の一番隅（すみ）この下の方の壁紙が破れてぶらさがっている一箇所（ひと）の穴の中

へとすべて押し込んで隠すが、まだ何かあるのではと不安になり、今度は、服の脇わきの下の輪わのことを思い出しては、それをひきちぎり、急いでずたずたに引き裂いてから、枕の下の洗濯物の中へと押し込んだ。また、財布に血がついていたことも思い起して、ポケットを裏返してみると、まさに血痕と汚点しみがついており、それも全部ひきちぎり、さらに、長靴の中なかからのぞいていた靴下くつ下の爪先つまさきも血でべとべとになっていた。……

さて、この靴下や、切れはしや、ポケットをどこへ隠したものだろう？ 彼はそれをすつかり手の中へかき集めて、室むろのまん中に突っ立っていたが、やがて長椅子に腰を下ろしては、「……今すぐ、今すぐ、愚図愚図しないで！……」と、「頭の中」(或いは「心の中」)ではそう思うけれども、彼の頭はまたしても枕の上へと傾いてしまい、たえがたい悪寒が彼を凍りつかせてしまうと、またしても彼は外套をひつかぶってしまい、そうして長い間、数時間もの間、たえず一つの想念がちぎれちぎれに彼の夢をおとすれた。「……すぐに、ぐずぐずしていないで、どこかへ行って、何もかも捨ててしまわなければ、人の眼につかぬように、今すぐ、急いで」と、彼はあせって幾度も長椅子から起きあがろうと身をもがいたが、もうそれもできず、夢うつつに寝てしまうのである。……

そして、朝、十時過ぎ、ドアをはげしく叩く音で起こされる。それは、門番とナスターシヤであり、役所からの呼出状を持っており、家賃滞納で大家おおやから訴えられ、本日九時三十分に、区の警察署まで出頭せよという内容であったが、この場面での会話のなかで、ナスターシヤは、「……なんだかほんとに病気になっちゃったようね？ もう起きない方がいいことよ。病気なら行かなくなっただけいいわ——大丈夫よ。あんな、手に持っているものなかに、それ？」と聞かれて、彼は見た——その右手には切り裂かれたズボンの切れはしと、靴下と、ひきちぎったポケットの裏とが握られていた。彼はそうしたままで寝ていたのである。後になってこのことを考えると、彼は自分が熱に浮かされながら夢うつつに、それらをかたくかたく手の中に握りしめては、また眠りに落ちていったことが思い出された。「……まあ、こんなにぼろきれを集めてき、それをまるで宝物みたいに抱いて寝ているよ？」と、こう言ってナスターシヤは、例の病的な神経笑いで笑いこけた。彼はまたたく間にそれらを外套の下へ押し込んで、じっと眼を据えて彼女を見つめた。そして、彼女が室むろから出て行くと、彼はすぐさま、あかりの方へ駆け寄って、靴下とズボンの切れはしを調べにかかった。「……しみはある、しかしたいして目につくほどではない。すつかり汚れて、もみくたになつて、色もあせてしまっている。予め知っているものでもなければ——なにもわかりやしないさ。ナスターシヤだって、あれだけ離れてたから、何も気がつきやしなかつたらう。まずはよかつた！」と思うのであった。

さて、主人公(ラスコーリニコフ)は、街頭の暑さのなか、自分の家から「二町」(約二五〇呎)ばかり離れた役所へと入って行く。書記を経て、やがて事務官それに副署長さらに署長をも交えての会話になるが、そのなかで、彼は、実は三年前から今の所に下宿していて、最初はその大家の娘と結婚するという口約束もあつて、その頃は自分を信用してお金も貸してくれたが、一年前に娘はチフスでなくなつたという内輪話をするが、そんな内輪話は関係ないと、事務官は、私が言うように書けばよいということで、署名すると、隣りで署長と副署長が例の「老婆殺し」の話をしている。その話の「内容」は、金貸しの老婆を訪れた二人が犯人であるはずはないというものであつた。主人公(ラスコーリニコフ)は、帽子をとって、戸口の方へ歩き出したが、戸口までは行けず、卒倒し、気がつく

と一人に抱えられ椅子に座っていた。「……どうしたんです、君は病気ですか？」と署長が聞くと、「……なにしろ、やつとのことで。ペンを動かさし、署名したくらいですからねえ」と事務官、「……もう長く病気なのかね？」と副署長が聞くと、「昨日から」と呟くように答え、副署長は、さらに質問をするが、それは、「昨日外出しましたか？」、「しました」、「病気でいて？」、「病気でいて」、「何時頃に？」、「夕方七時すぎに」、「そしてどこへ行きました？ 失礼ですが」、「町へ」、「簡単明瞭だね」。すると、「この男は立っているのもやつとなんだ、それを君は……」と、署長が注意をしかけると、「いや、なあに？」と、副署長は言い、「さあ、もういいです」、「もうお引き止めはしませんよ」と言い、主人公（ラスコーリニコフ）は、その役所を出ると、正気が戻り、すでに「捜査」は始まっているのだと、急いで自分の部屋へと戻る。

そして、主人公（ラスコーリニコフ）は、自分の部屋に隠して置いた様々な「品物や財布」などをすべて持ち出し、外へと出かけ、最初は、川に投げ込もうと思ったが、誰かが見ていたら危険だということで、結局、空き地の建築材料などの「置き場」へと入って行き、そこで大きな石材を一つ持ち上げ、その下の隙間に様々な「品物や財布」などを入れ、再び、その動かした石材を元に戻して分からないように隠すのであった。その後、彼は、ワシリーエフスキイ島にある小ネヴア河の河岸通りの橋のたもとへ出た時に、ふと思いついて、五階にあるラズーミヒンの住居へと上がって行った。そこで親友からドイツ語の翻訳を手伝ってくれないかと頼まれ、黙って三ルーブリを手にして、家を出るが、戻って来て、翻訳などいらないと言って、三ルーブリを返して、また、家を出る。途中、馬車に轢かれそうになり、鞭で打たれるが、結局、部屋を出て六時間もの間うろつき歩いて、自分の部屋へと戻り、服を脱ぎ、全身をびくびく震わせながら、長椅子の上に身を投げ、頭から外套をひつかぶって、たちまち前後不覚に陥ったとある。……

そして、主人公（ラスコーリニコフ）は、親友（ラズーミヒン）から、「……今日でもう四日、君はほとんど飲まず食わずだったんだからなあ。実際、お茶までさじで飲ませたんだぜ。僕は君のそこへ二度もゾシーモフ（親友の医者）をひっぱって来たよ。覚えているかい、ゾシーモフを？」とある。この場面では、母からの「送金」（三十五ルーブリ）を受け取ることになる。また、「……僕なにか讒言を言ったかね？」と、心配になって何度も聞いている。彼の「精神」状態は、いつも「不安定」であり、それを「今日の言葉」（つまり「医学用語」）で敢えて言えば、それは、まさに「神経衰弱」（或いは「躁うつ病」）に近いものであり、それがよくなったり悪くなったりを絶えず繰り返している。「精神状態」にあつたということである。その後、彼は、コップに残っていたビールを飲んで、再び、六時間も寝入ってしまう。……

一方、親友（ラズーミヒン）は、その間、主人公（ラスコーリニコフ）を一人前の人間に仕立てるためと考えて、送金から「十ルーブリ」だけ手に持って、古着屋へと出かけて行き、靴と衣類それに下着一切を買ひ込んできて、いやがる主人公（ラスコーリニコフ）のシャツをとにかく取り替えたのである。その後、医師（ゾシーモフ）がやって来る。やがて、親友（ラズーミヒン）は、医師（ゾシーモフ）を相手に例の「老婆殺し」の推理を始めるが、その推理の「内容」というのは、次のようなものである。

*

*

まず、最初に疑われたのは、当日、同じ時間帯に、高利貸しの「老婆」を訪ねた二人であったが、その後、ある酒場で「盗品」を金に換えたペンキ屋の職人（ミコールカ）が容疑者として浮かび上がって来る。彼は、最初、その「盗品」は、道で拾ったもののだと言っていたが、実は、次のような経緯があるのである。

それは、犯行があった当日、同じ時間帯に、二階（犯行は四階）では、二人の仲の良いペンキ職人が室内のペンキ塗りをしていた。そして、その仕事が終わって帰り支度をしている時に、一方の職人が、ふざけて「ミコールカの顔」にペンキを塗り付けると、ミコールカは怒って、外へと逃げて行った相手を追いかけて行き、そして、通りで喧嘩をふざけながら始めてしまう。やがて、一方は、すり抜けて逃げ、それを追うが逃げられ、そこでミコールカは、再び、片付けようと二階へと戻って来ると、「……入り口の部屋のドアのそばで、壁のかげの隅へ寄ったところで、このサックを踏んづけやしたんで、見ると、紙にくるんだものが落っこちて」いて、それが「盗品」（耳環）であり、それを持って、すぐにある酒場へと行って、一ルーブリ受け取り、その金で遊びに行ってしまう。その後、盗んだことが分かれば、どんな罰になるかと恐くなって、逃げまわり、数日後に、安宿の納屋の中で、首吊り自殺を図ろうとするところを見られ、その女の大きな叫び声で、人が駆けつけて来て捕まり、警察につき出されたという経緯になる。そして、親友（ラズーミヒン）は、その壁のかげの隅に「盗品」（耳環）を落とした人物こそ、まさに「真犯人」であると推理するのであった。それは、下から階段を上って来る気配に、四階から降りて来た主人公（ラスコーリニコフ）は、素早く反応して、二階のドアの開いていた部屋へと素早く逃げ込んだ時に、その「盗品」（耳環）を落としてしまったということである。

*

*

「参考文献」

※底本 「罪と罰全三卷」 (中村白葉訳) 「岩波文庫」
※底本 「罪と罰上・下」 (米山正夫訳) 「角川文庫」